老が身の人におくるゝならひをばそらにもつぐる郭公かな

時鳥なきゝんかしと深き夜の夢をうたがふわりわけのつき

一聲はなごりの月のかげきえて雲もとかるゝ山はとゝぎす

一聲にすぎゆくかたゝ見し春のちりにし花の山はとゝぎす

郭公くもはたての一聲にこゝろそらなるものをこそ思へ

百千かへりなくかと見れば山松のこゑをさらぬ時鳥かな

郭公なくよといへどきかざりければ戯に

時鳥いつか過けりそよなくといひもてはやす聲はまぎれに

あやめを　たが軒も賤がいほりの露けさを忘れじとてや菖蒲ふくらむ

軒近き花たちばなのかをりゆもわやめわかるゝ露の朝かぜ

陽明家の下りゝまひける時とゞめられるもの其供ゆ加はりて御館にゝび寐すると聞しかど

菖蒲をやるとて

菖蒲草みつばよつばの軒端ゆもさすが旅寐の露やかゝらむ

橘を　橘のかばかりかはる袂ゆもむかしみはしのもとゝわすれず

橘のつゆちる袖のゆふ風にかけしやいつのなみだなるらむ

五月雨

橘の今をむかしとかをるよにゝのぼむ人のそでもゆかしき

八目のみかれゆく軒の五月雨にいとゞ生ひそふ葎よもぎふ

松風もこのごろたえて玉水のおとつれかはる五月雨のそら

昨日かもふりいでしものを五月雨の幾日とたどる窓は徒然

くゞかけの聲もくもりて烏鵲も横ぐもたどるさをざをの空

梅の實ゝみどりの中に色わきてくゝなゐ匂ふ五月雨のあろ

夕月もむなしくすぎて有明のいまもつれなき五月雨のそら

五月雨の雲間なりげり夕月のはの見しかげをけさに思へば

五月雨の深きゝめりにむら〳〵と霜を見せゝるなつのさ莚

早苗　うゑそむる小田のさ苗にもる庵の秋の露さへ早かきにけり

千町田のさ苗は色ゝわかねども水はみどりに夕かぜぞふく

月を　月すめるみどりの空に白雲のむら〳〵のこる夏のさよかぜ

月かげゝ秋にまさごの夜はの霜ふらぬ雨きく木々のゝた風

五月雨のはれしと見れば蚊遣火に又かきくもる夏の夜の月

まだ宵の空と見るまに影ふくるみじかき軒は夏はよのつき

草を　茂るとてかなじ草葉の緑かい花こそさかねつゆのいろ〳〵
生ひいでし姿もいまいとすれ草こい去のぶなり野邊のさ蕨

螢　風わたる蘆べすゝしき難波江やつのぐむ蘆を夢のまゝして
夏山のこのまもりくる月かげにむら〳〵きえて螢とぶゐり

夕顔　月影に色そひてしも蚊遣火のけぶりにくもる夕がほのはな
からもふり　からも羽にかく色ならで白妙の露のゆかりは花のたまづさ

夕立を　遠方のこりしく中にひとむらの白雲はしるゆふだちはそら
時のまに日影くもりてふる雨はかぜりもゝしき夕立のそら

池水にうゝみる雨をなぐりゐてよそにもぎゆく夕立のそら
なく蟬に夏をのこして夕立のなぐりのつゆに秋かぜぞふく

蚊遣　煙ゐも入日へだてゝくれそひぬ軒端みじかき宿はかやりゝ
蚊遣する扇もいとゝてがるゝや妻まつ賤がたそがれのやど

遠を　ふく風にはすの立葉のうら見えて花は香去めるる夕ぐれの雨
法の道のたとへにひきしうき名のみわたら遠の濁とぞみる

照射　ねにたてぬ夏野の鹿のかもひをやよはの照射の影にみゆらむ

扇　半いづる月の面かゞあらはれてまねけゞ通ふ袖のあきかぜ

納涼　夕ぐれの葉はやる露をふみわけてすゝみやせまし松の下陰
夕されゞ峯の松かぜ谷のみづひと聲ならずあきぞかよへる

夏祓を　うきことも去らぬ身なれゞ月花の雲と風とを祓へしてまし

秋

秋の始ゐ詠る　ちりそめし桐の一葉のあとゝめて木間に白き三日月のかげ
涼しさをまちし昨日にかはらねゞ扇にならすあきのはつ風

七夕に　夕月のいりぬるのちの空すみてひとり靜けき天のかはなみ
ふけゆけゞ庭のともしびかつきえて秋風わたる鳥鵲のはし

文月八日のあした　あまのがはあけわたる空の鵲いよのまの橋の名殘なるらむ

荻を　いつしかと聞の扇の風さえてうは葉にうつる荻のおとかな
中々におとなき秋のさびしさを思へゞこひしをぎは上かぜ
夕されゞ野山の秋のあはれまで風にこめたる庭のをぎはら

尾花を　松むしの聲するかたに月かちてひとり尾花の露まねくらむ

書によて　うちなびく尾花の袖の露ちりて月ふきかへすまの〻浦かぜ

朝顔　千年へてくちなむ松の行末をかけてぞ見まる朝ゲはのはな

朝顔の花の日ごとにさきかへてつゆあらたなる盛をぞ見る

虫　聲たてぬ虫もさぞなとなく虫にあきの哀をあつめてぞきく

老らくの寐覺ことゝふ虫のねもやゝ年々にとはざかりゆく

人とはぬ草の庵のよるの雨にとはぎがたりの虫のねぞする

琴のねに通ふさかねの秋はかぜたゆむまそ野に松虫ぞなく

夕ぐれ　かれはてし軒の菖蒲の末葉より玄づくみむかき夕暮のあめ

大かたのあはれゝ秋の夕ぐれにつくとや鐘はいりあひの聲

とはれじと思ひ定めし草の戸もさすゲ人まつ秋はゆふぐれ

とはむとも我ゝ思はで人にのみうらみかけたる秋はゆ夕ぐれ

夕づく日雲間に影ゝさしおがらむらさめ玄ろく山風ぞふく

秋の日の影やゝよゐき夕まぐれ色なきくもぞ峰にたゝよふ

むら時雨鹿なく山もかくやふるこゝだに堪へぬ秋の夕べに

いでて見れば山ゝ鹿のね野邊ゝ虫處わくべき秋はくれゝ

心玄らぬ人ゝとふともさびしさを何なぐさめむ秋の夕ぐ玄

秋に今つれなきいろの松が枝もあはれゝ玄るや夕ぐれの聲

いつの世のいかなる秋の夕暮にちぎりかおきし荻のうは風

露おもし虫のねかろし秋ふかし何かあさぢの庭のゆふぐ玄

なく虫もにはの尾花もわが袖も露ゝへだてぬあきは夕ぐ玄

なぐてかく野山の上になゲむらむ人の心のあきのゆふべ哉

庭のおもゝ秋も昔のあきならぬ蓬むぐらのつゆのゆふぐ玄

思はじと思ひすてゝも夕べ〳〵うき世にかへす葛のうら風

草むらにさす影よゐき夕づく日それにも虫は聲ぞきこゆる

月はそくむら雲まよふ山のはに雁がねさむき秋のゆふぐれ

とはれゐし庭の淺茅の跡たえてのこる露さへ秋のゆふかぜ

紅の入日のかげゝやゝきえて雲なきみねにあきかぜのこ玄

まらうど此來りければ

人目なき草の庵にことゝふゝこの夕づきのかけばかりかゝ

思ふことありける折わかありけむ

大かたの秋の夕べいかにぞと物おもひなき人にとはいや

秋は末つかた角田川原にゆきて

おとはむ鳥だに今いなかりけり角田川原のあきの夕ぐれ

稲妻を

うば玉の闇にぞまよふ稲妻のきえてはかなき雲のゆくへも

稲妻のかげに玉ぬく夕つゆいあだなるよをや人にみせらむ

駒迎といふことを

ひく駒の名をのみ月に残しつゝのこらぬあとの逢坂のせき

月をよめる

白妙のゆふつゞ鳥いはの見えて軒端におつる三日月のかげ

茜さす入日のなごりきえはてゝ雲にいろわく夕づきれかげ

くまもなくはれゆく遠の高ねより松をのこしてのぼる月影

夕されば色なき露に月見えてこゝなき松にあきかぜぞふく

はれくもり月はよわたる影を見ても我葎生の露ぞ玄づけき

秋の月うきみに何は契ありてかならず袖のつゆをとふらむ

空にめで袖にうつして大かゝの人ゐをしき秋のよのつき

つくづくと獨むかへば我身さへ月は中なるこゝちこそすれ

ふけゆけば松風きよく月すみてこゝろの空も雲いのこらぬ

荻のみか聲なき葛のうらみまで月ゐのこさぬ庭のおもかな

露をとふ風い物かい夜はの月音なきしもぞいやいねらるゝ

くまもなく月の影すむ庭の面いこかげに見する空のうき雲

ふけゆけば四方の嵐も静まりて月に音なきはきの玄たをぎ

くれふかみ葉のぼる露をふく風は芝生のそこに月ぞ宿れる

くれ竹の風い玄ぐれの雲の月おきふす影にはれくもりつゝ

いとひにし花の嵐も秋は夜のくもまの月にかつまされけり

世の人に見せばや露の八重葎玄げれる軒はつきのひかりを

草の戸の今もみはしの月かげを袖にうつして仰ぐよなゝ

見ぬ影もせぎにし空は戀しさに思ひあつめてむかふ月ゐあ

うき事も嬉しきふしも思ひ出でて涙のこさぬ秋の夜のつき

昔いま思ひのこさぬ秋の夜の月ゐなみだのかぎりをや見む

數ふれば月にゐはくのあきもへぬ身い元結の霜ときえなで

思ひいづる我世の上のむかしさへ月に多くの秋ゝへにけり
なれにしゝはや古のそらの月それも戀しきかげとなりつゝ
代々の人のながめもてゝし秋は月思へばこひし行末のそら
なき人のかたみの露も敷そひて袖にくもらぬ夜半の月かな
共に見し人も多くゝわだし野の露をかたみのありあけの月
代々遠くゝのぶの露も袖は上にみだれておつる軒の月かげ
さやかなる影より外の色ぞなき秋風ゝろきつきのさむしろ
大空のかぎりを見せて月かげに海原ゝろくあきかぜぞふく
すむゝ空におると見るゝ遠方の月のひかたの秋のうみづら
風さゆぐ木々の葉でしの月影ゝ千々に碎けてちるかとぞ見る
あけぬると見れば雲井に霜白し月のそらねはかさゝぎの橋
ひたすらに厭はむ月の雲ならむ捨しうき世に思ひこりずば
雲も風もをさまる御代に草は庵すみとゞたりと月を見る哉
秋もやゝ末葉色づく露のうへに霜をかさねる淺茅生のつき
寐覺して見れば老ずと命うれしきありあけの月

草の庵に一人ながめて思ふかな我身ゝ今ぞありあけのつき
世にすみし影を昔になしはてゝ雲ゝまぎるゝありあけの月
まねゞども月ゝ入野の朝ぼらけ尾花にのこる夜半の秋かぜ
月ゝつる外山に星のかげすみて聲のみわたる夜半の初かり
世にすみし影を昔になしはてゝ雲にまぎるゝありあけの月
月ゝ猶いりての後もさやけさの名殘をのこす軒のまつかぜ

八月十五夜によめる

昔さもおよひひと夜を名にたてゝ雲らぬ月の影をゝりけむ

殊にさやかなりける時

蟹のかるも中に月のすめる夜をわれからやつす袖のうへ哉
草の庵に心ゝづけくながむれば惠もつきも身ゝぞみちぬる

致仕の秋ゝかありけむ

まらうどと月を見てよめる

とふ君もとはるゝ我も向ふ夜の月より外ゝことのはもなし

わそ在邑の時

月見ても先こそ思へ白かはのせきのあたりの秋かぜのそら

舟中にて　とる棹のもとの雫も末の露も月のなゐなるいけのとも舟

さす棹の桂もゐゆゑのえにしとや舟のあとゝふ月のゑらなみ

てる月のちりも曇らぬ池の面ゝ浮べる舟やくまと見ゆらむ

連夜月を見て　みちぬるもかくるも月にまかせつゝ心のどかに向ふよな〳〵

月のところわかぬを

雲の上もおなじ光と見れば又身におふけなきむぐらふの月

あかし町といふ所にて

こゝも又月のあかしの名にしおへばよるとしいはむ浪だにもなし

明石潟つきのでしほもはの〳〵と心によする秋のうらなみ

長月十三夜に　琴の緒のかずも今宵の月かげにかよひてすめる軒の松のぜ

めでそめし其代の人の面影もゑのぶ夜とはきながら月のかげ

田安黄門の君長月十三日にたちよらせ給ひけるを

長月のこよひの月の名のみかゝ年に稀なるひかりさへそふ

月の蝕するを　夕つく日このよの下にうゝくれて去ばし隈ある夜半の月哉

復圓去たるを戯に

あらためてまとうにかへる月かげを人皆仰ぐけふの空かな

なりどころの小池の月を見て

わさつ海の波のみるめにさもあらばあれとまに事たる池の月影

畫によて　ながめやる沖の小島の二つみつ月れくまなる秋のうなばら

四の緒の去らぬもさえて秋風のこゑのみ月にあふさかの關

端居して浪の月をうち見て

月かげの清き渚にむかひてもさすがにかよふ關のあきかぜ

舊領に復したる秋おかわりけむ

雁　を　春の夜の霞みていおし行方をも月おかぞへむ秋のかりがね

さやかなる聲を光にさきだてゝ月まつみねをこゆる初かり

友やなき友やわかれし雁がねのつばささびしき秋れゆふ風

羊かふ遠つとはねのあはれをもとひてや見まし雁の一つら

霧をよめる　朝霧れはれゆく跡に森見えていまかあけなむ山もとのさと

もゝのなくはしの立枝いはの見えて行末ふかき野邊の夕霧

露を　草の上に結ぶもちるも世中のおとわり見する秋のゑらつゆ

搗衣といふことを

嵐ふく賤が夜寒のあさぢふにわもれぬ霜のころもうつらむ

うち拂ふはどや砧も聲さえむつま待つ賤がそでのなみだを

ふる里の小萩がもとのからころもなれ〳〵月をうつしてやうつ

紅葉を

ものゝふのかざしにせばやもみぢ葉のちりなむ頃ぞ人にあらるゝ

遠山のまつもあらはになりにけり時雨を見する木々の梢に

いつか又酒あたゝめむ木の本の苦にいろづく枝のもみぢば

花ちりてうとくなりしもみぢばにたち歸りとふ山の下庵

菊

心あてに見れどもわかぬ月影のあもにかよへる白菊のはな

さま〳〵の花に心をかく露も今のひとつのにはのあらぎく

紅ゐにはふゞあろゐ吹上のなみにわかるゝあらぎくのはな

暮秋のけしきをよめる中

あぢさゐの花の面影あは見えて尾花が雪ゐあきぞふりゆく

浮草のきえゆく秋のいけみづの桐の朽葉もそこにみえつゝ

秋の日の影おとろふる草むらにひるなく虫の聲ぞきこゆる

冬

時雨を

冬

うかりける秋よりもゝに寂しきゝ冬は初瀬の山おろしの風

曉にわかれし秋のうつりかをあのぶ朝けのあもの面ぎく

定めなきよのうき雲の例をも空にみせてやまづあぐるらむ

涙さへ袖にあらそふ時雨かなふりし世あたふ老のまくらに

もぎゆけば又音たてゝ手枕のゆめぢゆるさぬさ夜時雨かな

時雨ふゝ色なきものゝ淺かくばかりぬれて木葉のいかゐそむらむ

あぐれゆくあしたの雲ゝ後朝のたが袖とひし名殘なるらむ

落葉

木の本ゐおのれとおつるもみぢ葉ゐ風の恨を忘れてぞ見る

ちりあける庭の木葉をふきたてゝ梢にかへす山おろし風

ふく毎に松の落葉のむら時雨これもや風にはれくもるらむ

梢ゐゝふく音たえてもみぢ葉や庭にいろある木がらし風

嵐をば松のこずゑに殘しおきて心あづかにちる木のはかな

みどりなる中に見そめし紅ゐいくへのあたの落葉なるらむ

霜をよめる　朝ぼらけ前のさなはし霜ぞろし渡らぬ人のあとも見えつゝ

有明のつきの光をそのまゝにむすびてめたる野邊の朝ぞも

高ねゝ　ゝ殘る入日の影のうちに夕ぞもこはる山のぞたくさ

木枯を　花ならぬ紅とく頃の三日月にあまりはげしきこがらしの風

庭の落葉軒のかゞ荻うちさゞめられまじり此山風ぞふく

ふきのこす時雨の雲も月かげもこはるばかりの木枯のかぜ

松を　昨日見しはしの立枝も落葉して尾花にけこる木がらしの風

木枯ゝたえし高ねの月かげにことの音のこる松のひとむら

落葉せし梢にたえてところ〳〵嵐をのこすまつのむらぎち

草を　のべゝ皆尾花ばかりになりにけり千草ゝ霜の下にぞはれて

露ゝ霜に結びかへても荻はらのそよげばぬるゝ袖の上かな

ちるゝ雪のこるゝ霜のかもかげや花も末ばのいけのかれ蘆

浪の花ちるかと見れば村蘆のは末の雪にうらがぜぞふく

冬されば浦わの芦も枯はてゝあらはになりぬ霜の八重ぶき

菊　花なしといひけむ人にぞらせばや冬さく菊の深きあはれを

氷　池の面ゝ氷らぬ方もなかりけり鴛の浮巣やいづこなるらむ

淺香山かげさへ今ゝたえはてゝ雫もこはるやまの井のそこ

まがひつる浪も氷りて志賀の浦や梢にかへる松かぜのこゑ

かげ見てし月と花との名殘をも一つにむすぶ池のうもらひ

宵の雨の雫木々に氷りて玉のおと見えければ

霄の雨の露もこはりて園の内ゝ玉まつがえに玉のむやなぎ

樹陰の氷をよめる

暑さをも忘れし岸のこのもとを思ひわはする池のうすらひ

冬田の氷を　朝日さす門田の面ゝいなぐきのあたりばかりにけおる薄氷

月を　霜こはる枯葉そよがぬ浦風に月かげかもしあしのむらだち

色もなく香もなき物の身にぞみて霜夜の月にいやゝねらるゝ

はゝる秋のあはれもおゝにたちこめて夕霧ふかし霜の上の月

木枯のいろなき風もみにぞぞむ落葉のぞもに山のはのつき

木枯にゆふべの雲を拂ひても木のはの雨ぞつきにのこれる

水かれて石なはたかき山川にひかりもこはる冬の夜のつき

網代をよめる

ものゝふの宇ふ浪も去ごまりて網代に氷魚のつらゞ亂るゝ

此頃ゝ小田の庵も守りすてゝ網代に去ごゞひをかさぬらむ

椎柴を

山風やをりのこしたる椎柴にもこし聲あるみねのこがらし

時雨わも此おろなれし手枕にまた音かへてあられふぞなり

霰

むら雲の絶間に月ゝさしおがら風此あられの窓をうつこゑ

横の屋此霰のおとに目さむれば夢の行方もくだけてぞちる

風早みたかねの雪をふきたてゝわまぎるそらに霰ふるなり

雪をよめる

秋去のゝ里の時雨のあとたえていこまのたけにつもる白雪

されば去そ厭ひしものを淺沓のあとより早くきゆる去ら雪

とぢはてし葎も今ゝ霜ゞ也ぬはや道かくせやどの去らゆき

ふりはれし雪の朝々ゝ長閑わて春日おゞゆる空のいろかな

窓をうつ風のひゝきも靜わてそともの竹にゆきをれのこゑ

花と見る雪の梢のそらめわもつらさいおなじ春のやまかぜ

秋ならば月まつ頃のゆふべわもまだくれやらぬゆきの白妙

さとびたる犬の聲さへ雪ふかみ末ふす竹のおくになくなり

わふぎてゝ隈なきものをむら消の雪まにくもる庭此月かげ

鳥がねゝ雪此下よりつげそめてあくる夜はやき逢坂のせき

風さむみ雪けの雲のかよひぢに少女のそでもこほる月かな

ふるがうちゝちりかひ曇る海原もはれて間近き雪の島やま

みよしのゝ心の奥にかへりけり花よりさきのはなの去ら雪

この頃ゝいづこ此山も末の松ゆきの浪のみこゝと見えつゝ

なよ竹の靡けば早くわけそめて窓去ごかなり雪のわけばの

降る雪に上毛くもりてたつ鶯のあとにみどりの松のひと枝

さくと見し四方の梢もくれはてゝ花に聲ある夜は此雪をれ

冬ながらぬるむ夜風に雨となりて軒ばにいそぐ雪の玉みづ

年の暮に深くつもりしかゞよめりける

とかへりの花まち遠き老が身ゝまづもてはやす松此去ら雪

雪まつ頃ふりしと夢みしと語るものに

夢のうちにつもれる雪此玉手箱あけてくやしき庭の面かな

庭に去はやが崎といふあり

汐やかぬ海はやが崎いふる雪をけぶりになして浦風ぞふく

捲簾の興いかにとぞひおし人へ

雪ふれば葎が宿もいよすゞれ更にむかしをかけてこそ見れ

雪のふるを見て戯に

ふりやむの柳の花とちるがうちに櫻もまじる夕ぐれのゆき

十月廿日雪のふりければ

事ぞげき賤いかくてをかるひまもはすまもあらで雪やわぶらむ

火

是もまた老にけらしとかき起すねざめの友は聞のうづみ火

寒さをもいとはで賤がやく炭の心も哀らずむかふうづみ火

鷹狩を

さよふけて見れば螢は秋ちかきかげよりまれにのこる埋火

とく咲く梅を

かり衣かた野の春のふもかげや雪の花ちるあけぼのゝそら

年のくれに

一年の花のとぢめは菊もまゞのこるが中ゐにはふうめが香

あすといはゞ春と共ゐやたちいでむ我をすもりはさにの鶯

齢のみつもりの浦のそなれまつことしも老の波いかけゝり

此頃のふりかふ雪もけふはれぬゐむといふ春の道ゝ惑はじ

冬と春とゆきかふけふふる雪のかたえに梅も薫りそめつゝ

いときなき身ゐのを積る年ならばいかに嬉しき今宵ならまし

雜

風をあらみ靜心なきむらくもにそれもまたゝく夕づつの影

月にまち花にいとひて世の人の心みせたるはるのさ夜かぜ

香をさそひ花をちらして一方にうらみもはてぬ春は山かぜ

ひとすぢの雲もものこらぬ秋風をさやけきつきの光ゐぞ見る

きぬ〳〵の露よりなれて猶哀はる老の寐覺はあかつきの袖

曉のねざめに何をかもはまし花にゐらしはなき世なりせば

唐土のみぬ世の人のうへまでも戀しきものをあかつきの床

年々に霜夜のかねはひゞきさへむかしに遠き老のたまくら

星

こまどの戸のさらむ光もとしびのきえてみそむるねやの曙

風

暗くなりあかくなりゆく燈にあけがた近きねざめをぞ哀る

曙

有明の月の光と見るがうちに朝日のかげぞくもにうつろふ

朝

霧はれて松の葉ぬるき蜘のいに玉ぬくつゆの庭のあさかぜ
有明のひかりをさまる朝戸出になごりさびしき庭の霜かな
水鳥の聲もほのかに霧こめて霜かきまよふあけぐれのには
苗さす入日のどけき山のはのかすみにくるゝたそがれの空
ひとむらの遠の林もかすみつゝとまり鳥のこゑものどけし
ねぐらとふ林の鳥の聲までもかすみに去ゴむ夕ぐれのそら
霞たつ花の夕べいさもあらばあれ殘る紅葉のうもぎりの空
目さむれば虫より外の秋ぞなき松も音せぬ夜半のまくらに
見しよりも仰ぐばかりに聳えたつ庭の闇夜のときは木の影
ともし火の光靜にたちのびて霜夜のつきのかねぞさえゆく
けさ見つる雪いづこぞ不二のねは色より急ぐ黄昏のそら
入日かげそめしがうちにそめ殘す色ゝ夕べのふじの芝やま
不二のねゝ夕日の跡に猶見えてをちの林はいろぞくれゆく
見るが中に不二のみ雪いきえはてゝ白きを讓る夕月のかげ
心あてに見れどそれかと打ち向ふ霞のそこの雪のふじの根

夕

夜

富士のねを

海原のかぎりを見せて白浪のつきぬる空にうかぶ富士のね
白雲もいゆき憚かる不二のねゝいづこに雪のふり積るらむ
仰ぎ見る筑波の山にますかげゝかすみの中の雪のふじの根

朝の山風の海まで皆悉によりしなり

朝日かげ匂ふ高根ゝあらはれてふもとゝ霧の浪ぞたゝよふ
海でしの山もさやかにあらはれて波の限をいり日おぞ見る
見るが中にふきまく風の程見えて靡きさだめぬ峯のうき雲
でゝかしこ山の姿のはの見えて隱るゝかたゐ村さめぞふる
ひく汐に色香もとはく通ふらむ花さくきしの里のゆふかぜ
とぶ鷺のみの毛亂れぬうら風に音なき松はかぜもすゝしき
木葉をゝ拂ひつくして浦波にふく音よゆる木がらしのかぜ
朝づく日すがた定まる浪の上にひかりをちらす沖つ汐かぜ
朝な夕な間近く見しも中空の日かげにとはき沖つ汐まやま
雨となり雪と碎けてあら磯にかぜのこゝろをよする波かな
行末ゝ霞みわたりてたえふけり雲にかゝれる木曾のかけ橋

夕の山
風の山
雨の山
春のうち
夏海
冬海
朝海
晝海
風海
橋を

石　ふのづから聲ある浪に沖の石の顯はぬしもさぞがたちるゝ

故郷　故郷といづれをいはむ生れしも又生ひたちし方もわる身ゝ
もとあらの萩の下葉も色づきて古里さむくかりやなくらむ

寺といふ事を　寺々もあるにまかせてまさじとの掟さふとき君が御代かな

隣といふ事を　てまうるま君ゞ御國の隣とてうとみもやらぜ近づけもせぜ

唐人を　春ごとに櫻をかざすれどけさを入日のくにの人に見せばや

玉昭君　うつし繪の筆はもさびのぬれ衣かさねてきみが恨をぞ見る

松を　ふく風の絶間に見れば軒ちかき松のこぜえゝ聲なかりけり

色かへぬ心ばかりゝ幾千代のはるもくらべむ住よしのまつ

つはぶき　陸奥の黄金の花の色のみゝかつゝふうきの名もおひにけり

春獣　からねこの眠のどけき春の日ゝ是も胡蝶のゆめや見るらむ

春鳥　雲に入る雲雀の聲も草むらのそこのきゝすも春やたのしむ

鶴　さらちねの深き惠ぞおもひしる霜夜のたづの聲をきくふも

雞　鳥がねにおき出る程ゝ變らねどつとむる道ぞ人にもうるゝ

蝶　ちれぱちりさけぱとひくる胡蝶おそ心の花の色を見せけれ

　うてぱうちうたねぱうさぬ影なるを鏡の中の人ならみそ

鏡　かぞいろの持ち給へりし鏡を
　まず鏡むかへぱうつる面影ゝさらぬ形見はちぎりとぞ見る

冠臺殘作りて　かゝげてゝ月の光も花の色も同じくてもる夜半のともしび

船　君と臣の契ゝかくぞありそ海のおづけき浪にうかぶ浦ふね

探香丸といふ船をつくりて梅莊の梅見むと始めてのりし時
　さく梅の花ゆゑがれてゆく舟ゝ香をとめてこそ梶やとりてめ

弓　もゝはふのたけき心も正しさの弓いる道にかへり見てしれ

笛の名を　青柳のふりわけ髪の水かゞみうつるやいつの名殘なるらむ

明石といふひちりきのうつしを
　名にしおふ明石の浦の月のかげ映る浪さへ世に似ざりけり

軍學の師に　もろこしの七つの書をまねぶ身も五つのみちを基にぞする

老人といふ題にて
　年ふりし人を厭ひしむくいゆゑ且我れいのいとはしきかな

ある社にまうでて

すなゆる心此外のねぎおとい神もゆるさじ我もおもはず

思ふことをのぶる

睦まじき其はらからも所せき身ゆゑみに遠ざかりつゝ
うら表かはらぬひとを友とせよこの手柏のとゆもかくにも
言のはの去ゆさ増れど花もなき夏野のくさぞ我たぐひなる
何にかけて昔のあとを尋ね見む長柄此橋も名のみばかりを
大空の心のはてをつくゝと月ゆよそへてながめつるゆな
何事もことたる上ゆふしもなしたらぬぞものゝ哀みせける
年月ゆかへらぬものを我ながら驚かぬ身ぞおどろかれぬる
いかにせむなでし名殘の黒髪もやゝ白雪とふりかはる身を
一筋にみちをゆつくせつくは山このもゆ此もに心うつさで
世の人を心のごとくなさばやの心にうきもおふとこそきけ
たふときも中々くるし浮雲に身ゆなじはてゝ月にあそばむ
なみならで皆去なこゆる世なりけり人の心此末のまつやま
時くれゆ木々も花さき落葉してまよはぬ道弘庭に見るかな

假の世と此世をいはゞ君の恵ゆいかゞひとにてたへむ
事たれゆたるゆもなれて何くれとたるがうちをも猶歎く哉
塵ひぢになり出る山を見ても去れよしあしづめる人の行方ゆ
ゼゆ爲によけれゆ國の爲ならず身を忘れてゞ國ゆをさめむ
夕月の夜毎のかゞを見ても去れ望ゆかけゆく空此ならひを
千代ふとも一つ誠ゆひさかたの月日と共にてらすべらなり
天地此誠ゆそれと去りながらまことに去らぬ我おゝろかな
ふひたてし親の恵を思ひ去らゆ我身を君につくさゝらめや
人の親となりにし後にとはゝやゆ子を思ふ道ゆ淺き物かと
大方ゆ我身の上にまぎるめり世をすてゝこそ世をゆ思はめ
況しからぬ折を思べゆをしからぬ命をしく思ふとしつき
うしとでゆ人な咎めそ人もまた恨むことなき我身ならじを

慈鎭和尙が長かれと思ふ人のみ短くてあらざれうしと思ふ人の身といふ歌の心をよめと
いへりけれゆよめる

をしと思ふ人のみ人に惜まれて惜まれぬ人のさてもつれなき

さま〳〵畫によて

風はそき河邊の柳かつちりてひとなき舟ぞきしにつあゞる

はるゝなる繪島に通ふむら千鳥こゑい心にまかせてぞきく

秋ふかき外山ゟ尾花霜ゞれてたちどあらはに鹿ぞなくなる

秋風になびく尾花の末はれて鹿のねふくるやまゞはゟみゞ

小田の庵をいでても潮々の網代木に故里遠き月や見るらむ

木葉ちる後い高ねも聲さえてあらしゟ殘る三日づきのかげ

おく霜に影をゟとして千町田のいな葉にゑづむ有明ゟつき

水青く遠やまくろき夕ぐれに入江のたづのいろぞまがはぬ

秋ふかみ外山の尾花ゑもがれて夕月さむきさをしかのこゑ

石ばしる瀧にまかせて山守もこゝろのどかに花や見るらむ

義家朝臣勿來の花の繪

陸奥のなこそのゝ關い名のみして世に越えにける花の言ゟ葉

補公の像　明らけき君ゞ心いつきと日のひかりと共に世をてらさなむ

契沖の像　雲とながめ雪とめづるもさく花の深き色香盡もといなし

謠曲最妙寺雪中潛行ゟ繪

毛衣に寒さを忘らぬためしよりもてし心のふかきゆきかな

同猩々ゟ壺ゟよりて酒のむ

くめど盡ずのめども更に變らぬい我程々を知るゟぞ有ける

小松川の御狩のゑ

長閑なるみ代の例にひきも見よ小松のかはの春のみかりい

角田川の都鳥　角田ゞは今いまごとの都どりむかしのひなの事やとはまし

玉の繪　朝夕にみがくを玉のひかりにてつひに車のかゝもてらさむ

玉ならゞ猶も磨ゝむ言の葉のかけたるしもぞせむ方のなき

諫鼓をかさて鳥いなし

鳥い今もむべき里にところえむいさめの鼓こゑたえずして

雪月花の繪　峯のゆきふもとの櫻いろそへて霞にもるゝはるの夜ゟつき

夕月のかげもひとつに霞みつゝ花につゞける富士のゑら雪

紅葉に菊　秋もやゝ入あや近きかざしとや紅葉のもとに菊もさきけり

三猿の圖によてよめるが中

いふべきをいはざるも亦いはざるをいふも道ゐかなはざるなり

團扇の名によて

手にとれば袖に袂に通ふなり雲井のつきにぬきのまつかぜ

源氏物語の巻の名によてよめるが中

桐壺　紫のはつもとゆひの色と香にまよふこなたぎしわま夜の心ならひに

空蟬　空蟬のはなかき露にまよふかなもぎしわま夜の心ならひに

夕顔　夕顔のあだなる露のそれよりもろき心のみだれをぞ見る

若紫　すゑとはき若紫のゆかりより長きやみぢにむすばれつゝ

紅葉の賀　心ならでだちまふ袖いもみぢ葉の仇なる露の色と去りきや

花の宴　行末のふかき霞にまよふなかぞ月夜のかげをたのみて

槍合　はかなさの心くらべの寫し繪に其世の人の々しきをぞ見る

東屋　東屋のあまり身に似ぬやもらひに補もひぢぬる軒の村さめ

夢の浮橋　行末のわたらむあとも殘りけりたえていかゝる夢のうき橋

風月水月といふ事をよめる中

ふきわたる軒の菖蒲の白露いつきと風とのやどりなりけり

蜘のいのなびくばかりの秋風におれもいとかく三日月の影

おのづからうつる月影うつる水のふかきや池の心なるらむ

まとゐなるもくだけてちるも池水のつきの姿い只秋のかぜ

硯を水月と名づけて

月影のうつればうつしされば又あとなき水にかへる去ら波

又風月といふをつくりて

ふく音い光になしてさやかなる月をすがたの秋ぬさよかぜ

旅ざつ人に扇を送りて

手にならも扇の風にいく里の野山のつゆをはらへとぞ思ふ

文化十三年汐竈へまうでむと思ふころ

思ひたつ旅にしあれば椎の葉の白き朝けの去もゝいとはず

其旅ざつ時御衣賜はりしかしてまりをよめる中

かさねきる厚きめぐみの衣手に野山の風もなにかいとはむ

此旅の道すがらよめる中　おがのやどり月を見て

いを安く誰か夢みむ枕かのこがのわたりのつきさゆる夜い

古河のわたりよりうちつゞける松の並木を

玉ぼこの道ゆくてのの松がえゝみ代を契ゆいろとこそ見れ

白坂の道の松杉を見て

かひ去げる道のゆくての松杉も二葉のむかし我にとはゞむ

こゝ我むかし植ゑたれゞなり

あふ隈川のほとりに櫻山といふありてこゝに亭あり珍らしくてこゝに來にけれゞ昔近侍ゑた

るもの集めて酒くみあひてよめりける

年をへてあふ隈川によるものゝかさみに老の波ばかりなり

同じ時ゐ詠る　圓居をるけふの心のゆどけさゝゝさくらの山の春もかはらを

行ぐゝ詠る　うゞもれし岩井の水も時しあれゞ朽せぬ代々の驗をぞ見る

其頃石文はりいだしたれゞなむ

そめつくす安達が原のもみぢ葉ゝ心こはくも見えぬ色かな

さねかたの塚を　西行法師とひし頃を思ひいでて

事とひしあとだに今ゝ霜ゞれて野はらの薄たれまねくらむ

霜枯の尾花ゝ何をまねくらむすぎてゐぬ世を我ゝこふめり

義經の腰掛松といふを

さちよりし其世の人の名もそひていとゝふりせぬ松の色哉

仙臺領に入りて

やま人の臺の松のかぜの音ゝげにも異なる去らべとぞきく

千貫松といふを見て

春は宵の時のまにだに舟人ゝかへじとや思ふ浪のまつばら

宮城野にて　長月二十日あまり六日頃ふかありけむ

宮城野の本あらの萩もかれはてゝ殘すくなき秋かぜぞふく

沙竈のわたりゐてよめる中　勝嶋櫻ゐて

うつし繪にまさるみるめを藻汐草えぞかきあへぬちかの汐竈

松島や又も見るべき身にしあらゞ笘屋の波ゐ袖ゝぬらさじ

松島の月みが崎のあめの夜ゝこゝろばかりぞもみ渡りける

松島やをしまぬ老のとしなみもけふゝうれしき命なりけり

歸さ急ぐとてうらみいひこしたる人へ

よる浪ゝ返るならひを松島のまつともいはでなど恨むらむ

白河の關のあとゝふとていきし折の歌の中

とめゆきてけふ白川の關ゝみしとばかりつげむ秋風もがな

山路ゆきてふりさけ見れば關の海やうちよする波ゝ只松の風

武隈の松　もみぢの山までゝ我領中の名所なりき

武隈の二木の松のふりし世をとはゞこたへむ峯はあきかぜ

忘れぢの山　世々へても心の奥に通ひけり人わすれぢのやまのあらしゝ

あふくま川　豊なる世にあふくまの川波ゝ深きこゝろによるとこそみれ

さくら山　春おとに遊ぶ胡蝶とおりてだにさくらの山の花をとはまし

紅葉の山　思ひやる心やおかて雨とおりて紅葉のやまの秋をそむらむ

其旅のかへさによめる歌の中

かり殘るおくての稲葉なびきつゝところ〴〵に秋風ぞふく

紅のいり日の色もやゝきにてひとむらくもぞ空にのこれる

ところ〴〵水田の面ゝあけそめて横雲くろき山の端のそら

ふじ松島の優劣をとへば

世中にたぐひなきもゝ駿河ふるふじの高ねにおくの松島

八景とてこひしによめるが中　汐竈の浦の霞

蜃のたく煙の末ゝはゝ〴〵とかすみに消ゆる汐がまのうら

末の松山の櫻　ふきさそふ花ゝ薫もなみならでこえくる風の末のまつやま

宮城野の鹿　宮城野の萩のゆかりゝ夕露おこれも色あるさをしかのこゑ

近江の八景を二所づゝよめる中

よる浪の音も靜けきよるの雨におつるやいづこ初雁のこゑ

暮おそき空かと見れば雪の中にたえ〴〵通ふいりあひの鐘

大塚ゝ六園おて

願はくゝ千年ゝ後にわれゆきて花やもみぢの陰にあそばむ

浴恩園の山上に石文たてゝ

なれおける園の春風おきの風ふくらむすゑの袖もゆかしき

竹おて東屋をつくりて

おきふしも國やすかれの一ふしゝ心にこむる笹たけのやど

大崎の雲州の別莊に行きてよめるが中　臥雲眠雲の額かけたる亭

雲かゝる折々ごとに夢や見む月のゑたぶしあかぬ夜すがら

亭あり案内のものに名をとへど答へず主人この世去り給ひし後に此亭落成せたりしなど
語る頃遠寺の鐘の聞えければ

庵の名をとへど答へぜ袖の上ゆつゆうちそふる鐘の音かな

再ゆきてよめるが中　折しも雨ふりていと物さびしき秋なりければ彼亭にて

一鐘の音も去年ゆかはらぬ夕暮にうち重ねつゝぬらせ袖かな

水月君庭見に來り給ふ時月を見て

殿の中に袖をつらねし折だゆも月見し夜半いなかりし物を

君も今みどりの雲にかゝらずば月にくまなき圓居せましを

久しくわはざりける人に逢て

昔見しまゝのつぎ橋くちもせで再わたるえにしをぞおもふ

水府の御館ゆて西山公の道服を其まゝにうつしてたまひければ

うれしさも袖につゝみて幾千年ゆづる此衣いへにつたへむ

田安の箱崎の御別莊ゆゆきて貝拾ふとて

ふりたちて貝や拾はむ玉松のひかりさしそふ池のなぎさに

松浦ちしの君の庵をとふ

とはるゝもとふも一つに柴の戸の露靜かなる世をぞたのしむ

或人の庭の梅をみにゆきしにけふよりゆ折らぜかゝめぜ土かはむ君がやどりの梅の木の
もとゝいひければ

幾春もをらず土かへふは君のこれもめぐみの園のうめが枝

向南ぬし訪來て里いわれぜ人も老せぬ宿の月雛ばかりや野らとすむらむといへりければ

言ぷはの露の色草さくべしや庭もまがきも野らとならずば

とよ村のある人のなり所に三齋君のつくられし曲水の流の跡を見て

盃のうかぶながれも水かれぬ何にむかしのことやくまなむ

白かねの薩摩の別莊のゆゆたの井といふを

數へ見むゆゆたの井筒いつか其くみにし儘にうつる月日を

南湖に石ぶみたてゝ

みづうみの其名所も末とはくつたふ去るしの岸のいしぶみ

哀傷のたぐひ

末三郎といへる翁が始めてのうまお玉のやうなるをのこ子なりしを

かゝるべき契なれバや撫子のいろしもふかく思ひそめけむ

年のめぐりおむどの時よみしが中

みし夢のさむるゝもろき床夏の露のあとゝふ庭のゆふかぜ

はかなさいゆふべの風の露の玉樹々の雫もぬきゝとめなで

彼季三郎玉樹といへバなむ

なき人の今年もまたも數そひぬかくてゝ誰ゝ我をとふらむ

元日大喪中なりしかバ　其去年の玄はを尼君かくれさせ給へり

ふくとても袖の氷ゝとくべしやあしのすゞしの春ぬはつ風

夢に尼君を見奉りてなむ

夢にさへさらぬ別のある世ぞと思へバいとゞぬるゝ袖かな

其頃よみしが中

ともし火ゝきえてもきえぬ俤を闇わぞ玄たふわかつきの床

仰ぎ見しはども嵐にかきくれて雲に玄づめる三日月のかげ

たちちねの惠にもれぬ此身わゝかつる涙もかたみとぞみる

ありし世の事をあまたに恐ぶ哉をさなきをりを始わいして

喪中上使わりし時

此頃ぬ袖にあらそふばゝりなりかゝる惠にかつるなみだゝ

御寺わ詣でて　たきものゝくゆる煙もかたみぞとみれバきえゆく燈のもと

夢とのみたどる日頃も過ぬれどさめはてぬしや現なるらむ

竹千代君此よさらせ給ふ

天が下にぬれぬ袂ゝありそ海や濱べの海人の袖ばかりかゝ

其ころ物ぬねをとゞめらる

夢さそふ夜半の嵐に露きえて庭にかれたるむしのねもなし

なく雁の聲やいかにと見わくれバ是もきえゆく夕暮のそら

尼君一めぐりの折なむどによみしが中

去年今年ひとつ涙にかきくれて夢かうつゝゝわく方もあし

一年もはやめぐりくる小車にやる方もなきあげきをぞつむ

なき人の形見の雲のひとすぢも殘らぬそらの風さへぞうき

其頃うちくもりて雪ふりけれバなむ

其かみゝひと日わかけて思ひしを誠ぬみつの秋ぞへにける

三年の時おかわりけむ

結びとめむ名殘もなつの朝寐髪みだれし露の行方かなしも

邦媛君はかくれ給ふときよみしが中

同じ時日頃たきものを好み給へば橘といふをたきて手向けし時

たち花のかをり去めれる朝風に袖もひとつはむらさめの空

たきものゝ煙もきえておきつきに色なき花の香ぞ殘りける

圓諦君のかくれ給ひし時よめるが中にたゝ

涙さへとゞめがたきを世の中のさらぬ別ゝいかにしてまし

さのみにし枝さへ折れて玉松のはてる緑ぞいまゝもくなき

足乳根にさしそふばかり思ひてし心のいろや袖にみゆらむ

深川の御寺にまうでて　あそ任官などの頃まうでしわうありけむ

生茂る竹のおれよの末かけて嬉しきふしやみそなはすらむ

濟海寺にまうでて海原を見やりて　定國少將の君の御寺なり

わさの原こぎ出る船を見ても思ふまぎゆく物の哀ありとい

清照君の御法會によみしが中

形見ぞと思へばさもがわが袖の泪もさらにはらひかねつゝ

なげきある頃又追悼なむどによめるが中

藤衣かゝるも露のたまくしげふたゝび君にわかれぬるかな

こゝ重服ぬぎし折おかありけむ

白露ゝおくと見しまにちりにけり何をかたみの朝顔のはな

ふして思ひおきても慕ふちる花の名殘つきせぬ春の夜の夢

それとなくたゞよふ雲の行方まで夕べゝわきて物ぞ悲しき

わが袖にくらべて見れば荻の葉ゝ只大かたの露ぞおきける

さりともと思ふ心もかれ芦の岸にまどへるおいつるのこゑ

夢なれやそれかと見ればそれならで荻の下葉の露の夕かぜ

人の世の別ゝかくとたなばたに涙ながらのそでやかさまし

塵をだにもゑじと思ふ床夏の花にあやなき夜半のむらさめ

契さへげにみじかよの手枕にゆめかとたどる山ほとゝぎす

あはれなり池の蛙もみかくれて露にむせぶゆふぐれのこゑ

かたみぞと見しも昔の空の雲そをだに今ゝのこるともなし

うち靡く尾花の袖になき人のおもかげさそふ庭のゆふかぜ
みそぢあまりとし世の雲もきにはてゝ袖に殘れる夕暮の雨
別れにし秋のなおりに人の世の露うちそふる荻のうはかぜ
此ごろのこぞの夕べは空の月まためぐりきて袖やとふらむ
いる月のあとゝふ風の暗き夜にちりにし露の行方ぞとふ
おけばちる露の習をいかさまに袖おも見よと秋かぜのふく

よし姫かくれ給ひし時よめるが中

いかにせむこゝいかにせむと思ふよりつらかりけりな袖の涙も
あすよりゝおもをたれをにあがめまし嵐にかれし撫子の花
心おゝかをみの衣かさぬれどよのならはしの風ぞつれなき
日をふれば猶悲しさもみにをみて其あらまし跡も悔しき
をばし今ありと見えつる月かゞのくもがくれぬる曉のそら
うち靡く袖もをはれてちる露の玉よばふ庭の篠のをすゝき
けふといひきはふとすぐる時のまに十づゝ遠き別とぞなる

其百日に詠る

眞田の尼君かくれ給ふ時

よとせへば八十ぢ餘りの八千代をも契らむ浪は恨めしはは世や
たれこめしをでしながらも藤衣あらはに月はもるも恨めし

仙臺君かくれ給ふときゝて

袖にのみ波の名殘を殘しおきてかへらぬ道のあとをとふ哉

よし姫のおおりとて庭に地藏おざちを安置しける三とせたちて深川の寺へうつをとてよめるがうちに

三年へて又今更にわかるゝやあさぢにふかき袖のあさつゆ

俊德君の五十回の法會に

五十とせの昔ゝよそに見し雲の行方ををたふ夕ぐれのあめ

みち姫かくれ給ふ　よし姫の形見と頼みしことのありしを

かげ頼む入日のあとに見し雲のかたみの色も今ゝのこらず

仙壽君かくれ給ふ折よみしが中

かぞいろの形見は露もこゝ彼處消えにし跡を尋ねてぞとふ

田安故中納言の君の五十年の御法會にかぞ〳〵よみしが中に

夢うつゝ今にさだめぬ心地して袖ゝかはれど露ゝかはらず

悲しさよはゝそは露も今ゑばしきえなでけふわあふべき物を

法の會の今年のけふの後の世ゝ我をわはせて人やとふらむ

ぬる夢にせめて其夜の月の影みばやと思へゞ村さめのそら

思ふわもいふわも餘る名殘をゞたゝ大空をあふぎてぞ見る

世にまさゞ猶も訓のかぎ〳〵を言のはしにもきかまし物を

物をそれと覺ゆる頃に今の世の心しあらゞくいざらましを

かず〳〵の仕へし人も早うせてひとりふたりに昔をぞとふ

眞田致仕の君の北方かくもさせ給ふを　眞珠院と號しけり

くもりあきまことの玉の光こそみちをてらさむ鏡なりけれ

寛光君三十三回の法會の折よみしが中

世ゝ遠くよしへだてゝもまぢらきゝ君ゞみ聲に君が面かげ

侍女貞順が二十三年に

いく秋かふる枝の萩のもとの露すゑの雫の世々にたえせぬ

かめうらといふ老人みまかりぬ齡ゝ七十あまり二つ五十とせ餘の勞にて翁の十ばかりの頃よりつゝのへしあり

思ひやる思ゝわさし五十とせ七積る月日のこゝろづくしを

冠山此君の末女つゆ子世にもぐれたることなどいひ傳ふることゝべちにゑるせしかども

かゝで歌よみて參らせしゞ中を

よそにきく袖わもかけて思ふ哉もとの雫のたえぬなげきを

稻村行敬みまかりてのち志此はどをきゝて

古のみよのちぎりのあとゝだにいはぬ心ぞなゞゑのぼるゝ

德本行者みまかりぬもとよりあひ見しことゝなけれど

同じからぬ道ありとても人にてえし人の別ゝ惜みやゝせぬ

家臣中島それゞし夢にみえけるあとありし時

君と臣のみよの契ゝいかさまにたえせぬものか夢のうき橋

こゝ昔よみしがよもぎなどわも洩れしかゞゑるしつ

無常といふことをよめといへゞ

花のとばりかゝげし人も草の戸もかなじ雫のわめの世の中

夕ぐれの雨とふる身ゝ徒にあしたのくものゆくへをぞとふ

つねなきを常とやいはむちれゞさき曇れゞはるゝ月花の空

かへりこぬ昨日いけふの昔ふて過しゝ悲しあとゝこひ去し

ことほぎによめるが中

井伊家の賀に　花もみも世にかぐはしき橘のふりせぬ宿ゝ千代もかはらじ

致仕のうへ猶恩賜のさえざるを

草の戸のかゝる露にもありし世の月のみ影ゝ隔てざりけり

定永溜づめに進み又侍從にのぼりしかしてまりを

豊なる袂おれどもうれしさの重なる今日ゝいかにつゝまむ

祝のおゝろをよめる

柴のとゝ夜はもとささて通路の落葉をひろふ人だにもなし

定和生れたまひし時

若緑さすがに千代のおひさきもこもる二葉の松はいろかな

文化末の頃みづから賀のやうなるおとし侍る折によめりける七首

鶴の千年亀はまろづ世とりそへて君ゐぞ契る身ゐゝ契らず

大君ゐさゝげゐきてし玉の緒のゆらぐも御代の恵とぞ思ふ

かぞいろの形見を君ゐ捧ゐゐきて又我物にいはふ今日かな

かぞいろのまさゞとばかり老らくのけふの莚に去き怨ぶ哉

なみならぬ恵に袖のなみださへこえゆく老の末のまつやま

豊なるみ代をちぎりのはきの松去つかに千代の調をぞきく

柴の戸の月と花とのあけくれによるとしもなき老のなみ哉

ことほぎの歌御賀の屏風をはじめかずく〳〵なれど

くだ〳〵しけれゞもらしつ

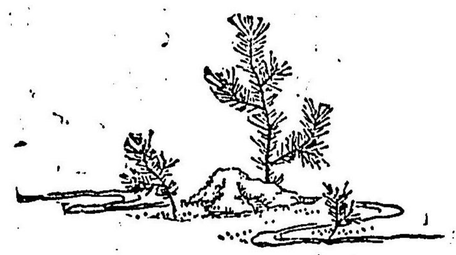
此あさぢの一卷みづからかいて

定和あそに參らす

文政十年十二月十三日

樂翁（華押）

三草集終



常侍集 抄

水野忠邦

甲午元旦　曉のかけのたり尾の長き代ふつかへまつらむ春ぞのどけき

む月六日の日田安の御門をいづる時よめる

たち出てふりさけ見れば大江の海安房の門うけて霞棚びく

心靜酌春酒　世の春をよそに見なして我一人ゑふい心のさむるなりけり

海邊子日　子日ぞと人のまねして浦の子がひきてゑるゐも千代契るらむ

江上霞　みをつくしごぎもとはりて舟人の霞をたどるみつの浦なみ

曉鶯　軒ちかき竹の葉風いさえながらわさ日まちいでて鶯のなく

朝鶯　鶯のえだうつりもとぬれぬらむ柳のゑづくうめのゑたつゆ

夕鶯　ゑめ野ゆきむらさき野ゆき行き〳〵て枕かる野に鶯のなく

去年ふりし雪のまだ消わへでありゝれば

雪きえぬ庭の梅が枝をりつれば花のはかなる花ぞちりける

む月半霞のふりければ

あられ〳〵いたくなうちそ春まだき花さく梅は園の軒端を

梅花欲散　梅乃はないまうちるらむとが園のたち枝をさらず鶯はなく

水邊柳　この頃い若鮎つるべくなびきけり玉しま川の青やぎのいと

柳經年　五もとの木陰ゐなれてもむ人のとしさへさかき門のあを柳

夕柳　春風に露もみだれて夕日かげなゝめになびく糸やなぎかな

若草　にくき名もにくからぬ名も一つ色の緑になびく野邊の若草

垣春草　末つひにいぶせかるべき我宿の垣根の小草なつかしきかな

陽炎　わかくさにねぶる胡蝶の枕よりあとよりもゆる野邊の陽炎

夕陽炎　春の日をくるゝ今までゆやなせど何のもちなき野べの糸遊

春月幽　霞よりかすみをたどる春の夜の月ゐい近きやまのはもなし

春曙　鶯のゆめのなごりもかをるらむ梅さくさとの春のあけぼの

杜春雨　もゆとても人もをさめぬ大荒木のもりの下艸春さめぞふる

雨ふりけるに　うぐひすのぬれし翅に梅のはゐひとひらとまる春雨のそら

二月八日春雨いたくふれり

春雨に小田はますらを心あれゐ蛙すむべくみつせきゐかり

山歸雁　てゝも又かりの憂世と春山に跡ゐをまませていつち行くらむ

野雲雀　野邊のひばり菫の花の朝露にぬれしつばさを空にはすらむ

二月三日初午の日稲荷詣といふことを

待花　またざらぬ花もはえなき春なるをけふの恨いなさけ也けり

名所初花　初瀬女のつくるときゝしゆふかけて誠の花ハさき初にけり

朝花　はつせ山あしたの鐘に立いでてちらぬ櫻のはなを見しかな

花盛開　ものいはゝ盛の花にかこたましまちにしはどの心いられを

花盛　世中の花にゐくるゝ庭ざくらゐそきしもこそ頼まれゐけれ

靜見花　柴人と身をなしはてゝ櫻ばなゑつかにめつる春のやまさと

花遠近　風もなき空ゐゑづけしなべて世の習にもれし花ならねども

折花　をしまるゝ清水寺のいりあひに北山ざくらいまやちるらむ

花隨風　古枝よりをるべかりけり櫻花またこむ春のけふをゐもへば

立田山もみちばかりと思ひじを花ゐもつらき神でこそかな

隣　花　花なきも中々うれし我ざかもいとふとなりの軒のはるかぜ
山家花　さくら花われとふたりぬ山陰を何にとふらむけさの春かぜ
社頭花　いなり山みつの燈火はの〳〵と花にのこれるあけぼのゝ空
風靜花芳　かげうつる水もうごかぬ夕風を時なりけりとかをる花かな
寄花夢　あこがれて花にぞやしゝ恋のゆめかどろかす春のやまかぜ
落花如雪　山かげやはらはぬ雪とちる花に跡をもつけず春ゝいぬめり
澤落花　みよし野の田ぢむの澤をたつ雁もにごさぬ水にちる櫻かな

彌生十四日曹司の庭の花ざかりに

たぐひなくのどけきものゝ花見つゝ眺むる春の夕べこけり

大井川に筏くだすかた

大井川となせにうつるかげとめて花の上くだすはるの筏士

わがすむ山の櫻花さきたりと人のいへども深きつゝしみの身なれば出て見むこともかな

はねば一枝手折らせて傍なる花瓶にさゝせて

四の緒に花の香をめし逢坂のめしひに似たる春を知るかな

去年の秋吹上の御園見せ給ひし時花の頃ならましかばといひあへりけるを此春ゝいとよく咲出ぬるをばけふ參りて見よと仰言ありけるゝゆくりなくこのしこくて　壬寅

あなめでたさくらくゝと去のびつゝ今日ぞみ園ぢ櫻狩もる

躑躅　いつのまに荻のやけ原色かへてもゆる躑躅の花となりけむ

若櫻　山吹の花になくなるかへるでの若葉かげよる池のさゝなみ

山吹　せゝ見れば風に黃金の波たちて岸の山ぶきかげあせあけり

苗代　蛙ゐも去ぼしとろをえさせけりまだせきあへぬ苗代の水

橋邊藤　はし殿の松にさきたる藤のはな何のねがひを神にかくらむ

暮春藤　忘れてもかざしにいせじ春と夏とふた心ある藤なみのはな

藤牡丹の花さかりなりとをば君のもとよりいひおこせしにこの月ゐはやけどもはち

執り申せばえものせでかくよみて遣はしける　侍子

春風　たちよりて見ましと思ふを公ぢことまつはれり藤なみの花

壁代にかく蝶とりも春去りてうぐいすかすむ軒のあさかぜ

春木　いつしかも軒端の梅のかげやせて春風すさぶありあけの月

春といへば花なき山のうつぼ木もむかし忘れず打霞みつゝ

春里　春いたいうしの歩にまかせてもなほくれおそき大原のさと

暮春雨　をめやかにふる雨ながら花いちり春いくれゆくをこ心なさ

春雨も花まつ頃にくらぶれば今いかひなくふる世なりけり

三月盡　ちる花をさそふばかりと見し水のけふい春さへゆるさじりけり

首夏行客　うの花の雪まをわけてゆく人の面白くこそうたひつれけれ

餘花　ありてうきさが野の奥は遅櫻まにあはれなる花ごころかな

山餘花　老けりと人も見なくにかゝみ山葉がくれあのみ殘る花かな

池邊新樹　折々い池のおもてに風すぎてちらぬ若葉もうくと見えけり

卯花　賤の女がおあたりならし雨の日も卯花ごろもさらしなの里

卯月郭公　さわがるゝことやう月の時鳥をのびねあのみ鳴てゆくらむ

遠時鳥　こゝにしもかすべき袖いあるものを雨夜にとはくゆく時鳥

雲間郭公　時鳥ひとのうらみをおふものと去らでや雲の絶間がちなる

酉のとし五月五日こもりゐる身のことを

時しあらば菖蒲のかゞちかけまくも畏いきけふの殿にさゝまし

戌の年端午の日思ふことありて

撫子　ひつまじき色おもさくか我宿のはゝそのもとの撫子のはな

池上蓮　にごりにいをまぬものから世は中のうき葉も交る池の蓮か

夏草　と鎌もちはらへばおひていぶせさの憂世に似たる庭の夏草

菱刈　五月雨の晴まを時とうちひれて小菱かりはす蓮のやまはれ

都梅雨　いくすちかわだちの水は流れゆく車大路のさみだれのころ

旅舟五月雨　とまり舟とゝへ並べて梅雨の雲のゆきゝをながめつるかな

水邊夏月　あやなしと鵜川の舟い歸れども我おもふ瀬に月い出おけり

六月十三日の夜月白く風すゝしければ　庚戌

ひる見ればはかなき松の一本を涼しきかげと月ぞなしける

夕立風　いけ水にこゑといろうす夕立にかくれてさわぐ蓮葉のかぜ

松下泉　島つくり橋かけわたし夕月をまつかげ涼しにはのやりみず

夏野　さ百合葉のゆりてばしたる露のまにさむる夢野のかり枕かな

なつのつきといふ五文字を句ごとにおきて

何事も常なるさがとはとめていつらきもうきも昨日みし夢

初秋月　夕露の秋のならひとかきそめぬ月のこれより涼しかるべし

早秋雨　天の川わたらぬさきの棚機のそでぬれぬべし秋さめぞふる

牽女悅秋來　棚機のいつはた衣いつしかとまちしかひある秋かぜぞふく

風前荊萱　御秣にかりのこされてかる萱のよにおちはるゝ野邊の夕風

苔上露　あはれたがたてし石文苔むしてつゆぞ昔のえるしなりける

名所鶉　波こゆる野島が崎のもゝき原こゑたゞよひてうづら鳴なり

田家霧　やゝはるゝ田面は霧のひと處たちはてゝたる朝けぶりかな

月前虫　むさし野の果なく虫はすだく夜の月の聲とや人のきくらむ

文月十一日の夜月いとあかきに虫のあまた鳴きければ　四己

撰ぶべき人かげもなき片里のむしのもゝなる秋の夜のつき

月前擣衣　賤の女の月にそむきて麻ごろもなにの恨をうちかさぬらむ

曉月靜　そよとだに風も音せぬあかつきの桂のはなの影えつかなり

雲間月　かりがねの羽風に動く雲まより月はひそめたる黃昏のつき

翫月膝上　膝の上にふきてまさぐる玉琴も月あひかれてたゆむ夜は哉

有明月　ほど〳〵に月宿しけり露ふかきま荻尾ばなのあかつきの袖

月照古橋　たえ〳〵に網代木見えて月清し波まきよし宇治の川はし

談鄕月　月宿すためゐあらねど夕露のふるき都の淺茅ふひにけり

月下松風　須磨の浦や昔をとへば月をかきてたへ顏ゐも松風ぞふく

文月十五夜の月に己酉

かゝげる月見ぬ人や山里をうしと怪しといひぐさすらむ

八月十五夜　流れゆく秋の中川せきいれてけふをせに見るもち月のかげ

卯の年八月十五夜友どちのもとへ遣はしける

天地もへだてぬものゝあきの夜の月とまおとの心なりけり

申の年八月十五夜月いとあかゝりをど柴の戶ゐ深くさしたり何事をこのいひ出すべき時ゐもあらねどいさゝか思ふ心し侍

世ゐ遠きおの山里ゐ秋しめてもめるゐ月とまどなりなり

丑の年長月九日人々もとへ折櫃ゐ菊の花のかたしさる菓物をもりておくるとて

君ちとせ我もちとせと契るかな今日さくきくを枕ごとゐて

菊花盛　きくの花さかりになれば我宿のまがきが島によする波ら

遠紅葉　よにえらぬ色にそむらむ山姫の霧のとばりの奥のもみち葉

園中殘菊・白菊いこむらさきわもなりにけりたが元結の霜にならへる
夜聞葉聲　夜を寒み人去つまりし柴の戸をたゝくや風の木葉なるらむ
紅葉の殘りたるに雨風わらかりければ
なか〳〵に殘る心のきたおさをそゝぎすつらしけふの村雨
冬　月　かり殘せたゝひともと此荻の霜に光去みつゝ冬の夜のつき
浦千鳥　こと浦に千鳥なくなり霜がれ此あしのよ深く霜やみつらむ
水鳥　冬の池に冬の色なき水とりのかものあを羽をふくあらし哉
炭竈夕烟　をの山や炭やくみねのゆふけぶりいく里人を春におすらむ
野鷹狩　はし鷹のをぶさの鈴のころ〳〵と霰たばしるかり場野の原
豐明節會　み心をよし野の宮のふるき代にかへす少女の袖ゆたかなり
待戀　ともずれば隣の門をさゝく音のほと〳〵胸のさゞめつる哉
戀風　夕まぐれ去のふく風のさら〳〵にふた心おき我と去らずや
寄草戀　住の江の岸におふてふ草の名の人を忘るゝ去きのまもなな
寄烟戀　飛火野の野守が家にたつ烟ひとすぢになぞおもひそめけむ
寄橋戀　遠つあふみ濱名の橋の中たえてかゝるもあやな袖の白なみ

寄水戀　くゞてしも去るべきものか世中の人此心此あさかはのみゴ
寄井戀　歎きのみこりとこりつゝ斧の音のほと〳〵しくも迷ふ我戀
寄櫛戀　朝ごとに深き思をつげのくし我身をさへにけゴるおりけり
六月二十日の夜こゝろよく雨はれてかたわれ月のさしのぼりたるを己酉
みちかなれある世のさがとものいはぬ天なる神のみ心の月
谷風　大木曾や小ぞその谷のかけはしい嵐をわたる心地こそすれ
薄暮嵐　夕ごりは雲もみだれて山鳥ねぐらのもりにあらしふくなり
山中瀧　山伏のふきなす貝のこゑくれて雲にといろく奈智の瀧つせ
磯巖　苦むせる磯の巖いつ此世の數にとりたるさゝれなるらむ
百日紅　いさゝらに通ひし車ひきかへてもゝかもあかぬ花の色かな
花の色に似る物なきを猴すべりさるみても又むくつけき名や
見し文の中の事を
龍れ馬も時にあはねば賤の男が跡まもりつゝおげき運ばむ
九月十二日朝まだきに三緣山の御廟に詣でて歸るさに愛宕山の下ゐて女の數多つどひたゞ
るを見て
野邊をのみ秋の花ぞと思ひしい世にはやからぬ心おりけり

子の年九月つごもりに無量壽院得仁が高野へ歸る時手ならしゝ手爐をおくるとて

峯のさり谷間の露の朝夕におくれぬものゝおもひなりけり

卯の年葉月半清通が濱松にかへる馬のはなむけに

私の旅にしわらねばいとひゆけ草のあさつゆ松のゆふかぜ

忠精が山形へゆくをおくる

露ながらいはひてをゆけ秋の田の稻のかづらの長ちはの榊

君がのる駒のまぐさの芝げりなばかけてをまさむ前の柵橋

寅の年眞間にならせ給うて道もゞら鷹ゐとらせ給ひし雁狩御手づから賜はりゝ今日多

くの仕うまつれる御供のうちゐもからやうの賜物いなしまる常も例なかりつる事ゐて今日

ぞいひ末々といひ御側ちのう仕うまつる身のめいぼくかしこしどもかしこゞで

空近くつかふる道いこの鳥のまゝひまりぞく時ゐもるゐと

文庭中の紅葉を御自ら手折らせ給ひて是なん二葉の楓なると仰ありて御手づから賜はり

さる御をやびい申をも中々詞さるまじく君と臣とは中やはらぎにへゞでなく物ぜさせ給

ゐ御心のいちじるくかしこさゐ物狩もえさおえ奉らで山の雪に袖はを濡りて

たをりつゝ賜ふ紅葉に臣の身のあかき心のいろをそへまし

常總は鋼利根川は水年々にあふれて田畑い更なり民の家どもひたすこと數多さびなれば

公ゐもいたゞき思はし給ひて水の憂なからむ爲に印幡の沼より捨見川へ流ひき分さむに

ゐくことわらじと御定めありき既に天明の昔もさる由定まり物して其業にかゝりけれど

事はてずしてやみぬるを又いぬる天保の寅の年ふたゝび堀通さべきよし仰言ありければ

梶野良材奉行うけさまはりて先國形見にゆきしゐ其道の程は事ども記せし文一卷を見よ

とておこせたりさるを此度もさはる事ありてやみぬれどゐのれこの事にかゝつらひたる

身なればくり返し見るに良材が眞心につかへまつれる程ゐしはかられていとあはれなり

いま其文をかへすとてかくなむよみて遣はしける

とね川のながれの末のよゝまでも清き心いくみてゐられむ

弟跡部良弼が司農の職年頃うけたまはり勤めしを下臈の人々い早く職も進みたれどゐの

れのみ遲れたるをいとうき事に思ひ渡りて有しを此度思ひかけず市尹の職にめされ給へ

るがいと畏ゐくゐむされば世の移り變りゆく習ゐて早く進みし人々の中ゐい職を辭たる

も又事にあたりたるも有しに良弼のみ年頃同じ司に事なくて有けるを此度御撰にあたり

たるこそ天道い謙にさきはひすどかいへるにも叶ひしなるべければ此さきゝも其職々

を深く謹しみ守りておはざりゐな思ひそ天下の憂に先だちて憂ふるこそ心苦しからめ天

下の樂に遲れて樂しむいいと易き業にて自ら世の禍も免かるべきたつきになむと誡しめつゝ甲辰

さし出でし其一枝はもみぢ葉い風の荒きにたへぞちりつゝ
もみぢ葉のちるにつけても思ふ哉奥まる枝い風もさ吹き

思ふことを　難波潟なにゝ心をそつめなむ世のよしあしにうおく事なく
かくてゐれあの山人と成ぬれどけふも憂世の事ぞとひくる

林前祭酒が墨水の和歌二百首板にゑりたりとて一卷ふくりしを見るに唐國ぶりい更あて世々の歌人の口つきにもはづましきそらべどものおのつから雲れ上人の口つきあい變りてゆの金槐集の高き趣も見えたるいいとめでたくありがたき事に思はるれば其由いひやるとて卒爾

思ひきやふみは林のなかゝにさく言の葉の花を見むとい
かきつめし松の言葉ゐそれば枯れぬ千年のをちの鎌倉のさと
をさな一人おきて身まかりし娘の一週はわざゐ
そのべども歸らぬ水に影見れば袖こそぬるれなでし子の花

常侍集抄　終

あづまうた序

いはまくもゆゝしき二荒の宮の大神天の下ひけ平らげ給ひてまつろはぬ國もなくまう來ぬ夷もあらぎ大みいつくしみ到らぬ隈なんなかりしより
うま人いのら衣ひもときさげて玉のうてなのうたげにおき民くさい高殿
のかしこきひいきをわすれて八十のちまたにうたひおのがじし樂しかる
月日を喜び長閑なる春秋を送り迎へざるなんあらざりけるかくて大御世
い春の花のさかりに匂ふが如く松の葉の常磐にさかゆくまゝにおのつか
ら千世の古道ふりぬるおとも起りかくれぬの隱をたるあともあらはれて
言の葉の道もあか星のあかりゆきつゝ曇り夜の暮らはしき方もならずな
んなりゐけるさるいつかさ位高きかみの品のあたりふこそもとより世に
すぐれたる人々も數多おいして其名とりん〳〵に聞えにたれど去つたまき
いやしき我どもがらのさやぎくまねび出べきならねば今こゝにとり出て
いふべくもならぎたゝ此去ものきざみゐを青淵はそこひ深き心を去めて
岩がねのかしこきかどある人々これかれいで來にけりこれをはぢりたる

世にくらべ見るゐ猶今をすぐれたりとおぼゆるたぐひなんありけるそれが中におしてるや難波の圓珠の庵のひぢりつぎねふ山しろの稲荷の山のはふりこそ其名をちこちにしも聞えゐたれ此二人の敎世に廣まりてはり歌のまなび古に立かへりぬれバあがりたる世を慕へる歌人も多くいで來ゐけり志かいゐれど得たる所得ぬところ互にしもありて學の力れけたるいかへりて歌の心におくれ歌よむかたに心引きたるい中々に學のわざおろそかゐてゐを兼得たるなん稀ゐりけるさる我此二つを兼て世にもぜぐれ人も許したるい縣居の大人在滿の宿禰さていい橘の翁なん有ける此三人のぬしたち其學の心いひとしきものから歌の手振いかゐひ得る方はたにて心々ゐぞゐりけらしかの大人い尾上の松の雲を凄ぎてめも及びがたき古の高き姿を尊み宿彌い秋山野にあやゐる花の錦のこまやかなる中頃の巧を喜び翁い糸竹のことさらにまう、けたる聲ゐい孤ちで百鳥の音此かのづゐらなる調べを好みて唯に眞心よりまみいでたれば古にもはら此後にもつゐぞわれと一つの姿をなんなせりけるいでやこの人々いしも身い品くぐりたれども心い青雲の高きを占めたれバくだちゆゐん世にも其名

かくれさらむ事志るしされバ今より幾百とせを經ともかく其盛なる今の世の手ぶりを思ひ見るべきくさはひにもひきいでつべくなむ覺ゆるい珍らかなりとてそいふべけれ志かるを大人と宿稱とい其歌もふみも早く世に傳へたるを猶この翁のみ世に顯はれざりしがあかぬわざになんゐりしを翁のまなび芳宜園此ゐるじこたび思ひ起して東歌六卷を板にゐりなんとをこれ翁のみづからえりいでゐけるなりとぞこれよりしも翁の言の葉廣く傳はりて彼二人とひとしくかぐいしき其名のいやましにあらられゆゐむ事いまろこばしきをざになん翁はじめ名を爲直志云ひけるが後に枝直となん改めゐる其とはつれやをさつぬるに古曾部の入道能因がむまで加藤五判官景貞といひゐるい伊勢の國になむ住みける夫より十つぎにあたりて彈正景光いへるい北畠の家の家司とゐりて飯高の郡にすみけり景光より七世景之といへるが時ゐ北畠の家い亡びにたりかくて後景之い世に際れて伊勢寺といふ所にゐんてもり居ける景之がむまで重政に至りて出て紀の殿に仕うまつりぬ翁いこの重政より四つぎの後にて若かりし時に江戸に來りて町のつかさの下司にめされにゐり齡い九十あまり四に

て天明の五とせ八月になん身まかりけるさて其家故ありて中頃より藤原を名乗り來つるを更にもとつ氏に立のへりて橘を用ふる事い翁よりとなんきおえし

享和のはじめ此年八月　平春海

ちゝの實の父の翁神風伊勢の國にあれいでてかはぢ翁歌をしも好みはまれしにより年いと若うりし程より歌になむ心をよせられるとぞゆゑよしありて此とはのみかどにまね來ておややけの暇おかりつれど家に歸りてい唯燈火此もとにして古へ今の書見あるい得がたきをもあさり出てみつから數多の卷々を書きうつしはた歌つくりて思をのぶへられけり常にいへらく日にけにまどころのみかど出るよりやゞて歌をかうゞへ道をがらも心の内あによひつゝまかつれバかのつのら心も解けく清らに成ぬといはれき千蔭九つ此年より歌つくる事を教へ給ひてやゝおよつけゆくまゝに歌てふものゝたふとむべきことゝりを示し給ひぬ千蔭十あまり四の年にかあり々ん縣居の大人を近隣に招き住ませてかたみにむつみかいされつゝ千蔭い彼うしの教を受々よとてなん名簿送らしめ給ひける父翁七そぢあまり二つの齡にしてねぎごとのまゝお仕へを云ぞき給ひてい殊に歌にのみ遊び給へりけれバ歌の數いとさいに成にけりさるを八十ぢばうりにして彼歌をも文をも自らえり出て其年々をわうちて東歌と名づけかれるさうし六つ七つ有て其もとの集どもいつばかりやい捨られしにう今求むれどもなし其東歌と云るされたる中にも猶心に叶はざるやあり々む多くけしものしあるい二とせ三とせが程歌いと少くて萬葉集の歌をまねび作るをひたふるに珍らかなる事に覺えて古き歌の調とゝのはらぬをさへにまねび見つるを後に見れバうるさくて皆すてつなど記しかれつるも有けり父翁天明の五年といふ年の八月十日に九十ぢあまり四の齡にて身まかられし後かの東歌を板にありてうからやうちはた教受けし人々にもおのちてむと思へりしのど其頃い公の暇なかりしかバさる事もなし得ざりし程に今年十あまり七年になむ成に々るいでやとて思ひか

こして四の時戀雜などわのちて長歌文らまで千蔭寫しとりて板にゑりぬはたくさ〳〵書きつめ置のれつるもれ〳〵ちりぼへるもこゝらあるゐ猶すぎ〳〵にものしてんかく書きつひるゐつけても昔千蔭をおはしたて敎へさとし給へりし事どもの歌にもて世替にも此處彼處に見ゆるにたゞ涙のみこぼるれバをぢなたゞの上にいとゞたどゝしさぞ添ゐりぬる扨つねのことぐさに歌ゐすてずしてよみてよ歌よみての德ゐ老て後知らるゝ事なれバ今ゐいはずといはれき今なむ千蔭ゑづたまき數ならずして月花のすさみうとからぬにつけてもゐれ敎のかしこさをなん思ひあはせられぬるかれいさゝかみたまのふゆに報いむとてなりけり御代の名を享和とあらためられける年の文月橘千蔭ゑるす

あづまうた抄

橘　枝　直

春の始の歌　なべて世のはるの光も玉垣の內つ御くにやはじめなるらむ

春從東來　唐人もふりさゞ見よとくる春ゐ富士の高根にまづ霞むらむ

海邊早春　春くれバやゞて霞やへだつらんとやざかりゆく海ごしの山

遠山霞　武藏野をふりさけ見れバちゝぶねゐ春日かゞろひ霞棚びく

霞添山色　世ゐ春になりにけるかなたえ殘る雪にやつれし山も霞きて

故鄉鶯　ふる里になれし鶯ことしだに歸りやくるとまつになくらむ

元日子のひなりけれバ

いざさらバ鶯きかん松ひかんはるくる今日ぞ初音なりける

雨中春草　春雨のめぐみにもれぬあれ哉うれたかるべき蓬むぐらも

ささらぎ廿日あまりにひはり此使として上總國に下りてより水無月のはじめつ方歸さに赴さけるはどの歌の中に

わたつみのかざしをだるゝ春風にぬきとめぬ玉の沖つ白浪
ゆきゆけば一木の花の陰なれや野中の岡にかゝる雲らくも

梅をよめる

朝がすみ立いでて見れば梅さきて有明の月にはる風ぞ吹く

霞中月

春の夜の光を花とちらさねどかすみや花ぬにほひなるらむ

旅春月

草まくらみやこかもへばはれやらぬ心に似たる春の夜の月

櫻河春

よとともにあがれて久しさくら河花の雲づくを水上にして
ふもと田のなゐしろ水に影みえて山のさくらの花咲にけり

櫻待花

とくさかば移ろふ程も雲かあらんよし山櫻まちもかこたじ

山花末遍

うつろはん恨にゐへて山櫻さかりまつまをさかりとや見む

見花

かつをれど慰さめかねつ櫻花さそはん風のうしろめたさに

靜見花

つく〳〵と花に心をちらさねばのぜも梢やよきて吹くらむ

花留客

よしさらば思ひ思ひをおゝろをんふる里人を花にまかせて

月照花

さゝりなる花に光やゆづるらむそらゐかすめる春の夜れ月

海邊花

あづさ弓いそ山さくら風ふけばゆきに棹さすあまのつり舟

故郷花

ふる里を花の頃のをとふ人ゐあれにゐりとも思はざるらむ

花主

をめゆゐぬ野中の櫻みる人のこゝろや花ぬあるじなるらむ

櫻ぬ散るを見て

かざせども隱れぬ老のもとゆひにいとゐふりそふ花の白雪
こゝろよわくかへりゐねたる鶯の聲を殘して春ぞ暮れゆく

暮春

花ゐ散りぬ今ゐとゐめてかひなしと思ひすてゐも惜き春哉

暮春山吹

行く春ゐ何のいそぎに山吹の花のさかりも見はてざるらむ

餘花

花ふそき山のとかげに住む人ゐ櫻をおつれものと見るらむ

待郭公

まちわぶとことやつてまし鶯のゐへる古巢の山ほとゝぎす

郭公頻

秋ちゐみこゑををしまぞほとゝぎす古巢ゐ歸る別つぐらむ

五月雨

我門のあふちの花のさきそめてちるまで晴れぬ五月雨の空

庭五月雨

日をふれば庭に海なすさゝだれになびく玉藻ゐ蓬なりけり

六月ばかり春道秀倉などいざなひて角太河ゐ舟さし出て月を見てよめる

ゆく水ゐ月すむ夜半ゐ河風も秋のさまけてすゐしかりけり

山家夏月

山の井のつるべの繩のみじか夜に月の影くむ杉の雲たいは

澤螢

うず〳〵にをゆる螢のかもひにゐ野澤の清水ぬるむべら也

河邊螢　ふけぬるか河おとたかくなるまゝにそくさの螢光そひゆく

夕立晴　夕立のはげしかりつる空はれて庭ゐひれふる藻ふしつか餅

家々納涼　いへおとにおなじ流をせき入れて夏をよそなる川づらの里

六月祓　今日とてや大和河内のいみき部の太刀たてまつる萬代ゑ聲

幽栖秋來　清水くむたよりばかりの道とめて淺ちが奥も秋のきぬらむ

早秋朝山　をぎの葉に聲さゝへそめしわしたより尾上の松も秋風ぞふく

七夕　たなばたの天つ玉床あせよりいたがさめとてか塵も拂はむ

天の河たなはし渡し船わたしなどゑば〳〵も渡さゝるらむ

薄　なはざりにうゑしまがきの糸薄秋をなゞさむふしも有けり

草花露滋　さそへどもあとより露のおきそひて尾花が袖にまわる秋風

草露映月　心なき草のたもとの露にてそうきおとゑちぬ月やどりけれ

月　雲もなく思ふおとなく月みつる秋のなかばゝ少なかりけり

なゞらへて又おの秋の月みれゞ月に見らるゝ心地おそもれ

漸昇月　立ならぶゑづ枝を隈とみるがうちに松をわかるゝ峯の月影

停午月　千ひろある谷の下ゆく水底もてらしのこさぬ月ゑひとゝき

獨惜月　をしとおもふ同じ心の袖もがおりさぶく月をゆゝて宿さむ

八月ばかり月あかき夜よめる

秋の夜の月影ゑろし白かしのえだにも葉にも霜と見るまで

八月十五夜　あだなりと身をゞ恨みじ澄む月の秋ゑ一夜を千年と思ひて

秋きぬと風のつげてしわしたより待し今宵の月のさやけさ

十五夜雨そぼふりけるに眞淵などとひきて歌よみけるついでに

こよひしもふりくる雨い久方の月のかつらの花のゑづくゝ

山月　秋の夜の月のさゝとや富士のねの煙も今いたゝきおりゐむ

嶺月　うき雲ゑかりゑづまれる時まちてやゝもみのぼる嶺の月影

故郷月　葎生のやどにもつゆの玉ゑきて月の爲にいふるさともおし

月前懷舊　人ゑれゑわはれなりしもうかりしも思ひぞかへゑ袖の月影

月催涙　なにおとのおもひもわかぬ袖の上に我や宿せる月や宿れる

月前筏　筏士も秋行くみづの川よどにさをさしとめて月や見るらむ

鴈　此ごろの秋風寒みさをゑかのつまとふなべにかりなき渡る

秋風に海山こえてにゐ鳥ゑかつしかわせをかりぞなくなる

鳴　かりつくす山田のひたの繩たえて友なき鳴の羽音さびしも

山みなもみぢせり

山いみなそめぬこの葉もなきもゝを時雨の雲の何殘るらむ

九月廿日の夜よめる

秋の夜の老のねざめいのどけくてなど一年の程なかるらむ

九月盡　別るてふことさへそへてうき秋のうき限をも見果つるかも

今いとて野べの虫の音鹿の聲いざおびたてゝ秋ぞくれ行く

遊郷時雨　山じろの水野のさとやゑぐるらむ雲おおくるゝよどの川舟

寒松積年　ことぞとも松いゝ思はで經にけらし時雨も霜もよきぬ物から

千鳥聲遠　たまの浦はなれ小じまの友千鳥こゑきくばかり浪ぞ靜けき

行路深雪　中々に木のね岩かどうづもれてやもゝに見ゆるゆきの山道

雪朝遊村　山もとの夜のまの雪の下をれやけさの烟のつま木なるらむ

うるふ十二月十日あまりよべより雪ふりたるに眞淵へいひやる

跡つけてとはれぬ宿の白雪いふるかひもなく消むとすらむ

八十ちあまり三にありけるくれに

文春に逢んとまちらんやそぢ余りとづはくむ身の今日も知らぬて

年のくれに庭の梅をよめる

多天象　あらたまの年のゑはもに成ぬらし沫雪ゑのぎ梅のはなさく

天の河水いかばかりこはるらむかげさへよどむ有あけの月

多市　三輪の市に炭うるおきな昨日みし嶺の煙を今日はおぶらむ

多戀　あふと見しゆめ驚かも玉あられいかにくだけて物思へどや

寄原戀　たのめてし人の心のあさぢ原うつろひゆくか霜も置あへぬ

寄木戀　忘らるゝ身いゝ埋木の年を經てなどうきふしのくち殘るらむ

高師山　秋の月たかしの山の松かぜにさそはれわたるはつかりの聲

海路　こぎつれてみおと出にし友舟もかたりあふべき波の上かい

人の伊勢に國へ歸るをおくる

箱ね山ひとりこゆとやおもふらむ暮ふ心いおくれやいもる

人のみちにくへゆくをおくる

程もおぐあふくま川と思へどもまてがずべなし早歸りおね

遠江濱松の五社の神主森民部少輔正月の初めお來りて眞淵が廬お宿りねておややりへ

うたへ事ありとて四月までとゞまりゐりもとより近きゆたりあれバ去ぼ〳〵ゆきうひて語らひしふことなしはてぬ明日なむ濱松へまゐりたゝむむむ春又まゐりむむといひなれバふはゐのやうにてさもがに名殘惜しくてよめる

春ゝ又こえてを來ませ箱根山あけゆく年をまつおとにせむ

仕へを去ぞきて後伊豆の出湯へまかりけるに湯の上なる土肥がねに登りて夕さりつ方山を下る道にて鹿の聲をきゝて

つとにせむ物にもがもな土肥がねのを花くぎ鳴く棹鹿の聲

鎌倉の里にて

たびおろも匂はも萩の花ちりてをしねゐりはも鎌くらの里

千陰がにはとりのひおつれたるかたかゝせて歌書きてよといひけれバかいつけゐる

子をおもふれやのをしへの庭つ鳥かけてわもるな殘も一聲

述懷　あけくれの思ひ出にして年ゝへぬ月と花とのあをかねバ

老述懷　ありて世にうきめゝ見じと散る花を羨むばゐり身ゝ老にけり

寄名所述懷　元結の霜の去らゝの濱ちどり我世ふゐぬとねをのみぞなく

いかゐる時にか

神代より松ゝみどりに雪白しされ常ゐしといひはじめけむ

往事如夢　もぐしてし昔思へバぬばたまの夢てふものを現とやいはむ

寄露無常　はかゐしや袂の雫くさの露いつまでとてかゐくれはつべき

むつましゐりゐる人のみまゐりゐる頃

かくばかり悲しき事をきくべくゝなど徒らゐ長らへにゐむ

年頃むつみかはしける倉橋正房が八十ち餘り五にして病いとわつしく成ける頃よみて

つかはも　さきださバ去をりしてゆけ死出の山今幾はども君ゝ待たせじ

正房ゞ一めぐりに思往事といふおとを

面かげゝ言問ふばかりさざゐにてうとく成ゆく月日悲しも

むつましかりける人の身まかりける頃月をみて

忘るゐよあらぬ境にもみかへて此世にまさる月ゝ見るとも

伊勢ゞ國ゐ姉もたりける友その姉みまかりぬとき〳〵て吊ひにつかはも文のはしに

身を露にたぐへし終の夕べにも人の千とせや思ひゐきけむ

惠照尼の十七年の忌日に

面影ゝ在しその世にかはらねど去るしの石に苔ゐひにけり

古里にて母君の過たまひしもいつしか五十年とありけるに手向をとてよめる

嬉しくも老ぬれバおそ足乳根のいそちのみ靈今日祭りけれ

いわけおかりしより吾子の如くをしへたてし大橋元義ゞみまかりけれバ

ながらへて悔しきもれいとはるべき人此跡とふ手向えけり

妻のみまかりし頃よめる

先立てうきめ見みる人よりも老て殘れる身こそにくけれ

五つと三つに成りたる子供のいはひおとしける日よめる

愚かさの親に似よとい思はねど教へおかるゝ子の行方かな

千蔭にわたへゝる

つとめよやつゝしめよやと殘しおく老のくり言千年忘るな

二月廿九日の夜火に遇ひてをとゝし十一月火にあひし後造れりし家を又失ひけれバ今ゝ家もいとあまでやけ殘りたるぬりおめに去ばしい住をなんと思へど千蔭が幼なき心にいりにわびしと思ひおむと心一つを定めかねて

かゝりける折につけても春の野の燒野のきゝも身をバ思はを

七十三にありける年の七月かたじけなき仰おとにて祿賜はりねぎごとのまゝに仕へを去ぞきけれバかしこまりにさへをしてよみ侍りける

み惠のかしこき蔭ゝ塵ひぢの數おらぬまでもらさゞりゝり

麻　鷲　獨活　羊蹄　蕊　水葱　裏

草名十　あさましやあふ日も去らにこもりゐてうとし寂しと泣や明さむ

八月十五夜によめる旋頭歌

武藏野ゝ果なきもれい心おりゝり

此まゝにいく夜あらさバ月おあくべき

八月十五夜月を見てよめる歌並に短歌

あもりつく富士の高ねに、たゞむかふ武藏の國ゝ、大君の遠のみかどと、大殿を高知りまして、天の下まをし給へバ、少女ども少女さびもと、手にまける玉川の水萬代にたゆる事おく、秩父ねの五百津いは村、動なき國のは見えて、野を廣み此月頃ぞひきのぼるたつのみ馬も、此野らゆ引くといはをや江を廣み日並のみけに、そなふべき狹はた廣はた、此江らにいさりもつき也、春されバを岫をゝりに、さく花を見つゝぞ恐ぶ、秋されバ隈なき空にてる月をめでてぞ思ふ、昔よりきかをぞありし、谷具

久のさわたる極み、ゑはなわのとゝまる限、かくばかりまつろ
ひなびく、み代のためしゝ、

反歌

かもめすむ江を廣みかもてる月ゝ秋の夜渡る影ゝのどゝさ
ま荻さく野を廣みかも秋の夜ゝくゞちゆゝども月ゝ隱ゝゝ

あづま歌抄終

柿園詠草

加納諸平

春の歌什中ゟ

鶯のけさなく聲を糸にしてかすみのそでゟはなぞぬはまし

初瀬女が手玉ゟばえて露ひかるゑだり柳にはるさめぞふる

開居菫

春ゑちぬ宿ゟなさきそ菫ぐさよしや胡蝶ゝそでゝするとも

人ゑれず住めバすみれの花すらも軒の蓬にかくれてぞさく

春風

雪とのみまちし櫻やちりぬらむすだれゆらぎて春風ぞふく

雉

つばなぬく淺茅が原にゐさりても猶戀やせてきゝすなくらむ

海邊霞

沖かけて霞みにけりなそなれ松なれのみ春の色とみしまに

待時鳥

杜宇まつにしもさく藤の花ひとのこゝろのなびくなりけり

まゞ宵と心ゆるしてほとゝぎす待ちゐへぬ空に初音もらせり

草花

春日野や野守もゑちぬ花ゝゐれゞ夕べの露のかゝらぬゝなし

遠江にありける頃河霧を

かしま川鳥羽山かけてたつ霧に舟まつ袖のみえずやあらむ

浦　月　浪おゆるまりはの浦のあきの月やなぎ櫻のかげもさはらず

名所紅葉　あすさらむ舟木が中にもみぢ葉のこがれてみゆる足柄の山

落　葉　心して風のれこせる一葉すら鵙のはぶきにさそはれわけり

冬　朝　霜とくる枯生の茅生の朝ぎめりやがて春めく日影あらまし

氷　鳥　蓮葉れうかびし氷にうかぶとも契なかれそいけのをしどり

年頃心かけたりける女彼方此方遠へて逢ざりけるを長月のつごもり方ゆくりなく物語してこし方の事ども何くれといひあへる折そこにたてりける菊の花を折て詠て出しけるといふ心を

月と見え霜とまがひし菊の花をれば有けり

四月末ばかりにや遠江をたちいでて伊勢國松坂の郷より川俣越といふ山路をへて木國にこむ道すがらよめる歌の中に

少女らが花の袂を八重山の木々のみどりにかへてこそみれ

東路によたゝなれぬる松陰ゝ旅れうけくも去らでもぎしを

あふぎみし庵の烟の末よりもたかき山路をれぼりきにけり

故里をたちし日數とつげてまし七日の市にひともあはぬか

文政九年れ春夏かけて遠江にまかりける時道ゐてよめる歌の中に

春霞たちいづるからに里の犬の夜聲ゝたえてきゝすなく也

旅衣わゝくばかりに春たけてうばらゞ花ぞ香ゐにほふなる

春すぎて夏さく花のうれ花のうきゝかさなる日數ゐりけり

鈴鹿山を越えけるに花なは盛なりければ

伊勢なれど都をとめが袖れ香を梢に去めてはなゝさきけり

若山にうつり住みける又の年の元日に若水をくむとて

すみそめて思へばけさの若水ゝ千代の契をむすぶなりけり

遠江國にありける時石川依平とひきて歌よみける鼠花火といふ物の名を六月ばかり

呉竹れよわたる月をいねずみば靡く葉風のみにや去まゝし

依平がもとに宿りける頃佐夜中山に秋を殘しみゐいでて

谷の峯の紅葉のふたかたゐわかれてみゆる秋のいろかな

定家かづらといふ草を

いかにみていかゐめでてか君ゞ名を蔓の草の上にかけゝむ

伊勢物語をよみける時

都へと思ふこゝろも埋もれて雪にこもれる小野のやまざと

源三位頼政　風やどるみたけの野篠矢にはぎて射つらむ夜半の響高しも

二十余り一つになりぬる年此春

まをらをがうちもかへさぬ山陰のはた年何に過しきつらむ

故郷をいでゝつ折おもふことありて

かくながらなどすむ事のかたつふりそれさへ家のあれゞある世に

本生父翁此霊祭に寄萩懐舊といふ題ゐて人々と共によめる

我身おそよそにもうつれ萩が花もとの垣ねにやつれてぞさく

獨述懐

とわらばやゐくあらばやと我思ふ心よ誰にきゝうさだめむ

懐舊

思ふ人なきがかはくの年をへて今はたぬらを袖やなになり

寄橘懐舊

橘のたちかへるべき昔ゐゐわらじと思へどそでは香ぞする

家會はじめに立春の題ゐて年々よめる中に

淡路島かすみそめけり木此海の沖ゐ神代のはるやたつらむ

空蟬の世にあらたまる物もあらじ春さつけさの心ばかりゐ

思ふどち梅此はつ花をりかざしみ代の盛にまとゐしてまし

今切懐古

鶯の花のくしゞをあけてまつ宿と云れゞやはる此とめおし

海邊立春

高師山まつゐ昔のはるなゞら濱名のはしぞかすみそめぬる

閑居早春

天つ風花にふきなすわたつみの浪よりかくも春ゐたつらむ

春の歌の中に

うちはらふ草のあみどの塵ばかり霞める山ゐ何處なるらむ

白馬節會

こよなくも朝いせしかな花鳥といまよりいそぐ心おがらに

野若菜

おどろかす舍人が弓に青馬のいなゝくこゑも春めきにけり

都若菜

いつしかも春日長閑になりぬるゝけふゐ北野の若菜つまゝし

鶯

朝風にわか菜うる子が聲すなり朱雀のやなぎ眉いそぐらむ

若菜つむ野邊いかならむ鶯のこゑもる窓ゐゆきとけにけり

うゑたてし園の梢ゐうぐひすの木ゴたふ聲に花もよひせり

社頭梅風

み山より通ふ嵐のつまやしろさてもやつれぬ梅が香ぞする

窓前梅

文机の塵はづかしくなりにけり梅さく窓をすぐるあらしに

華墻君のゑめ給へる園に吉野此西行庵のかたうつしたる庵あり二月ばかり其あたりをも

いろありきして

ふせ庵の雪げの道をとめくれゞうとくゐ梅も薫らざりけり

絲萼梅　いとゞしくあかぬかをりに鶯の上毛の色いたれりそへけむ

田家柳　うちいでてあら田ひらかむ我門のえだり柳も春めきにけり

殘雪　梅が香をかどへる風のつたよひに雪の白山えたくづをせり

木殘雪　みやま木のかゞ野ゝ艸も色めくをいつまでかつる雪の雫ぞ

餘寒　忘れてゝ猶埋火のもとにのみはひかくれたる春かとぞ思ふ

夜餘寒　はしたなくさゆる袖かな梅が香もあやなき闇の夜床わかれて

水鄕霞　はゝこつむ淀野をかけて川水の色にながるゝ春がすみかな

野若草　雨そゝぐ春ゝ野づらの若すゝきかゝれる露もなつかしき哉

春の歌の中に　小雨ふる垣ねのうはぎとりつみて憂世の外の人をこそまて

春雨　みどりそふ軒端の松のはおもりに籠りはつべき雨の音かな

田家春雨　負かへるえびらの露に雨見えて夕かげくらしこやのさか垣

〃　桑とると霞ゐ〻こし里の子がえびらにかゝる夕ぐれのあめ

春月　さきつゞく桃の林やくれぬらむその色ながら月ぞにはへる

かのゆくゝゝおゝ雁おらし春ゝ夜の朧月夜もあかずとやゆく

江上春月　かへる雁なくね霞みて大くらの入江にふけし春のよのつき

野春月　ふると見し小倉が原の泡雪いかゞろ月夜のにはひなりけり

山春月　わすさかむ花をゝもめて山のはに影なつかしき月ぞかゝれる

河邊春月　三月まつ河ぞひ桃の木かげより春ひ心なるつきを見るかな

春月　二月のついたち頃の夕月夜おゝろにくゝもかすをそめつゝ

くれぬめり堇さく野ゝうゝ月夜雲雀のこゑゝ中ぞらにして

二月の半のそらのうゝぐもり月のはるこそよひ見えけれ

春雨のなごりの風のうゝにはひ尾上の月やはなごころなる

田家春月　影みえし燕やいづら水田より春ゝきばをかけて月ぞかすめる

春雨　もえそめし垣のにこ草露を重みふしめおなれど雨の晴れせぬ

春雨にふみ見る窓ゝ花さきにけり

をゝをりせし吉野やいづら

草も木も花さく頃の雨づつみ野山にぬらすわがこゝろかな

玉椿えづくながらやかちぬらむ巨勢の春野の雨のゆふぐれ

あめはれぬ椿がもとのにはたづみ花ゝひゝきに驚かれつゝ

田家春雨　ゆたねまく苗代小田にふる雨の靜けきみよをあふぐ春かな

歸雁　露えらむ垣内の小田をたつ雁のつばさにかゝるいと櫻かな

忘れてもわらましものを春の雁なきつゝゆくか霞がくれに
限なき空とも云らでながめけりなきて別るゝ雁のゆくへ哉
行く雁は聲をしきけば小雨ふる春はあさいも靜てゝろなし
たつ雁の聲いまさしき春ながらつもりの浦にうす雪ぞふる
近江の海湊八十あり舟にしかも思ひとまらで雁のゆくらむ

歸雁知春
湖上歸雁

關おえて雁ぞゆくなる山風のあらちのさくら時も云らぬを
鞍馬山かすめばかてにさえかへり木のめはる風雪さそふゝ

關路歸雁
餘寒

二月は空ゆきかよふ聲きけばげにとりく〳〵の世の中ぞかし
いと櫻花さへかけてまつ宿をとふらつばめのちぎり違へで

雁去燕來
燕

立出しこぞの燕の音づれにかやのそゝぎぞかついやさしき

河上霞

角田川夕日のゐはひみに云めて霞がくれにたび寐してしゞ

山霞

花やいつ雁と燕のなかぞらに霞みてたてるふたかみのやま

海邊霞

年夜門よりこぎ出て見れば うゐ潮の聲く音い霞まざりけり

春山

このもにい花やちるらむかのもふい花やさくらむを筑波の山

春望

松島やあくる苫屋のあさ霞なみもわらさぬはるのいろかな

木川春望　胡蝶とふ堤のくさのめもはるに霞をくゞもはないかだかな

春日望山　玉だれのをすの外山にゆらぐ哉さくらがさねの東雲のくも

正月はじめつゝた若菜つみにとて人々と共に野邊にいでてある人の許に立ちよりけるに
けしきある松たてりしゝばよみていだしける

色そへる野邊の若菜を云るべにて松は緑もとめきつるかな

野亭雲雀

雲雀たつ麥ふを庵のまゞきにてそらの春さへ隔てざりけり

野遊

我庵をまかせていでし鶯につげばや野邊いはなもさきぬと

菫

春風に胡蝶のゆめいさめながらあさ野の菫のたねぶりせり

蕨

春さちて蕨もえずばみ山木のかゞ野の末をたれかわけ見む
春の野をおさめにわけてさ蕨の露は玉手いとるべかりけり

難波よりかへりて又の年の春佐々木春夫がもとへ

花さかばつげむとだにもいふ人はあらぬ方ざへ眺められつゝ
夜をかけて昨日も見つる花ながらけふ又更ゐめづらしき哉

花

かゞろふはたち野のま柴をり云きてかへり見せれば花散おけり

落花

櫻さく岡のやかたに見し夢の名殘まばゆきあさづく日かな

朝花

山のはをいづる朝日の花ゑみに空までみてる春はいろかな

夕　花　さく花の色のさやかになりぬるか暮れゆく空や匂なるらむ

夜　花　あかずのみ思ひをてたる夕闇を臙になしてはなにはふなり

花下言志　つちならば櫻の花とさきいでてこん世の春を尽してしげな

根來の山寺の花見にまかりて

きゝすなく根來の山の櫻ばなさかずば今もやけ野ならまし

山路花　ひぢをりてゆかれむ物か春山のはきぢの櫻いまさかりなり

山家花　うつりゆく世さへ隔てし松垣にまじりてさける山ざくら哉

人おとに都のつとゝをりとりて軒端をやつす花ざくらかな

花窟のかたに　さく花のいはやのみしめ打はへて風たゝぬ世を祝ふ春かな

華墻君曉ふかくより花の宴ゑさまひける時

名殘なくゑらめる色をうしとみし花に朝日のかげ霞むなり

憐霞櫻の新室壽に花の宴ゑたまへるとき

二月のけふのたりひの花ぐもりかもへばそらも心ありけり

櫻さくなぎさのまとゐさよふけて遲れし雁の聲ひゝくなり

其ころよみて奉りける

ゆるぎなく八十のつなねを打はへて久しかるべき殿造かな

依花待人　鶯は聲をこずゑゐさきざて丶花のあさかゞとふひともがな

根來寺は花見ゆきける時かさはらの山に上りて

峯つゝき厳ぎる子にことゝはむいづれの谷か花いまさると

安藤君はなりどころのうちなる櫻谷ゐて

さく花は梢をつたふ川風にみざれてさむしうぐひすのこゑ

故郷落花　故里を春しも何かとひつらむ人まちてこそはあいちりけれ

行路落花　きゝすなく野中ふる道こしかたの春もこひしくちる櫻かな

春は歌の中ゐ　さくら人十町二十町かへすらしあゆちの水に花ぞたゝよふ

吉野ゐてよめる歌の中に

眞土山宇野の峠もたゝおえにこえずば花をつちにふまゝし

あたすきて六田の淀にさす棹の雫のまにもはなやわするゝ

有明のかげゝかくれし朝霧にやまふとゝろの花かをるなり

舟長のいまぞさかりと棹さしてをしふる雲やわがこふる花

二十一日曉ふかく起き出でて吉水院の花を遠く見わたして

吉水の花のえづくにぬれ〳〵てはてゝえらめる月の影かな

朝まだきより千本の花を見つゝよみける

春鳥のさまよふ花は色げみゐもやゝ露みえて朝日さしなり

吉野山花は香まどふ朝ぎりに色をれもはてぬうぐひすの聲

吉野山花うちはぶくてりうそのの聲にもゆらぐ朝ひかのかげ

を吉野をけふまでよそにもぐしきて花にやさしき我心かな

面影に見つゝ恐ばむ行末のはるもうれしきはなざかりかな

うら〳〵と匂ふ春日の朝かげを吉野の花にてらしてぞ見る

天の下うら〳〵匂ふ春の日ゝ吉野のはなのひかりなりけり

ゆくも花かへるも花の中道をさきちるかぎり行き歸りみむ

みよし野ゝ竹の林も一ふしぞ千本のはなに色ばしめかれむ

三代をへし都の櫻なにしかもつちゐちれとゝ風のふくらむ

雁もらも北へかへりぬを吉野の花のみさをゝ誰かえらまし

はなの枝ゝ手だにふれぬを吉野山たがゐたぶゝし宮柱ぞも

芳野懐古

み吉野のうづの玉殿はるをへて昔のむしろに花ぞちりしく

み吉野をあざなる山とおしはてゝ花ゐゝ人の何ならもらむ

さく花のあざなる方に移りゆく吉野の山の名こそ惜しけれ

ゆきかへり見れど悲しき花の上ゐかすむ春日も傾きにけり

翅おも花は雲非にとびかけり見るらむ人を色るよしもがな

み垣もる花ゝ幾年さきちりてよしのゝ春にものゐもふらむ

昔かもふ吉野のやまの遠近に花ふきをけてゆくあらしかな

いつとてか北ゝふくらむを吉野のみくまの櫻枝にこもれり

如意輪寺のとびらを見て

くち殘る矢の根のあとを桑ゐて千代もつらぬく道求めてむ

西行庵ふて　我だにも主人となりて花まさむみくまの厳ゐさりがてらに

鶯は色ゑよりつたふ山清水いくかむすばゝはなとかをらむ

ゐしびさく吉野は奥につなゞまし心の駒のほだしたえなば

吉野の山づとにかしゐにてくめる花籠にそへて人のもとへ

山がつがくめる吉野の花かたみまなく昔をおひつゝぞおし

朝落花　朝髪のみだれにたぐふ櫻ばな春のかゞみとなにむかひけむ

池蛙　いりゐくち堤ゐくえし池水ゑうきにたへてもなくかはづ哉

夕蛙　さくら人今ゐとかへる島つ田のゆふとゞろきや蛙なるらむ

吉野よりかへるさに樋口にやどりて

みよしのゝ滝ゑ都にかりねして蛙きく夜ゐうつゝともなし

くれてゆく春の旅路のぬさ袋ひもときけらし蝶のとびかふ

蝶

中村眞貫が江戸へかへる別に人々歌よみける時蝶といふ題を得て

春霞たちもとまらぬわさ風にひとり胡蝶のそでかへしつゝ

呼子鳥　象山のかすみのかぐの呼子鳥むかしの春をこひつゝぞなく

岡躑躅　みとふそふ松に夕日の霞まぢゞ躑躅の岡やまばゆからまし

燕子花　汀よりさしもへだてぬ垣つばたかよびてをらむ袖ゐひづとも

山振　芳野川きしゑ山吹いつよりか杉の去づくにぬれて咲くらむ

松上藤　棹ふれし筏ゐ一瀬すぎながらなほかげなびく山ぶきのはな

霞のみなびくと思ひし片岡のまつゑ葉でもり藤さきにけり

藤の花なびくを見れゞ松かげの賤ゞ伏屋もとふべかりけり

湖上藤　たる姫に藤浪さけり今よりゐのすみの袖もこゝろしてたて

春川　木川や小田ゑ大堰の春の水かすみながらにされうひくらむ

春竹　下をまし竹ゑさ枝をこにくきて雪まの若菜あまぞつまゝし

春鳥　とおみはる人おおつげそ山縣の朝菜の花につぐみなくなり

暮春　ちりはてむ後の形見と花ゑ香を去めし袖ふもあまや別れむ

山暮春　はつせ女がつくるを花のうたみふて檜原に籠る春の色かな

閑居花　大かたゐ春も人めのかれ花にさきていはもる山ざくらかな

首夏雨　夕かけて小雨こがるゝ竹村の蚊の細おゑになつを去るかな

更衣　衣こそふたへもよけれ花染のあかぬ上に去らかさねせむ

惜更衣　かへまくゐ何をしむらむ移り香のみにしもふはぬ花の袂を

殘花　夏かげの青垣淵にはな見えてひとり去づけき山ざくらかな

山寺殘鶯　里遠き片山寺ゐうぐひすのねいをやしなふかげもありけり

新樹　さけゞちる花の木立も松杉もうちやをなげに去げる夏かな

新樹妨月　花ちりし山櫻戸ゐすみすてむ月のにはひもうとくなりにき

卯花　卯花の露きよらかにさきしより初蝶の袖のすさまじげなる

卯花のさける宿とい見ゆれどもおぼつかなしや三日月の里

卯月ばかりそいろあり

あげ巻が笹舟はなつ川そひのうのはながきい誰かゑむらむ

神祭　我まつる神の心もなびくらし卯のはな垣にあさかぜぞふく

郭公　雨になき月あらさらふ時鳥いかにていろのはれくもるらむ

大比叡の花つみいそぐ曉にまだきもなくろやまほとゝぎす

片岡のあふち花ちる夕ぐれいなくねさびしきほとゝぎす哉

うの花のいろなる雲に時鳥ひとこゑきえて夜いあけふけり

待郭公　手すさびにすだれかゝぐる夕暮のそらなきぐしそやま杜宇

浦郭公　すゝきつる藤江の浦の夕汐に聲もとゝろくほとゝぎすかな

與女待郭公　もろ共にまつ夜もつらき郭公なきしのびとゝ思ひなすらむ

雨中早苗　雨はれぬ小田の板舟いさづらにさ苗をさへや流しやるべき

五月のはじめつ方日ぐらし此芝といふ山より海原を見わたして

波さえし沖い夕日に雨かけてみなと田とはくさ苗とるなり

菖蒲　雲井まで薫る根ざしの菖蒲草うきぬにさへいかひずもあらなむ

宮路ゆく袖よりかけて菖蒲草ゝふいかをらぬ里だにもおし

人の子の端午の祝に太刀に菖蒲そへたるかたに

剣太刀名をしたつべき萬世のねざしいけふの菖蒲なりけり

夏狩　を鹿ふす小野の高萱ゑげくともゆずゑにをけて藥がりせむ

卯月ばかり在田郡ゐて

心なくあてをべもぎじ橘のゑた吹くかぜにわかゆひれふる

樗誰家　さもこそいながめふるやのつまならめ雫にたぐふ花樗かな

旅五月雨　道成寺縁起よる

旅人のふくたやしなふかげたえて日高のわたり五月雨ぞふる

五月雨久　とりふける萱のそゝぎにながめふり哀我身の果もゑられず

紫陽花　夕月夜ほのみえそめし紫陽花の花もまとかに咲みちにけり

蘆垣のみだれをかこつ雨の中に色もくづれしあぢさゐの花

水雞　うゑたてし田面のさ苗うち靡き伏見のくれゐ水雞なくなり

水雞なく夜半こそ物い哀なれ門たがへせしむかしおぼえて

夏月　夕されべ若葉がくれの島かげに月さへふとすゝきの音かな

なでしこ　露ばかり結べる垣になでしこの花のいろ〳〵盡してぞさく
庭草にそゝぎし水ゝくれなゐの種ありけりなでしこの花

夏菊　かこひおきし水も露とき〻ゆる日に千代を保ちて菊ゝ咲けり

夏花　さゝちかき井手の柵風こえてあさゝゆふ子ゞ袖かへる見ゆ
日をいたみ堤の草ゝ色もおしさきおはてりそおもだかの花
いでや刀自てる日をおはへ撫子のみつよつ五つさける垣ねに

夏草　吹上の小野の夏草えげしとてかりなはらひそ菊もまじれり
あくたよる夕川風に雨はれて影めづらしくはたるとぶなり

螢　打まねく扇のつまもあるものをよそにこがれてゆく螢かな
かりしほの麥のあからはあからかに夜さへみえて螢とぶ〻

田所顯周がもとにて水邊螢をよめる　延仁熊野御幸記による

田邊川あせにし淵やたづねらむ岸は芝生にはたるとぶなり
田邊川もだく螢ゝかり宮にふきしみくさやくちてなりけむ

江樓流螢　ふきのぼる夕川風にをすまけばくもゐをかけて螢とぶなり

窓前螢　ともしびの望むなしき窓なればすぐる螢もあはれとぞみる

照射　弓弦こそ露をもかけめてり人のつよき心ゝえめらざりけり

水雞　蚊遣火の烟にとざす草の庵を人しもとはばくひな聞かせむ

氷室　みだれつる袖も氷の白妙にいざさちかへてむろひらきてむ
岩代の松をためしにむすばねど世にとけがたきむろの氷や

鵜川　あはれ世ゝ安太の鵜飼は手馴縄なれあし業もさえにける哉

水上螢　音だにもやゝなつかしき水の面によるゝ螢の影ぞいさよふ

雨後夏月　えたらうつ聲さへ涼し夕立のくもよりもるゝ月よみのもり

海上夕立　はたゝ神なるとの沖をこぐ舟の跡かきくらし雨さわぐなり
月をさへまねきいでたる扇かな風まつ暮のすさびなりしを

扇

新竹　橘の花の香えめてわが園にかひたつたけの清くもあるかな

泉邊暑　蟬のなく井のへの桂かげ深みもひとる袖にあきかぜぞふく

海邊納涼　海人の子が釣の糸ふく夕風にたえずや秋もひかれよるらむ

夏曉　ながれ江の水影みえてえらむ夜を心とやさくおもだかの花

夏船　常世もれ花さちばなの追風にあてのみなとを朝びらきせむ

夏鵑物　杜鵑まつ夜ふけゆくたかひじろ蚊の細聲に名のりのみして

夏遥望　わづま路ゝ夏さへ寒し夕立の雲間につもる富士のゑらゆき

六月祓　みそぎする瀬々の白波秋かけて清きかはらに夕かぜぞふく

百合　垣もとにうゑしさ百合ゝ六月のてる日にゑみて花咲ゐけり

立秋　露霜をむすぶの神の心よりたてゞやゐきゝそでのゑをるゝ

初秋萩　うちなびく萩れさ枝のゐさ露に花てそまじれ秋たちぬめり

七夕　天の川うき木の龜のまれゐらで萬代たえぬゐふせともがな

萩　風をだにこふれゞともし夕庭れ荻れつゆ原かたなびきして

海邊萩　月にてゞ海士の舟歌こゑふけて秋風さかし伊勢れはまをぎ

荻風驚夢　さよふけてとだえし夢の行末もなは秋ならしをぎのうは風

河邊草花　そひどりの浪うちはぶく朝かげに岸の月草はなさきにけり

萩　萩が花秋のゐもひのなぐさめゐみるとゝすれど露亂れつゝ

風すさぶさ枝の露にさそはれて末ちりかゝる秋はぎのはな

わび人の袖ゐゝもらむ萩が花ときめく色のやつれもぞする

野外萩　たが爲に蜑少女らゞかざすらむ須磨れ上野の秋はぎのはな

萩映水　あきつとぶ野中の水に影ゑえてふる枝のま萩今さかりなり

八月十五日憐霞樓ゐて

月をまつ袖ゐなちりそ萩が花かつらの露もかけて見るべく

川づらのま萩のにしき色はえて夕日をたゝむ波れわきかぜ

綠窓君のはなれ尾の萩の宴ゐて

眞萩原むらさめはれて鈴虫のなくねにゆらぐ夜半のゑら露

雨はれし籬のはぎの露の上にまたきかさぶく夕づく夜かな

故郷萩　秋たてゞ故里さむく野分して萩もむかしのにしきゐりけり

七月ばかり人の許をとぶらひて盛なる萩の花を見出しける折しも鶯のなきけれゞめづらしく覺えてたはぶれに

鶯ゐ北やまよりやゐでつらむわかむらさきの花になくなり

薄　すゝき原尾花になりぬ夏飼れ手がひの小鷹野邊いそぐらむ

藤袴　てしやそのすがるむれたつ朝風にその香も高きふぢ袴ろな

朝顔　虫のねゐ籬の露にうつろひて色わかれゆくゐさがはのはな

さけゞかつうつりもゆくか朝顔の花心なる世をかてつらむ

うなゐ子が心すさびにはかなくも八重のさねさる朝顔の花

月　天なるやさゝらの小野は菅原も心にわけてつきを見るかな

月前虫　月やどる萩のま垣にたちよれば虫のこゑさへ近まさりして

淀川に舟を浮べて

夕月夜蘆の葉わくる川かぜにながきてきよき虫のこゑかな

旅宿虫　いづ方に假庵つくらむ萱津野の虫のねならぬ露だにもなし

秋夕　思ひかね離の小萩たをりてもまぎるばかりの夕べなりやゝ

天雲のゆきあひの間より月みえて夕暮さむき秋のそらかな

霧の上に雁がねなきて秋の日のかたぶく空を一人かも見む

海邊秋夕　掉さしてとふ人もなき夕べかな秋かぜとたる松がうらしま

故宅秋夕　野邊とのみあれゆく宿をいでがてに何ながむらむ秋の夕暮

秋風　色かへぬ離の竹もあきかぜのうき音づれやなほかこつらむ

建仁の熊野御幸記に見えたるさまを繪にかける中ゐ萩原のあたり

うちなびく小野の萩原風こえて鹿の背山ゐきりはれゐけり

山霧　のがるべき山さへきえて夕霧の深きゐもひゐやる方もなし

河霧　初瀬女が袖ふる川のかゞとながらうき霧おびく朝ぼらけかな

小鹿狩　粟津野や紅葉みだるゝ夕風にあかぬとゞちは名殘をぞ思ふ

ゆきかへりあくよも去らぬみ狩野は尾花にふつる夕日影哉

野分　月みむと思ひしものを夕おりの雲まどはして野分ふくなり

木萩はらさばかりふるき露ならし八月のあらし心してふけ

野分ざつ夕べの風にかゞろふのふは樣々みだれてぞとぶ

秋燕　月だにもすみはつまじき朝影に伏屋をいづるつばくらめ哉

九月ばかり山里よりかへるとて

夕けぶり軒の木立にむすばれて贄さす鵜のこゑぞいとなき

浦秋風　去はたるゝ袖の浦波いたづらに八重をりかへし秋風ぞふく

霧　すゑうすき淺茅が原の朝霧や夜半の野分のゆくへなるらむ

雁　秋とすむ田面の澤の水の面にかげさへ見えて雁のふつらむ

月　折しもあれをすまく袖に影さして雲のひまもる秋の夜の月

憐霞樓賞月　月やどる露の玉がきめぐりてもなほあまりある花の色かな

露かゝる島回のま萩影そひて園はうちはしつきふけゐけり

小車のにしきをよそふまはぎ原いくめぐりしつ秋は月夜に

波の上に浮べる月の白さまをおよひかつらむ人やたれなる
さゝらがた露は糸もておりいづる萩の錦ゝさてぬきもなし

八月十四夜和夫正紹と共に中の玄まの里をそゞろありきして

夕露をわけいる草の袂よりあとよりなびくむしのこゑかな
五百代のわさ穂波よるとおる津を月にみつゝや神代恐ばむ

待　月　月をはれみ思ふ心のゆくかさゝゝあやなき闇もたどらざりけり

九月十五日清舎君月を見がてら鹿の聲もきかまはしきをと消息し給へるまゝに北山なる何がしのなり所にまかりて

さを鹿の聲する山にいるものゝ月みる秋のこゝろなりけり
くるす原月の光やおもるらむおつる木實はおとふけにけり

八月十一日楠見の寺よりかへるさに

薄墨の雲の一むらたちをかれくるゝもまたで月ゝ出にけり

年々は八月十五夜若浦あてよめる歌の中に

玉津島きよきなぎさに圓居して神代のまゝの月ゝみてまし
山のはのあらゝ松原あらかじめ思ひのまゝにのぼる月かな

思ふどち小舟よせゝば若は浦に今夜の月やひとりふけまし
秋の月もまむかぎりゝ松かげのきよき渚にまとゐしてまし
今おそゝれ大宮人の舟うけしあたら島やまつきさへぞてる
あしがねの汐干の浪殘所せきかゞともゝ玄らで月のみちたる
ふけにけり今ゝの心つきかげにうす雲なびき秋かぜぞふく
われゑひぬ今ゝひさゝを鼓ともうちてや月のかげに謠はむ
玉津島岩ねのむしろいざたゝむ波にかげしく月も更けたり
月のおもゝ雨雲とぢて島うゞのなみおもそゝぐ虫の聲かな
雨雲にねぶれる月をよびさまし夜深き波にかもめなくなり
袖ふれぬ秋こそなけれわかの浦の松も巖もつきになれきや
わかの浦の月に昔のおもかげも浮ぶばかり身ゝ老ふけり

十七夜玉津島山上にのぼりて

一むらの洲先の松ふかげ見けて内外のうみのを月をみる哉
漁火ゝくもゐにきにて眉引の淡路の門なかつきみちにけり

年々七月十五夜淀川にあそびて

水門川小ぶねの水棹さしもけて芦まにもらす月のかげかな
とはゑろき洲先の松のかげかがら月をひたせる波の上かな
月の上に抔をすゝきてさゝなみ此清き心もくみかはしつゝ
湊川せゝのゑら波いくかへりおなじまとゐふふけし月夜ぞ
月かげの錦のいろおとりさきて心ゆく潮にさかみつぎせり
あすの上の草の露原月をよみ千夜もきくべき虫のねぞする
遺葉のうき瀬此水棹さしすてゝさ夜の中洲に月をみるかな

海上月

沖つ洲に夕ゐる鴫むれたちて波のはあかしつきやいづらむ
秋風にくゝひ羽うちて湊田の穂のへをこゆる月のゑらなみ
舟窓の秋のともし火はの〳〵とゑらめる海に月いうかべり
難波人あしのは舟に棹させゝとたれて清しなみの上のつき

山家月

蔦の葉にはつ霜かゝる山里のあかつき月夜たれにみせまし

鳴瀧の山寺にやどりける曉

あかゐくむ片山寺のつゝらをりたえ〳〵てらす有明のつき

月前煙

山里ゝまだき夜寒にありぬらし眞柴のけぶり月にたつみゆ

月前蕉

露ながらかたしく月のあや蕉緒になるまでに夜頃へにけり

九月十三夜憐霞樓の宴にさぶらひて

月にまく臺のうへの玉もだれ風のひゝきもきよらかにして
月にみる片山もとのうすぐもりきりかあらぬか鹿火の煙か
月になくまがきの虫も心せよ草葉にのみやつゆのおくべき
月にうくかまへの池のはなち鯉そこの玉藻に影や見えけむ
月にふく市の植木の風たかみ塵もものこらずはゝしそらかな
月にひぐ淀のつゝみのつなで繩長き夜わかぬ舟路ならまし
月にたつ渡間の烟たえ〳〵にあしやの火かげ秋ふけにけり
月にてぐ螢のともも舟はの見えてひゝくも清しはつ雁のゑゑ
月にきく波のひゝきも更けふけり誰か浮寐の袖ゑやるらむ
月にゆく千里のはかの心をもをり〳〵かへす波のあきかぜ
月にとふ人こそあらめさを鹿の聲をゑをりの杉たつるかど
月にうつ大城の鼓ゑばしまてくだちゆく夜を誰かをしまぬ
月にねぬ人もありけり松風のふけてもすめる笛たけのこゑ

九月十三夜半天樓ふさぶらひて

荻のはの夜風のそよぎふきかへて月に吹めれる笛の音かな

夜を寒みぞばしとかろす高殿のをすのかげさへ清き月かな

八月十五夜月そくおれバとて十三夜に宴し給へる年憐霞樓ふて

影はゆる望をバめでじ長づきに通ふ今宵を夜よしといして

九月十三夜いと寒かりける年

ひたすらにくゝむ尾花ぬそでの露ゐりなの月のすがり所や

深山月　一むらの杉の梢に山見えてつきよりひゝくたきのおとかな

月前友　うとからぬ友とや月も思ふらむまとゐの袖に影をつらねて

八月十六日清廼舎君楠見ぬ何がしの院ふて萩の花の宴吹給へるとき

おがらなく秋の野寺のひとへ垣ひま見にぬまで萩ゝ咲きけり

を鹿なく峯の嵐やかよふらむ庭もまがきもはぎがはなちる

芙蓉　わきつはのうす紅の花の色に夕日のかげをかさねてぞみる

楠見よりかへるさ舟にさぶらひて月をまついとけしきよし

ま萩原ゐけ見し色を吹のべとや雲に入日ぬかげにはふらむ

くれ竹の長よの水棹さしめぐり清き瀬ごとに月ゝまたまし

草ゝかの岸の松虫なくなべにつきてそうかべ水棹とりてむ

あひにあひて棹さしのがる月影を水底かけて浮べつるかな

さゝらぐた錦の帶のひとすぢに川上とはくさをゝさゝましし

八月十四夜わが高窓ふて月見るいと寒かりける年

衣うつ夜風をはやみ白くものたえ〳〵月のかゞぞさえゆく

同じ夜いとくもりける年

衣笠の遠やまかげゝなは見えて雨雲がくれつきぞふけゆく

もりかくす月と雲との中空をはてゝうばひて雨あがれきぬ

月下客來　まねきあへぬ人もとひくる夕べ哉尾花が袖や月に見えけむ

擣衣　打わびてきくとゝなしにふくる夜の衣の音のみあゝ吹むらむ

うち吹きる音こそ風にまかせなめ憂ゝみにそふ衣なるらむ

心してうてやさ衣あき風ぬひゝきのすゑもやすからぬ夜ぞ

河上の月にながるゝ音すなりときあらひ衣たれかうつらむ

もみぢ葉の陰ふならちそから衣秋のふもひの色やかさねむ

菊

朝顔の花より見えし露ゝ色もふかくなりぬる菊のかきねや
白菊のまがきにむすぶ秋の霜うつりゆく世ゝ花ぞ咲るらむ

牢天樓の菊の宴にさぶらひて

かびならすたゞの翁の白妙をまがきにかけてさける菊かな
初霜ゝ今こそおかめ白菊の八重のくみがきつきふけにけり
あしたゞのかりねる園の菊の花心に千代をかさねてぞ見る

河邊菊

釣の糸を風にまかせて水上のきくのかをりぞ袖に咲めつる

海邊菊

まばらなるあしのかこひに菊を植て蜑も千年ゝ猶願ひけり
蜑の子がくゝつにさせる菊ゝ花同じ千年の種にやゝあらぬ
ふきあゞゝ秋おそゆかめ一むらゝ松より奥の菊のなかみち

紅葉

山深くさのみなこひそはしりでにたてる柿も色ならぬかゝ
秋風にあらそひかねて朝雲のわかるゝ峯ゝいろづきにけり
山隱すあしたの雲のたゆたひにほのめく色や紅葉なるらむ
立田山うす霧おもり秋の日のかたぶく影をゆきてはや見む
そめわたす色をしみれば露霜の秋ゝ末こそさかりなりけれ

若浦あて

わけ〳〵し山又山のもみぢ葉を霧にうつしてけさゝ見る哉

紅葉淺深

あたへゆく山のたをりのもみぢ葉をくまなく照す夕日影哉

紅葉深

切部山那木の木間のうす紅葉かざしそへてゝ色もそはまし

秋雨

夜たゝふくかさちき山の村紅葉いつの人まに露ゝそめけむ
さゞがねゝ雲にみだれて磯山の梢をそゝぐむらしぐれかな
誰しかもはゝその蔭ゝ過ぬらむ妹とぬるての色にあゞれて
山てらす梢の色をけふ見れゞ夜頃のつきゝくまもありけり
はた寒き秋ゝつまやのさし扇みだれてかゝる夜半の雨かな
草陰の松のゝれ葉に秋見えてこぼし雨ゝやゝはれゝけり
ま萩ちるあしたの雨となりにけりうちみし月の末のうき雲
夕づく日てらしもわへぞかき曇り柞がはらにむら雨ぞふる
雲霧のたゝよふ山ゝ椎がもとけふもいくたび雨ゝこぼれし
かりふける尾花にそゝぐ秋の雨の夜深き音に袖ゝくるしつ

山路秋行

鵑のなく片山かげゝくれゝけり霧ふく風のやむとせしまに

秋田

六月の有明のかげにみえそめし田居の早穂ゝ色づきにけり

かま垣の昔の舟路へださりて粉川の田ゐをしねかるなり

稲はしたり　頴倉の其戸ひらけりはて此上にかけはす稲も今はおぶらし

山　家　秋　蜩のおゑもかれにし山かげになきてやひとり秋をつくさむ

半天樓下の西行庵あて

月見ばと契らぬ袖も露ちりてよし野のおくの秋かぜぞふく

秋日過廢寺詩題

ふきすてし秋の野守のうすひはぎかさなる苔に村雨ぞふる

鹿　常磐山ときしもあれと有明此つれなきかゆに鹿のなくらむ

鳴瀧の山寺にやどりて

たぐへてし風いとだえて瀧の糸に結ぼゝれたる鹿此聲かな

夜をかさね妻てひかねて有明此影となりぬるさをしかの聲

山寺いかひふく人もたえにしをなくかを鹿の時うつりして

山寺いあけぼのかなし紫のくもぢをつたふさをしかのこゑ

あか棚の檣のさえゞ霜見えてかれ〳〵あのみ鹿ぞなくなる

さを鹿の妻待山のたちどまでかたぶく月をかおちてやなく

故郷紅葉　うづらなくふりにし里の柞原うもき色おそみにいゝおみけれ

閑居秋　かりそめの草の籬も小鷹人たちよるばかりはなさきにけり

きり〳〵も涙なそへそ草の戸のつゆゐ秋いくさしはてゝいき

秋　鳥　鷹の巣の磯もとゆもりたつ波にひら〳〵なびくひえ鳥の聲

いつれ此年にかゐりけむ九月ばかりいと長閑ゐてかへり花ゐまた咲きけれゞ

とぶ蝶の羽袖を春にうちかへしたちまふばかり花咲ゐけり

秋　燈　ましや我たのむ火影いうとくとも秋の長夜を書につくさむ

鐘聲送秋　尾花ちる嵐此末いくれゐけり野寺のかねのひゝきのみして

暮　秋　小鷹人夕霜わくる笹のはのさやい野邊ゐておきをくらしゝ

風まつとながめそめつる夕つ此光にのみものこる秋かな

霜はやきもずの耳原秋さけてゐはれを鹿のゐとだにもなし

暮　秋　露　さのみなど契ふかめし秋ならむ暮るゝ迄こそ露いおきけれ

暮秋時雨　くれてゆく秋の日影もうす雲にたえ〳〵ぬれて時雨ふる也

初　冬　もみぢ葉の陰をへだてし呉竹の窓も去ぐれて冬いきにけり

かり此こそ穂田の朝霧むすぼゝれ覺束なくもきたる冬かな

さを鹿の聲のかへしに尾上よりかるす朝日の影ぞ去ぐるゝ

時雨　神無月春をかすむる大ぞらのいづこよりふる時雨なるらむ

橋上時雨　風はやき矢作の橋のなかばよりま袖にかゝるむら時雨かな

古寺時雨　高野山あかつきいそぐ雪にしもまじる時雨の定めなき世や

何がしの院ゐて曉時雨を

あくと見しよも定まらぬ時雨ゆゑ去きみが原に袖ぬらしつゝ

落葉　そめはてし色おそあらめ木枯のとりなくさぞふ淵紅葉かな

もみぢ葉の名殘よ何に慰めむ花ゐてふをかたみとも見き

水邊落葉　水の上におちても深きもみぢ葉を移ろふ色とかつゐ見し哉

曉落葉　あくる夜をまたでもちるかもみぢ葉ゐ老の寐覺に涙ならねど

夕紅葉　入りやすき日影をかこつ夕暮におつる木葉の窓てらしつゝ

閑居落葉　苔の上にむら〳〵見ゆる紅葉哉稀なる人のあとをたえしを

紅葉殘枝　白菊ゐそめがへしても去をれしを操に見ゆる木々の色かな

冬の歌に中に　夕風のとゞえゐもちるもみぢ葉を空にかぞへてゆく鳥かな

殘菊　色も香もなれゐまさらで菊の花ねさしや霜に結ぶやれつゝ

瓶裏殘菊　さだめなき時雨に空やかこつらむ千年の菊も移ろひにけり

籠もる夕日の影ゐ去ぐれてもをゞめに菊の香こそふりせね

霜　一むらの竹の葉去だりふく霜に書みる窓ゐ去らみそめけり

あともなきさゝぎの聲に霜とけて野路の板橋上去めりせり

寒草　をがや原かれて後だにやもからぬ霜のみだれをとゞ嵐かな

鵲のなくわしたの雲のみだれよりうね野に渡霜がれふけり

寒樹　秋をへて野中にたてる松だゐもかげやもからぬ風の音かな

木枯　あら熊ゐゆくへも去らず杉山のうつぼにこもる木枯のこゑ

氷　風落の椎のさえだをよすがゐてうもゞはりせり山の井の水

底ふかく秋の色香ゐとめつらむ菊に去た水うはゞはりせり

山寒月　もみぢ葉の小雨にくちし彌彦ゐ月よりたかく神さびにけり

雪深みあゆひかたむとわけくれて鈴鹿に山ゐ月を見るかな

閑庭霰　ちりつもる木葉の上に霰ふりわなかま我世たまもなにせむ

衾　狐なく木がけの庵のうも檜皮ふく風さむしふすまがさねむ

網代　村千鳥たなゝみすぐる聲すなり今宵もひとり網代もれとや

千鳥　霜まよふ新防人が袖の上にゆふなみかけて千どりなくなり

月かつるあかつき波ゐ聲ふれてあとかきくらしゆく千鳥哉

夕月夜ひとりやぬべき庵崎のかはらの千鳥ゑも羽ぶくなり

たちさわぐ波のまぎれにありそ越外ゆく千鳥誰さそふらむ

もみち葉のよどみもわへぬ河波に影まどはして千鳥なく也

霰　ゆくりなき霰の音ゐさしもなど時雨の雲ゑおゝろさだめぬ

雪　あげ巻がうかるゝ聲もかもしろしふれ〳〵お雪山つくる迄

そばゞてし枕の山ゐへださりて袖ゐ花ちるをすのゑらゆき

朝ぐもりかすゐみ山の峰ならしかぼつかあくもふれる白雪

雪つもる木路の遠山とゆけれど心のあとをつけぬ日ゐなし

芦鶴の子を思ふ空もやすからじ松よりかつる夜半ゑら雪

衣うつ音ゞにそことわかざりし里もわらはにふれる雪かな

烏鵲ゑ松よりをちの一むらゐ雪にとゞさぬまどゞにもなし

雪のあした人のもとへ

烏山のみ雪かもしろ出居にゐ君まちざけもあたゝかにして

松上雪　よせかへりさらでも消き白波の濱松が枝にゆきゐふりつゝ

半天櫻ふさぶらひて雪見し時々の歌の中に雪晴

竹の葉の雪ゐ緑になりぬともゆふしでかけよ藤ゑろのまつ

高窓より見わたして

袖かへす少女やいづら白雪のみだるゝそらに笛のねぞする

寒雁　ちりかゝる雪ゑ浮洲になく雁のたゝん空さへかきくらしつゝ

夕されゞ三日月かとゑ木枯に田づらの雁のこゑぞゑぐるゝ

櫻田のひつぢの枯葉ゆきちりて雁がねひゞく朝ぼらけかな

いつまでかなきまどふらむ雁がねの雪ゑ空にも成にし物を

鷹狩　とりする片野の茅原淺茅原たゝん空にもゑめゆはましを

み狩たつみのゝ木枯寒けれゞ鈴のゆらぎにゆきぞちりくる

埋火　我ための手馴の琴とかきなづる桐の火桶ようとみだにすな

ことゝはぬ木もて造れる火桶ぞに哀と思へうづもれし身を

爐火　虫のねのきゆる頃よりありつみし榾さしそへて霜夜あかさむ

爐邊似春　わきかへりたつやかなへの湯のけゐも春をかすむる窓の内哉

埋火　筆とれば墨こそこほれ夜もすがら窓の埋火かきたてしてむ

神樂　より板の音を霞にうちそへて去らたまかけぬまひ人もなし

早梅　太原やせがゐの水のにおりなき心をくまぬかみゐわらじな

冬鳥　我せこが春のいそぎに衣たてば朝北さえてうめかをるなり

霜とくる田中の杜の朝去めりはねもはしわへず去とゝ鳴ゑ

垣近くかよふ小鳥のいたゝきに名殘とゞめて菊ゐかれけり

小笹原ゆふ霜さむみうぐひすは春まつ聲のむすぼゝれつゝ

あか星のなごりもまよふ霜朝に杜は茂ちこち火燒なくなり

冬花　菊わけし山路のはての里つゝきちとせをかけてさく椿かな

つみて煮むこれめのはるを近みとやさ枝の花の先薫るらむ

かへりばな　神無月いとまなき世をうしとてや春にかへして獨さくらむ

待花　雪ばかり所もわかずさく花ゐわらじと思へど春ぞまたるゝ

雪中歳暮　世中を雪にとざしてみし書はかずぼかりわゐ月もつもらぎ

歳暮　雪をれのひゝきを年の別ふてさけし我よもおどろかれぬる

春いそぐ遠近びとはむれたちて市の植木ゐねるとりもなし

戀はの歌ども

稻妻はかげ野は原の露ばかり見そめし宵をたまは緒にして

笛とりてたちよるかからに梅が香の亂れし宿をいつかへりきむ

若鮎のひれふる姿見てしよりこのかはか身の家ぞこひしき

玉鉾のみちゆきぶりにたぐへてし心ゐみにも歸らざりけり

筑波山かきみがくれは歌垣にたちまじらぎば思ひよらじを

筑波ねの新桑つみにこしものをかゝふ袖のみ眺められつゝ

いさやまざいひよるふしも去らなくに竹は葉分を聞きや咎めむ

顯戀　かきくらす闇はまぎれゐいでこしをうたても驅ぐむら鳥哉

楫柱ふつ名も去らで我宿をみきとやひとのひとにつげゝむ

尋戀　尋ねゐびまどふ戀路にはへなまし我玉の緒をよせ綱にして

逢戀　夏草のあひねの濱の眞砂地ゐ八百夜ゆくともわかじとぞ思ふ

夏草のあひねの濱によする浪千重のちぎりをかけあ違へそ

別戀　うらなれぬ中の衣のつゝましきおもひの色に袖やもえなむ

幼戀　あふと見し夢を現のわかれゐいつかへしさるなかの衣ぞ

おひさきの契も結べ若草のうらなつかしき子らがすさびに

等思兩人　わけかへて露にいさよふ影もみむ望をへだての道芝のつき
　　おもかげもたち爭へる二上わたゝよふ雲やゐが身なるらむ

寄松戀　くづれする片山岸ゆ姫小松去らでぞひきしゆちのてゝろを
　　さよ深くいでし心の奥みえてあねはの松にあきかぜぞふく

寄霧戀　高角の山のやま霧ふかければわがふる袖もうち去めりつゝ

寄鳥戀　時すぎぬあはれ契も去るしなき菅のあら野の鵑のくさぐき

寄竹戀　嵐ふくまがきゆ竹のおきもあへず朝の床ゝふもべくもなし
　　はし近くうたゝねせじ若竹の露わやそでゆ露をかさねむ

春戀　梅もいさ柳も去らじつくゞと思へばいつの春ゝみそめし
　　契りおきし花の時しもふる雨のうき音づれに袖やくさむ
　　藤浪のたけにあまれる花ぶさを我みし髪におもひよせつゝ
　　見し人の面影なびく若草にすがるてふもなつかしきかな
　　山吹のまだきひもとく花ならでひとへにつらき心をぞ見し

夏戀　夏かはのうき藻の裾の水なみに螢のかげをやどしてしがな
　　かげうとき今年の夏の椎がもとまき寐し妹がたつ影もおし

もゝきはら露ゝ盛ゝ我そでゝ去げきおもひゆたそがれの宿

秋戀　芦がきのひとよのうげの戀しさに月見すさびもわはれ幾秋
　　色ながら袖ゝ去ぼらじもみぢ葉を綉の雛にたをらざりせば
　　あさ月夜かへる燕の聲もなりもみし軒端もわきかぜやふく

冬戀　小野山の烟のそこに炭やかばくゆるなげきを人もこそ去れ

逢不逢戀　更に又その夜の夢をむすびなばみしも現とおもひかへさむ

寄草戀　芦垣のはこめゆおもと思ふとも人去らましや色にいでずば
　　はかなくも去のび車のすきかゞを思ひめぐらも朝顔のはな
　　草文ゆ中ひきわけしかへり言ねさしや我身ゆひのはぢしつ

寄月戀　枕ゆふかたこそなけれ菅原や伏見にきてもをばすてのつき
　　くれなばといそぐ契もあるものを間遠にひゝく鐘の音かな

戀の歌の中に　底ふかく恐びしものを落鮎のはやくも人にくまれけるかな
　　ましらゝの濱の走り湯わくらはに逢見し影のうつらましかば
　　面影をうきみにそへてたちが緒のたえにし夢や更に結ばむ
　　夕されば鶏ぐらとめゆく村鳥の爭ふつまにあはでやまめや

今いとて櫻ちる夜のありあけにいでこし宿の春ぞわすれぬ
白崎の巖こす浪たちかへりふれにしそでをまたもまきねむ
何にかく根さへかれけむ菖蒲草よそぢつまとい人も思はじ
ふく風の便もうとくなりにけりならぬ扇のつまをれしより
ひたすらに思ひあふぎのつまよりも猶秋風いふく世也けり
河上の根じろ高がや風をいたみ末のみだれも人やさらまし
ためしなき片戀やせむゆきぢ蛍のやくてふ龜ぢますらをにして
氷ゐる波ならなくに朝づまのあさしやちぎり遠ざかりつゝ
なぞへなくつゝむ心よ山吹の花こそ八重もわはれといみめ
沖つ風音づれたえしゆふ浪のひとりをりてもぬらす袖かな
たぎちゆく吉野の川を契ゐて さらゆふ花のみだれてぞ思ふ
なはざりに柵かけて山ゞはのはやくぞ人いとはずなりゐし
逢見てもあはぬ心の末ゐこそあだなみこゆる山いありけれ
あふと見し夢をかゝげて燈のかげとゐる身や一人なげかむ
物思の花をよもがの露にしも袖いくさ葉とくちやはてなむ

寄木戀
舟さまく海とあれにし契ゆゑゆにかくばかり落るなみだゥ

寄名所戀
世もつらし人も恨めし大方いの世にも人ゐもわはでやみなむ

戀夢
つらしてふ事もさらぎの人なれやそむきてのみぞよを重ねつる

祈戀
いみはてむあすいと人の頼めしいならぬ思の名にこそ有けれ
はしきりし袖も慰む形見かいの道のまゝにや追ひつきなまし
恨みつゝぬれぞや夢もたえつらん現にむすべ末のちぎりを
祈りてもはた戀しきかゐもさらぬ身をうつまさの增る病に
さかりとて涙の袖やきりたゝむ結ぶの神に幣もとりあへず
かげ深き檜原いさるや椿市の夕々にかへてこもるおもひを

寄山戀
世中にありへてものを思へどや山もおげきぢ霧にかくるゝ

過門不入戀
さゝがにの糸をふきたつ夕風にふえぢ響ぞよそになりゆく
はしり出の槻のさえぐに聲ふれてすぐるもつらき時鳥かな

旅戀
露をおきて野守もみえぬ司よりわがふる袖に萩がはなちる

寄草戀
あふことといかた山菅の二むすび涙をのみやかけつゝけなむ
きゝさらぬ色とさるゝ耳無草いくたびつみて驚かもらむ

戀貴人　夕されば雛にすくふかやぐきの及ばぬ空をてひつゝぞぬる

寄火戀　高野山杉よりおくにともす火の遠さへ夜さへもゆる我こひ

偽戀　ひたすらに思ひたのみて歩みゆけば舟にとそむく人の心よ

寄風戀　夕されば宮路にかよふ飛鳥風とゞめし袖の香さへたぐへて

初逢戀　新室のかべも現もうれしきかたらひ草の根ざすなりけり

切戀　涙さへかさねて去ぼる夜半の袖うしや染木の去る人ぞなき

後朝戀　春の夜をあかしもはてぬ歸りきてこや鶯のなきぬべきをり

寄笛戀　笛竹のよに恐ばしきふしなくば吹きがたりせむ遊ならまし

寄書戀　墨の香も匂ふまゆみのさて文にひきヒかれつる袖ぞ戀しき

寄花戀　夕霞わけてといひし人まつとわがたつ袖にはなちるべしや

來不留　蛙だにきかでも人の急ぐ哉かへりてつらき音をそへねとや

寄衣　池殿のおくのつまやに菖蒲すゑぬへる衣のいろぞあせゆく

天　かはけなく眺めてけりな久方の空に去られむ我身ならぬを

日　思ふ空やすの川原もありとき雲の上こそこひしかりけれ

天つ日のかげのまに〳〵世中のひとの心もはれくもるらむ

月　久方は月は變若水をちかへり我もよにおそすまゝはしけれ

星　人の親の心のやゝの去るべするはしの光ゝいつの世にみむ

風　世をいはる幣の追風はやければあたせし船ゝ影もとゞめず

嵐　岩が根の朽葉を雪にこきまぜて去もとれし谷み嵐ふくなり

雨　打かづく笠はあさぢふ玉はやし田中のもりに雨きはふなり

曉　ひとりゐがまくら靜けき曉によしのゝゆめの淵をこそ思へ

朝　あさな〳〵うつやひらでの音よりも清き心ゝ神ぞ去るらむ

夕　ゝそぎ川神代の幣のみだれよりいつ迄くだつ夕日なるらむ

曉　遠情　朝月夜うね野のたづの一聲にいくたび人のゆめみだるらむ

薄暮　松風　岡のべの入日の名殘うちなびき松風ながらくるゝそらかな

竹風　如雨　軒ちかき竹の葉分を枕にてきかぬ夜もなきあめのおとかな

山　大原やをしはの山の松だにも神代のいろをさがへやゝする

峯のまつふもとの榊さかえずば山ゝひとりや常磐ならまし

をは山はたむけは神にぬさとるゝ木路に入りたつ都人かも

山　雲　西ふけばせの山こゆる秋の雲さこそ去ぐれめ庶はらがうへ

水　いぐしたて水口まつりはやせなむさ苗代露の玉ゆらぐみむ

河水久澄　吉野川ながれてし世の憂瀬をも去らでや水のすみ増るらむ

たちはきて恐ぶもひさし石上ふるの川みづすみそめし世を

海邊夕　姫島代松のゆふ日に雁なきてわが子戀しきあきかぜぞふく

崎浪　あしが島白崎にむかへり

島の上にけふもあしかゝ眠れるを何さわぐらむおゝ代白崎

關雞　逢坂の杉の下つゆあさ日さしとりの八聲にあめはれにけり

幽居　くるとあくとながめかしは代雫落て岡邊のさ霧はるゝ日もなし

田　おしなべて今ゝ田にはる雜賀野のそがひをかけて穂波こそよれ

名所市　人まちて三輪の市女がうる酒代すむも濁るも神のまに〳〵

城　千代去むる御城の高垣高らかゐ松も根ざして苔むしにけり

廢宅　ふる池のひとつ棚橋けたくちてはすの枯葉に秋かぜぞふく

清廻舍君神秀峯ある安藤君のなりどころに遊び給へる時さぶらひてよめる歌の中に

松の葉の青垣山のうすぐもに秋をめぐらすゆふ日かげかな

さしかはふ園代笠松かげ高みけふゝ時雨にくれぬともよし

くるも原落葉が中の花をらんこのみと共にくちもおそせめ

白雲代おくの山路をふみわけて憂世に去らぬ花もつまゝし

さを鹿もこがれよるべき笛のねを松の雫にそゝぎてぞきく

天つ雁おちくる聲に花やま代ふもとの田井をかへり見し哉

目路遠き尾上代松の枝ながらかゝみにゝるつたかづら哉

あかずみし櫨の立枝にいと早も時雨の雲ゝやどり去めてき

四月ばかり清舍君代みともにて丹後代からも代殿の出水のなりどころにて歌よみける中に

みづ清みたちよる袖にふのづからかげもずらるゝ杜若かな

水きよき島のそひ石はなれ石いづれによりて口そゝぐまし

時鳥きてをなかむむ島かげの淺瀬のおとの去のびぬ去代びに

はなちても見ばやと思ひし中島の夕かげぐさゐ螢とぶなり

ふし岩代つゝじが本のいさら水ゆめを流して胡蝶とぶなり

古戰場　駒わたす人ゝ少もなし犀川の岸のつかさゐかたくづれして

曉秋過古戰場　笠置山あすの時雨をさきだてゝみだるゝくもに嵐ふくなり

古戰場といふ題ゐて歌よみける中に賤が嶽を

いつまでか其面影はなびくらむ月よりみえし天のよさづら

古城蹟　岩くえて磯回の城門いあれにしを夜聲さむくもよをる波哉

あはれ其大城の跡に鹿火たきて山田もるらむをぢいさが子ぞ

桶はざまを過ぐとて

もみぢ葉の血汐みざるゝ塚は上にけふもおりゐてなく鳥哉

里　是やこはさらぬ別にますらをのかへりこざけむ櫻井のさと

山家　谷川のこがらみおえてゆく水にたぐふ心いたをかくむべき

奥山の巖ゲ中につきたてしくろ木のはしらこけむしにけり

山家水　軒端ゆく山下水にかぎてはかなき世をや更わ云のばむ

山家橋　妻木こるかたはしばかりとりかけて憂世に通ふ便といせじ

山家送年　時鳥なきていくとせかへるらむすみうき世わゝ出ぬ増れり

弘化三年正月廿五日難波より都をかけていでたつとゝもすれゞ雪ちりかひて例の年よりゝいと寒し廿六日堺へゆく道ゐて

さしはかりあがる雲雀のわび聲も空にひゝきて沫雪ぞふる

道頓堀はやどりゐて曉ふかく起出て春曉月といふ題抜いざして歌よみけるに熊代繁里がもとを訪ぞるにつく

堀江川水影かすむありあけわうかれおおろの果ぞやさしき

同じ題ゐて　まだ寒き有明の月もかすみけり難波の春のけしきばかりゝ

中村良臣がもとにて岡雉

をりやつも躑躅の岡邊春さけて聲もあらはにたつきゝす哉

石津亮澄が七年の忌に歌の會もとて圓珠庵ゐつどひて春月を

はのかゐゝ月もこるらむ春の夜の霞のうちにこもる思ひを

三月朔日伏見の梅眞盛なり

梅が香をまがきにこめし呉竹のふし見の奥や春のかくれが

都のやどりゝ三條のはしつかたゐて窓より嵐山さやかに見ゆ

朝おちをかへも嵐の山の端ゝおはひかねたる春がすみかな

三月十三日西田直養加茂川のほとりの家に人々をつどへて馬のはなむけす兼題花下別人

都のみかへりこせましさく花ゝ柳にそへてかざしゆくとも

十四日難波ゐて佐々木春夫もはらおとゝりて人々おはくつどへてふおじ題をまうけて馬はおむ々も

をしみあまりこのもとさらぬ語る哉花にまぎるゝ別ならぬを

天保九年三月昆陽の正覺院なる父翁の墓詣をける時奉らむ花もなかりければ片へのやぶ陰にさき殘れる椿を手折りけるに一花落しかば

こをだにと折りとる袖に且落ちて露よりもろき玉つばき哉

昆陽寺の前に糸櫻の大木あり墓詣をける折しも盛なりければ伊丹の人々と共に木ゝ々にかも敷きて酒ぬみ歌よむ

夢さめて蝶いゝぬめり花むしろたちも離れぬ醉のまぎれに

伊丹にて大塚寛制がはゐれ屋にやどりゐける時朝まだき外ぬ面白見いだして

生駒山かすむあしたぬみわたしに思ひつゝくる花の上かな

かへりきて後伊丹人のもとへ

中山の岩がねつゝじ手折りこしおぼろ月夜ぞ今もおひしき

春旅　末遠き春のたび路よいくたびか花にわかれて花にあふらむ

かゞろふのもゆる野邊より見渡せば淺間が嶽い霞なりけり

夏旅　五月雨いはれおしものを大井川いつまで遠きさなりなるらむ

冬旅　風ふくさゝめのみのゝ雪よりなごり哉ぐるゝ旅のそらかな

羇中雨　椎の葉にかれ飯もるとやせらへば山風そへて雨おぼれきぬ

羇中關　鈴鹿川水も八十瀬いゆくものを何にたゆたふ關路なるらむ

旅泊　わさつみぬ浪もてかくず故里をうきねの夢に今宵見しかな

天王寺の舞樂例ゝ二月なるを故ありて九月にたがへける年夕つかた見にまかりて

篝火のはかげ霞める夕べやつゝむも春にさきかへりけむ

十月朔日箕面山の紅葉見にとて伊丹ぬ蓼園より人々と共にまかりゐるとき

神無月たちぬときけどもみぢ葉の秋いけふこそ盛なりけれ

正紹と共にはじめて圓珠庵の契冲阿闍梨の墓にまうでて九月の末つ方

あとゝめむ道こそ哀らねば庭櫻秋のこのはとちりつもりつゝ

紀伊國續風土記撰ばせ給ふ仰せごとゐて三たび熊野のむら〳〵海山をめぐりける時い夜晝といはず古今の事ども尋ねとひて書き哀るし暇おかりければ大方歌もえよまで過ぎにしかど一つ二つい懷ぎしのはしにかいつけおけるもありしを歸りて後同じくい今ひとつ二つとよみ添へける歌ども

那木の葉をりざして歸る人もがな世々の御幸ぬあとゞりせむ

荒熊のいでいる山の岩木ゐも秋をかなしぶいろい見えけり

ひろの江を連ねて渡る雁がねにたえし御幸の影をしぞ思ふ
山賤がけぶりふきけむ跡ならし椿のまき葉ゑもにこほれり
契ありて露もおくらむ賤がこる妻木のみちの大和なでしこ
いづる日の影も麗のあさゆかな霧に玄をれて山路わけまし
ゑ熊野のわら山中に海なしてたつ朝ぎりをいくへわくらむ
朝霧のふかきを雨とかもひしいまゞやまなれぬ心なりけり
みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かためゆく山路哉
煙たつ峯の炭やきやどりかせ夕日のおくにましらなくなり
門すぐる風を玄るべに樫の實の一人いでても拾ふうなゐう
夕されば山路は松のふさたきを岩根の蔦にてらしてぞゆく
袖かへす山風はやみ松の火もともにこぼるゝ夕玄ぐれかな
山賤がまとふついりのふる衣さしも思はずよそにきゝしを
大かたの秋とも玄らぬ山賤ゞけにもる飯のこの實なりけり
山賤がもちひにせむと木實つきひたす小川を又やわたらむ
あらをらが岩垣つくりつくる田もはにいで難き山の奥かな

ゑ熊野の神の御田屋の花薄はにいづるまであれにけるかな
つみとるもあはれ曾根田のやせ稻穗手にみつばゝりわらばこそあらめ
もる人の心がまへを山かけて思ひめぐらす小田のくひがき
人傳もすゝろに寒し大たゞのふもとの杜のとりの夜おゑゝ
岩がねの八十のくま野の川傳ひかちゆくばかり危ふきゝおし
五百枝さす槻の木陰の岩むらゝ弓削のたくみや眞鉋ふれけむ
宮代ゑめびきはへしいはひ杉賤がをがみの聲もうれせず
岩かゞのかゝひの場ゝあれにけり葛のうら葉をかへす嵐に
靜川のれくにありてふ釣橋ゝたゞ玉の緒をかくるなりけり
足ふめば霜くづれするまそは山たちやつかれむ霧のみ中に
雲たゝむ岩ね松がねゆく水のよどせにかはるむら時雨かな
都まで誰かさそはむ岩がきにかゞくれしてのこる紅葉を
五百重波さてりと見ゆるむら山のはての綠や海路なるらむ
いたゞきに柿板のせて下る子がうしろ手寒き那智の山かぜ
打れける板目にきれし黑髮をゆゝしと見つゝ脊子や歎かむ

浪のねとに枕さわげぬ夜半もなし山ふところを立出しより

磯近くかりねする夜ぞ敷妙のまくらあらすな沖にをれなみ

むろの海のにしきの袋せばけれど百船びとい雨づつみせり

浪風のうちみだりさる我髪をたれかゐ〻げむくしもとの浦

家ならぬかたもなき迄みわが崎佐野のゐさりい賑ひにけり

雪ふちがたちやよらまし夕月のかゞさへ清き佐野の松ばら

沖さけて浮ぶ鳥舟時のまにかけりもゆくかいさな見ゆらし

鯨とるくま野の舟の八十つゝき花も紅葉もうらにこそあれ

ひし投ゞて鯨つく見ゆ逸鳥のつばさが上にたれゐたつらむ

雲かゝるわさのみ中にわら衣を雨とふらせて鯨うろべり

八百日ゆく濱路を清み磯松のつねゐと思ふかげもありけり

有馬山海浪のゆふ花をりかけて神をまつらぬ時も日もなし

夕時雨そでにみだれし山おえて板屋のさとを月にこそとへ

かゝ宮の錦のみ旗たちかへり衣のぶむかしの夢にし見ゆる

〻吉野のおくに思へる心さへ身さへ山路をわけさどりつゝ

山里のあさ木の柱あさよひにたつといずれど細きゝぶりや

宿とへば木柴をりさま熊野人あもはの神のみちやつたへし

小楯なすいはほてるまで高倉のかぶとの杜ゝ紅葉衣にけり

仰ぎみるふろちかくらの松陰ゝいかなる神かゐりたゝすらむ

荒山の八十隈おちぬゆきかひに涙ゝそでのはりめをぞもる

熊野へゆく道の程ゐて周参見の御館を守れる淺井廣俊がもとへ海に結びてつかはしける

はな海まねくまに〳〵我せこが昨日の袖をとめつゝぞゆく

近露の里ゐて寢覺して

驛長竹の小筒をふくからにやまのかひこそこゑあはせけれ

九月廿一日めをと坂を雨にこゆとて

たが中の秋の別にならふらむ女坂男さかゐ衣ぐれふるなり

湯峯にやどりけるゐした雨ふりていとくらし

瀧つ瀨のあたりの雨やいかならむ出湯の煙はるゝ間もなし

此歌ゝ近き頃那智の山奥ゐてかた木さるまゝに瀧の水昔よりゐ

とれりとて人々なげくを聞きてよめるなりかくて後その事やみぬ

ときけば今より百年も經なば昔ゐも立ちかへるべくや

熊野川　熊野川いはほの中をゆく舟のへださるものゝ憂世なりけり

熊野川八重をりたゝむ岩かげを水棹にわけて舟ゝくぐさむ

本宮にやどりける夜

七こしの峰に夕ぬる秋のくも一なびきしてつきゝのぼれり

十月二日花の窟のまつりすと聞きて有馬村の旅やどりより人々と共に手おとに菊雞頭花などを携へてまうづ

神無月はる心地ゐもなれるかな花のいはやに花まつりして

祭りこし世々を思へばぬさとおく菊のちとせも露の一とき

神まつる有馬の浦による波はおとやつゝみの名殘なるらむ

波かぜのかはらぬ音を有馬人笛につゝみにいつかゐはせむ

玄めはへて結べる菊のひまごとにゐふぎもひらく花祭かな

鬼ゞ窟にのぼる里人田村將軍の故事などかたるをきゝて

ゐら浪のたちはなれたる窟戸に籠りし鬼もやらはれゐけり

二木島ゐて　にきの海の千尋のうへの波枕やまかげよりも靜けからまし

にきの蜑ゝ櫛笥は鏡とりも見ず窓ながらこそ朝魚つりけれ

安廣の二本松ゝ紀伊志摩二國の堺なりしなごりなり

あご崎の二木の松をけふ見れば昔のいろもさだかなりけり

楯ゞ崎ゝ增基法師が楯をつきたらむが如しといへるに違はずいとこゝしき巖なり

島の崎ゐた波ふるゝいはほもら君ゞみ楯とつかへまつれり

曾根里より舟にのりて加太浦につきてやどる海部郡加太を思ひいでて

うさりゐふ友が島をも見てしゞな隔さるかたの泊ながらに

十月十六日巴嶽にのぼるとて多宇具良といふ谷の雪の上にかり庵つくらすとて大木をきらせけるに倒るゝ音山にとよみぬ

み山木のもときりたつと斧とれば空もとゝろに嵐ふくなり

夜半すぐる頃よりふき出て松ともして日本が原といふまでのぼらむとすさるゝそおよりて

朝日のかげに富士の山見ゆと里人いひ傳へけるによりてなりけり

小笹原よおもる雪をわけすて、富士のねながら日の光みむ

遠婆が峯此堂を朝とく立ちいでて高瀨の里寺のかたはらなる自天王の御墓といひ傳へたる御墓をふしをがむに里人赤松が族のわざはひせし尊義王忠義王などの御上をかたるを

聞きつゝ泪もとゞまらずかしおけれど菊を折りて奉るとて

君まさゞ八重の白菊今ひとへにはは秋もわらましものを

たが衣ゆくたさゝるべき苔の上ゝ野はり土はりうらがれゆけり

秋津河中　秋津川いはねの松のかげ清みそらゆく鳥もはねやまめせり

たちならぶ巖が中の秋津川わくよもわらじをちかへりみむ

牟婁津の千疊敷といふ巖を見て

むろの津ゝ出湯の上ゝ石たゝみ千重さへ去けりみ幸待つらむ

橋　杭　わさつみの宮路ゝかよひ中たえて巖となれる橋ばしらかも

古坐川の虫喰岩一枚岩などを見て

巖すら虫ばむばかり日數へぬ菊のはなさくやまづたひして

雲間もる秋の日かげも紫のこさのいはほにかたぶきにけり

那智瀧　壁たてるいはほとはりて天地にとゞろきわたる瀧の音かな

瀧姫の御衣ゝ白たへ幅ひろみさくいかづちや思ひうけゝむ

高機をいはほにたてゝ天つ日の影さへかれるからにしき哉

あしたづの翅のうへに玉去きて神やますらむ瀧のみなかみ

富士も見き近江の海も渡りてき今いと思ひし瀧ゐやいあらぬ

世の塵にまよふ歎いきゝとめぬ神ゝみこ去や瀧ふそふらむ

まもらをがもべしもとゞりときはなつ瀧の響に雨みだる也

神あれし五十年ゝ秋ゝ一つぶていつまで瀧をさへむといする

此歌い天明それゝ年山すゝなといふあらびありて瀧ゝ上より落ち

たる大巖どもをあかぬことに思ひてよめるなり

熊野ゝむら山の中に大たうのもりといふ山あり神代よりわけ上りし人なくいと〳〵神さ

びたり此山やゝ隔たれる所々より見ゆれどさゞかにそれとも定めがたきをはうしが嶽と

いふ高山そゝあさりに天そゝりたちたるを見てそゝ山とい去るべく人々いひあへるを聞

きてさはぶきゐ

大たわをいづれと問へゞ傍にたてるはうしぞ教へがはなる

在田日高二郡をふさゝびめぐりし時おの歌どもい日記ゐも去るさゞりしを一つ二つ思ひ

いでて書きつく

水の音にはてい心もすむばかりいはがね枕いくむすびしつ

若鮎の夕川のぼる一つれもかりは去めたるきしにやすらへ

あららつく新藁くつの荒つくりいかゝふまむ岩のうけ道
まそゞ山八十氏人のつりあらで流れし雨のあとを見るかな
鷺を去る人にしてやまゆけゞ花よりのちもはるはたびなる
とりふける軒のかやねに申さして鮎も手綱もかけ並べつゝ
かたぶきし軒(けるゆ注)の筧のみづ舟になみだも浮ぶむかしがたりか
筧もる庭の去みづにそゝがれて去年のはし鮎若がへるらし
たが文ぞはしりわらはに言とはむ竹の皮ぎぬ洩れて見ゆるゝ
もえ松につゝじ折りそへ賤の女が子ゆゑにいそぐ夕暮の山
たゝにゆくものこそなけれ岩がねの八十隈川の水の去ら波
神あらゞ岩かしわけてかへらまし山路の暮ゝ家ぞこひしき
日高の枝谷ある鷲の川北瀧見にまかりけるとき龍田義陳雨ごひのおとなどゝさりてうゝ
せゝめけれゞ
あらわしの雨雲羽ぶく風はやみ岩きるたきの音とよむなり
南部の熊代繁里が許をたちいづとて
ふゝみつる離のつゝじちりにけりあからさまにも宿りしものを

松
我門の人まつかげし清けれゞ獨ゝ千代を去めじとぞおもふ
手すさびに植ゑし小松も萬代の聲きくばかり生立ちにけり
名所松
さしいづる月を去るべに立かへり見てこそゆかめ武隈の松
杉
心ぜむ直きためしのすぎすらもよこめ扇につくるてふ世ゝ
竹
嵐ふくひとむら竹の友ずりにたつことかゝきよをも去る哉
竹の繪に
鶯も月も去たしくなりにけりひとむら竹のかげ去めしより
茄子のかた
あはまこの賤が垣根のわかなすび實さへはなさへ紫にして
西瓜
もみぢ葉の色にと願ふ瓜つくり秋くる方の名ゝおほせけむ
幽徑苦
山賤がいつやすらひし道ならむ柴のくち葉に苔むしにけり
鳥がねもたえし山路の苔の上に我や憂世のあとゝとゝめむ
苔ふかき谷のはそ道わけいれゞ流るゝみづの音づれもなし
鳥
むす苔に杉さへくちぬ何をかゝわくる山路の去るしにゝせむ
波の上に浮べる鵜すら鷗すらかたわきてこそ立ち騒ぎけれ
鶴
あしたづの高ゆく翅われわかせ月のをち水とりてこむため
月花の色をつばさにとりかけて千代ふる鶴やわかぬ事なき

芦鶴の翅の雪のあたゝかに見ゆるゝ千代を積めばなりけり

曉　更　鶴　なきてゆくたづの千年ゝたが中の曉おきにかこちよすらむ

繪に川に都鳥あり

都鳥あさる瀬きよしてよひもや月にふくらむ賀茂の川かぜ

猿　大江山さゝ栗おつる夕ぐれのあらしの末にましらなくなり

猿山のかひにさけぶ

もみぢ葉の秋の御幸を山猿もみたびまでとや鳴てまつらむ

馬　若草の美豆ゝみまきゝ放ち駒たがとるむちに千里ゆくらむ

猫　から猫もひきのまに〳〵のぼるてふ位の山ゝ網にこそよれ

犬　大かたゝとはずなりにし我門をまもれる犬の聲ぞかなしき

魚　釣すればうけのまに〳〵よりくなり魚も淵ゝ潜みはてずや

龜　ゝひきてふ文ゝ何せむ背にのりしはやすひなとの昔語らへ

あさ守る城のへの水にうら安く浮べる龜ゝ御代のゑづめる

蛛　目にかけて拂へばすがく笹蟹のいとはしとのみ思ふ我世や

笹蟹の糸のみだれもみるべきゝ花ちりかゝる夕べなりけり

歸りてむ宿ゝ野分にあれふしをいつまで蛛の夕ありきする

谷〻〳〵の繪に玄不談妙不談といふ禪語をかける傍に

はちにこそ光ゝみてめ何しかもたぬきの鼓つきにうつらむ

畫の竹馬にのれるかた夕月あり

老となるものとも見えず竹馬のかげなつかしき夕月夜かな

布袋の月見たるかた

早〻より心の水にすむ月のかげをそらにゝたがうつしけむ

官女のすだれまきたるかた

峰よりも高き心のあとつけて雪にかゝげしたまもだれかな

栗のかた　菊の露ふかき山路にさゝ栗のゑみもこぼれて秋かぜぞふく

草花多くさかせたる花籠のかた

もらしけむ鹿のねながら八千種の露にこもれる花がたみ哉

ゆづる葉に鶯をり

鶯のこづたふ聲にゆづり葉のさえだの雪ゝのこらざりけり

遊女と起上り小法師と西行上人像とを伏見人形のまゝに寫したる繪に

風すさぶ江口の芦のふして思ひおきて去をるゝ露の袖かな

おきあがり小法師ふさつわり

玉ひかる去だり柳の露いまいなまきも寐ばや人去れずして

猿の三番叟の舞するかた

ましらとてわびやいをらむ翁さび人めかしくも我いまひてむ

大津繪鬼の奉加帳もたる

目にみえぬ心の角もかつをれて鹿の園わやおもひいるらむ

若人鷹すゑたる

尾花川さゝなみ去ぶく夕風にあら鷹すゑてたついたが子ぞ

猿の瓢草もて餘おさへたる

大原やせがねにうつる月ならばかの瓢もてとらましものを

ひらは福祿壽のかしらに梯たてゝ髮そる

はじざてをはくらゐいせでさかしくも高天の山のかみやらふ子や

壽老人と大黑天とすまひとる

白金も黃金もつきじ玉の緒の長き世かけていざくらべてむ

藤花かざせる少女

藤波になびくすがたを春山のをとこさびすと人もこそ見れ

鎗もたる奴　笹のはの露かゝらずば玉鉾の道ゆくてゝはえなからまし

辨慶の大鎧さゝげたる

むなてゐてその曉をまつ人の法ゆちからゝ知るべくもなし

琵琶の法師のたふさきに犬たはれたる

四ゆ緒の琴てそわらめ翁まろいかに違へて引きすさぶらむ

披書知古　かりそめにふみゝるべくも思はえず鳴門の若芽撫養の濱栗

吉備大臣　色もかもうもらにかめるきびの酒弓削の河水くみやそへけむ

歌　色香去る心をたねの花ざくら咲きこそにはへ大和去まねに

千載集の中なるよみ人去らずの歌をみて

忍ぶあもあまる心の音づれをいろにうつせる山ざくらかも

連歌　立ちかへりぬひつらねずゝ綻びし衣の關のわとをとめゝや

硯筆　見ぬ世をも筆にうつすと朝なゝ向ふ鏡ゝすゝりなりけり

眞弓にも梓にもかへて筆とれば國ぶりならぬ跡ゝとゞめじ

墨　たくふすまゝちぎの墨は舟かたも棹うおはさぬ貢なりけむ

紙　世々をへて筆の力やよわるらむうまらにのみもすける紙哉

机　くるとあくと向ふ机の島ばかりよにこゝろゆく海山のおし

幅せばきわが文机の上ながら思ふかぎりの書きつたへてむ

歌會　まとゐすとふむや莚のから織もゝが歌島のみちのはかりの

彈琴　月見つゝひきゝまゝせども身一つの秋の調の聞くひとゝもなし

詠琴　みとちしの玉の緒琴は音すなりゆゝるの響うちたえし世の

三絃琴　妹がひくみつは緒琴のかたふろし花やぎてのみゝぐすべき世う

一絃琴　もしはやく浦の煙の一すぢにおもふこゝろも音にさてばや

碁　日をつぎてうちすさぶ哉のりものゝ花のちりおに成りにしものを

將棋盤　すみわぶるくゝめ屋形と見ちめどもさすがに賤が心をぞやる

二句久安百首に見えたる詞に盤面の八十一目をこめたれどさの聞え

がたかるべくや

玉將　右左ちかつくあたをふせがずゞ都にさへやながされなまし

金將　君をさておきや別れむあたどもの亂れ入りてゝそふべくもなし

銀將　ぎりべしのえみしがどもぞ騷ぐなるいざや歸りて追やらはまし

桂馬　たゝなへて圍める中にいらざらゞ一方ならぬいさをたてめや

香車　東人の遠きまもりにつかへけむたゞひとすぢを心とゝせむ

飛車　我むかふ直路の關をゆきとはり追しくばかり嬉しきゝなし

角行　まくらこそうたて心の儘ならね斜にふせるいくさとりでむ

歩　ぎかりとて露よりもろき我身かゝうち置かるゝも時にこそよれ

茶　なべて世にかをりみちたる木芽かな梅の尾山に植樹しより

茶室　櫻さへいまゝさかせて難波人梅が香そふるふゆでもりかな

劒　雲はなちふるや霰の玉まきて霜よりさむき太刀ゝはかまし

衣　ともすれゞ劒のたかみとる人のおそき心ゝとぐべくもなし

葛城や雲にやつるゝやまぶしのすゞかけ衣されかとりをむ

さ夜ふけて糸よりはそき燈の影をたれをにぬふゝたがつま

衣をよめる五首曾丹集に見えさるつらね歌のさまにもあらねど

から衣袂ゆたかにたつ人のこゝろの色ないさだめかねつゝ

筒袖はもろこしぶりのうらせばき衣に似たるなげきのみして

ぎで田長唄ふ衣のひとへぎぬたちやまじらむ雨いはるとも
ともずれがかけていはるゝ神御衣の其たち縫を去るよしもがな
悲しくもうき世の外は衣手をはにある色にそめむとぞする
鋏　足乳根の母が形見のひもがゝみむかしの影ぞかけて戀しき
燈　うつりゆく姿も去らずひたすらにてらす鋏を我世ともがな
船　曉をかけてつたふるともしびの光もちゝにみだれけりとや
清　何事かおもひのこさむ朝ぼらき漕ぎゆく舟のまほの追かぜ
黄　小笹原それともわかぬ葉ゞくれにかつ〳〵さける月草の花
白　よつの緒の名に引れてやなり出る木實も糸の色にみゆらむ
一帆見に二帆つらねてわくる夜の去らゝの沖に舟さはふ也
夏と冬と　風にのる夏の月夜もあるものを氷るうき潮に棹やさすべき
柿本大神　鳴山のたかきすがさわうち靡く言の葉ぐさゝ神ぞ去るらむ
大中臣右大臣のかた
心さへ身さへ清くやつかへけむ神と君とのまけのまに〳〵
業平中將　煙たつ淺間が嶽のあさましくまどふゆくへも人やとがめむ

河内女の手染は糸はうきふしにかゝもひたえけむ高安のさと
文屋康秀　唐織をたちまじへしやあき人にふさはしからぬ衣と見えけむ
田道　古塚はくさは葉さやぐ神かぜにあだ野は露ゝ殘らざりけり
楠贈三位　湊川そこの埋れ木えてしゞあつゝふる道の去をりわをせむ
常盤御前　右ひだりわくる心も去ら雪のはだへをとはす聲ぞかなしき
紫式部机ゐよりて月見いざしさるかた
回りあひて見し夜の空もみづ莖に月影ながら寫しとめけむ
福祿壽老人一卷の書もさるかた
いかで其みつの實を我もえて月はなゆきにうかれてしがな
大路に捨てたる子
綠子のちぶさたづねてなく聲に大路の塵もうち去めりつゝ
うなゐ子　笹は葉を小舟につくりうなゐ子が心たらひの水あそびせり
遠磨　天つ日の影もそがひの古壁にいつまで枯れぬ草の根ざしぞ
美人　もきかげもてぼれて匂ふ花櫻をすのうちにゝ誰かうゑけむ
いさやまた憂世に去らぬ姿かな竹よりいでし少女なるらむ

農夫　春田のみ人いとへどもいあ莚うつ手もさやゝ安けかるべき

乳　うなゐ子がすがる乳房や世中のめぐみ此つゆの始なるらむ

述懷　益良夫がとりかゝる靱にもれる矢のかずも昔の定とゝなし

ながめいみ飛鳥男子がぬふときくくつをれて此み世をゞ盡さじ

見れどあかぬ冬雪花此みつわひに我玉の緒ゝよりやかけまし

を熊野のみ崎此汐の一方に下りもはてぬ世にこそありけれ

思へ人世いうの花のくづれ垣ひとへに此みもたれ此み離きを

櫻川はるゆくみづのながらへて心のどかに世をわたらばや

玄ば〳〵家居をかへける事を思ひいでて

たなうらにつくりもたてむ庵ながら七種うゑて月をみし哉

榎の葉ちる石井此もとに我まきし玉ゝ誠のさまかあらぬか

わらはやみおて打ふしける頃

いさや川みをさかのぼる浮舟此ゆられて寒しとこの山かぜ

青木永章みまかりぬと中島廣足が許よりいひおこせける文のはしに其墓詣して思ひきや

秋風寒き片山に君を此秋とはひものとゝとよめりし歌をもかいつけたるが十月の末つ方

こゝに來つきしかゞ返りおとゝとて

思ひやる其かた山此松風にちるとゝ云るやまどの木の葉も

羽根田良裕八月ばかりまかりぬと尾崎正明が許より告げおこせけるに此春かしこにて

始めてあへりしことを思ひ出て

今や夢わかれし春やうつゝあるなきてをしへよ天つ雁がね

岩崎美隆まかりぬと光平此もとより告げおこせけるにいとおどろきてお此人の晩鴉此

歌などを誦して

涙さへみだれてかなしタがらすたゞ一聲此おどりならねゞ

幼子をうしなひて七日にあたりける日寺詣して歸りけるに年平が來居たりしかゞ

年月をへだてし人も音づれぬあすや我子のかへりきおまし

又の年此其日に

ゆきかへりたゞるゝ蝶の袖すらもけさゝ露けき撫子のはな

撫子のかれにし日より一年のつゆゝみながら袖にかけてき

あし垣に螢はなちし面かげゝひるさへ見えて露ぞみだるゝ

馬尾風といふ病おてうせけれゞ

聲かれてうせし子ゆゑに時鳥あけばかたみと何ぞのぶらむ

山田久秋ゞ一周忌に冬懐舊

かしましの霞のかとや友をなみ昔をとふる夜とい云らずて

藤垣内翁の影前會に曉懐舊

まどさむき曉月夜はつかにも昔のかげは見えばこそあらめ

夜懐舊　更けゆゞ昔のよゐやかへるらむ見し俤のさだかゐだたつ

父翁の十七回忌に夏懐舊といふ題ゐて人々に歌をゝめける時

時鳥親に似てゐくてゐならば五月のそらもながめせましや

高橋勝房が一周忌に寄菊懐舊

香をそゝぐ秋の時雨はひとめぐり云をるゝ菊も心ありけり

本居永平が一周忌に寄笛懐舊

ふけばこそ袖ゐゐ露のみだるらめ形見の笛も今ゐとり見じ

祝

君が代は惠のつゆにぬれてこそなか〳〵民の袖ゐはしけれ

八坂瓊の光をきよみ天つちのそこひのうらゐ浪かぜもなし

幸遇泰平世　君が爲花とちりにしますらをに見せばやと思ふ御代の春哉

つかへ人きのふゐ鳥狩けふゐ釣ひとまある世ぞ暇なげなる

人の賀に　何ばかり千年のさかえかたからむ嚴ゐねざす松もありけり

山内繁樹が七十賀に寄松祝

三名部の海むかふ鹿島の島松や千代はかげみる鏡なるらむ

寄小松祝年賀　春毎にひきてゐ植うる若松の千代をあまたの宿ゐもある哉

寄竹祝同　呉竹のふしにこめてもわまりある千代の榮や色にみゆらむ

春祝　庭の梅はひりは柳ちよふともゑまひ眉びきふりせざるらむ

冬祝　風たゝぬ御代の光や積るらむあたゝかげなる松のゑちゆき

器　近江のや鏡は谷のずゑつくり神代のかたをうつしたがふな

髪　我身かくもとゞり落ちて老ぬるをなど總角の心地のみする

車尾村の榎ゐ　延元の帝の御輿よせたまへる蔭とて伯耆人の歌こふに

天つ日の影さす方に打むれて榎は實もりはむ鳥もなくらむ

永久百首題にて一夜百首よみける中に唐人

日の本にありといふなる不二のねの雪の光に書見てしがな

竹垣主の元服の祝に

とる弓の末たのもしく見ゆる哉わらは姿をひきかへしより

餅花とて柳につくるを武藏の國ゐてゝ眉玉といふとぞ

下めぐむ柳がえだの眉だまにまだきこもれる春のいろかな

天保八年の春うゑ人多かりと聞きて其心をかなしびつゝ

春の野に露とやきえむ玉の緒を結ぶたよりの草に葉もなし

人の子うませたる祝に菖蒲とかぶとゝのかたに歌こひければ

若松の緑にかよふいろなれば菖蒲も千代のためしゐぞひく

夢

去年も夢今年も夢とたどりきていつを現のはじめゐわせむ

繪たくみ文穎みまかりける時寄草花哀傷の歌とて沼野直道がこひければ

うつしつる人こそ恐べうす墨のゆふ露ふかき秋はぎのはな

縣居翁の靈社に奉ちむとてくさ〳〵の歌よみける中に

古郷の岡邊の菫手につみていとゞむかしのはるぞおひしき

櫻ばなちらばちらなむ遠つ神わがゐはきみにきぬ笠の上に

そめざらむものとゐなしに秋山の青きをれきてゐなく頃哉

風おゆる妹が垣根の山ぶきのはなにたぐひて春もいぬめり

古にこふらむ鳥のこゑまちて花たちばなゐはな咲きゐけり

みしぶつく植女が袖に夕月のやつれし影をゐはれとぞ見る

ともしびに光すゞしき中川ゐつきをもまたじ秋もゐもはじ

山里ゐうの花がきにひまをあらみゑのび音もらす時鳥かな

柳葉の香をかぐ山にのぼりても神代に空ゐはるけかりけり

馬草ゐる荒野とこそゐ思ひしゐやまと撫子さきそめゐゐり

故里に岡邊にたちてわが見てし富士のみ雪のそゐにはに戀しき

故里のなつめがもとの萩が花こぼれゐけらし秋かぜのふく

世中ゐかなしかりけり世中のなにゐかなしき賤の男にして

我宿ゐあきの花野となりなゝむ夕つゆわけて月のかげ見む

時鳥矢作に井ち渡すぎぬなり沓代いださぬかどやとふらむ

夕さればやまとへこゆる雁がねの聞ゆるからに秋ぞ悲しき

蘆かちる難波のわたり今ぞせむ鳴の羽がひに初ゆきぞふる

あらゐの海百船人ゐさわげども濱名の橋に和とし忘らずも

引馬野の木芽はり原いりみだれ春日くらすゐむゐし人かも

風鈴の歌あまたよみける中ゐ

山里のそとゝもれみ籟ふく風の音もさやかになりにけらしも

小浦廣名が熊野へゆく折々馬の餞の會せし時よめる歌ども大かた忘れたりされど

水清き安氏ゝ堤のはし紅葉うつろふゝゝやすぎがてにせむ

とくゆきて君をりかざせ月ゝ瀬の夕川づらゝ紅葉ちるらむ

かしこへいひ遣はしける中に

荒ゝかのもさみゝ海のおきつ風袂をのみやとめてふくらむ

清舍君湯崎の出湯おみにものしたまふ時

君がゆく野山の薄みま草にかりてつかへむわが身ともがな

三月ばかり海路へゆく人に

うちくゝと霞みわたれるわさつみゝ春のあさ庭靜ゐをたて

落花　心からちけふしもちるか櫻花あらしのかぜを待ちがてにして

初冬山　神無月たちにし日より足びきの山さへもろき色にみえつゝ

雪中鷹狩　ゑら鷹の小鈴もゆらにゆくみれゞ野山の雪ゝ色なかりけり

咏鶴樓ゝ月の宴に玉つ島ゝ釣殿の笛音きゝえけれゞ

たちのぼる霧より上の高どのに笛のねながらすめる月かな

竹徑通幽處　村竹の葉分に薫る花の香をとめくる間ゐも千代ゝへぬべし

椿　年月のさかりもゑらず花さきて春をつらぬる玉つばきかな

湖上寒歷　たる姫のうき洲の雪にふしわびて常世戀しく雁のなくらむ

時雨　山畑の麥のはつまき急ぐらむなゝめゐもふゐむら時雨かな

紅葉時雨　ゑぐるゝか松の色だに見るべきを外山ゝまだき暮初ゐけり

冬月　西寺ゝ夕日のかげにかたぶきて御笠のうへをゆく時雨かな

枕上寒歷　影きえし雪げの雲をふもとゐで松にゐもれる山ゝはゝつき

秋海棠の歌　若草のつま屋の枕つくゝと見しよの春ゝ夢をしぞおもふ

露ふかき秋のよもぎが島かげに玉のえぐこそ花さきにけれ

狩野雪　白鷹の草とるばかりありしより片野ゝ雪にうづもれゐけり

冬衣　毛衣にわたとりいるゝ眉刀自女我子のまけかわたさはたいる

冬鳥　島かげにうゝべる鶴の二ならび昔をてひていくめぐりせし

天王寺かぶらゝと烏芋とをかけるに

烏羽よりの使おざらゝ難波寺なにを夕々のゐはせゐいせむ

千　鳥　磯山のもみぢを葺る船屋かたおがるゝ波にちどりなくなり

曉　千　鳥　曉い夢もみだるゝ声らかみに老をかぞへて鳴くちどりかな

山　家　遲くとく世に似ぬ色を見せる哉花も紅葉もやまでもりして

山家秋深　都びとたけ狩すらし片やまのせいふく風にこゑぬきこゆる

嘉永元年の秋遠江懸川驛ふて父翁の二十七年忌の爲に歌會せしよし聞きて其題秋懷舊を

人きれず思ひみだれて恐ぶかな萩此下葉のうつりこし世を

嘉永二年九月弟のとひきて懸川此會のことゞもこまやかに語りければ

掛川の里ゐのま葛くりかへしとへど語れどうらぶれゐけり

寒夜衾　あなさむの夜半の衾や河風ふ身をわび人のこゑもたぐひて

籬　小鼠のよゝのさわぎにはしやれて内外へだてぬ古をだれ哉

嘉永元年の四月ばかりふや心地そこなひて臥しねけるおろやさるのとぶを見て古陰らと

歌がたりきつゝ

水枝さす楓のかげに秋まだでこがるゝ色いはたるなりけり

川づらの庭にありける時正月の始つかた南の山々を見わたして

靜なる山のもがたをほのゝ〳〵と浮べてたてる春ゞすみかな

心地そこなひける頃岡川に船を浮べて

桃此花うつろふ陰をゆくはどいうき瀬に沈む我身ともなし

泉川ゐきて秋こそかなしけれはらへばむすぶかせのやま霧

露ながら袖ふやかけむ藤原のあれしみやこの秋はぎのはな

秋萩川

菊の花うるはしくかけるかゝに

花ふきしよゝの盃いくかさねかさねて菊のいろいそひけむ

十日菊　千代をまつ色こそさめぬ哉らぎくの花の盃けふもとり見む

重陽　さかづきに菊い浮べつからう歌のかたき心もくみ見てしゞな

秋鳥　をがや原野分をわたるこがらめの聲此亂もうらぶれゐけり

海上眺望　天草や天よりをちぬから山も雲になびきて日いくれゐけり

紅葉　波間より見ゆる沼島のもみぢ葉い霧の雫をてらすなりけり

雪　むら鳥はれゆく雲にゐとつけてゐけはなれたる雪の空かな

深き夜の夢此ぞ哉も今ぞ哉るすいの篠屋此雪のうはぶき

昔いれし瓜生やいづら山城のこまのわたりのゆきの朝あけ

植ゑまぜし菊もなべてと思ひしをま垣にみてる雪の色かな

蘆花似雪　枯蘆のほれ上に寒き去ら雪を海人い綿とも身ゐやそふちむ

朝殘菊　霜ふみて人いとふとも白菊れ今朝のやつれいみせじとぞ思ふ

冬人事　道遠みけふもひつじいくぞちぬとはしりくらぶる神無月哉

社頭雪　初雪の朝宮づかへいちじろきあとこそ神の道ゐいありけれ

早梅　くちのこる窓の木葉や拂はまし梅も枝ゐいこもちざりけり

せちふとて人々さわぐに

我門のなよしのかしらはしや世い春の光れさもにまかせむ

春の歌れ中に

雪をれし松より奥も春なれや斧のひゞきのとだえがちなる

雖しかもあふぎのつまい折かけし移ろひがたの花の下枝に

正月ばかり若浦ゐて

ちりかひし雪いすゝけて蘆の屋れけぶりにまじる朝霞かな

蟹の子がつむや菜草れ山かゝりかげさへ霞むなみの上かな

野若草

浦風い春をそがひの左日鹿野もやゝ波よする草のいろかな

笛のねもまだとゝれはずあげ巻ゞ通ふ野のべれ草や短かき

野外春風

をゞや原雪をふきとく風よわみ野火の煙れむすばれつゝ

紅梅　をぐしとるたぶさも寒き朝風につまくれなゐの梅が香ぞもる

三月ばらへしたる所に松原あり

みそぎすとおりたつ袖も霞むらしなおやうにふくあらゝ松風

上巳　桃の花麻笥にうつして賤の女もけふいひゝなの宮仕へせり

待花　鶯れ去のゝめいそぐほころびゐねぐらの花も遲れざらなむ

春祝　こたうすき花の色香のあらそひも猶のどかなる宿の春かな

三月ばかり日前宮にまうづる道ゐて

酒殿い夢ばかりなる春の野にいつまでさめぬ蝶のねぶりぞ

月前花　打霞む月にみしよの宿とへゞおもかげばかり花にはふなり

山東正周と共に名草山の千樹谷の花を見て

花さけゞつれなく見ゆる松もなしみ山を春の住所といせむ

直川寺の花を見てかたへの谷にゐるゝにいと寒けれど鶯のなきけるゞ

谷の戸い松れ烟もとちあへず花のふゝきにうぐひすぞなく

人の家に花園あり今植木す

袖ふるもをり哀なる胡蝶かなけふより園のはなもりゐせむ

山田原　えでかくる山田の原は眞白ゆふなびき仕へぬ賤の男もなし
櫻ちる山田のはらいたをやめの袖うちかへし春かぜぞふく
木綿つくる山田は原の五百枝杉つれなき色いつをせにせむ

遲日　こしかたを思ひわつめて櫻花八重さく宿にはる日くらしつ

井溪とから名つきたるい善水が弟なりそれが許より螢をあまた籠に入れておこせつさるいかの山里は江川ゐいと多けれど我學の窓を驚かさむとてなるべし又の年は春善水のとひ來し時弟のもとへ

青柳の枝川のそひにゆゞねまき苗とりいそげはたる早みむ

此歌や忘れざりけむ四月の末つ方あまた得させつるを夜毎に見つゝ思ふ事ありて

くちはてし草も光をはなつ世にいつ迄我身うち去をるらむ

神のけゐやゐりけむ嘉永とあらたまれる年のくれなむとする頃より心地そこなひてかき籠りけるを悲しびて常朝良喬美孝ら玉つ島御社に百たび詣といふことをして疾くさはやぎなむことを祈りけるに其をるしまさしくて月毎日毎にさはやぎゆくを喜びつゝかの人々更にかへりまうしをけるとて其折よめる歌ども見せけるに筆加へて厚き心をあまなふまゝゐ共によみて奉りける

ねぎおとをうけてふたゝび世中にかへしゝ神の道い忘れじ

寄鳥戀　木がくれて聲もきゝしをとぶ鳥の雲井になりぬひとの心い

五月雨　眉こもるこやのひさしは雨をだりいぶせさ音かとだえだにせで

夏田　うゑたてし田はもの稻葉そよや其露ふく風も秋いそぐめり

山家夏月　山百合のおれづからなる花の香も松の戸もれて清き月夜ゥ

八月十五夜　さし櫛とはの三日月は秋の影みがきいでたる增かゝみかな

初秋風　古池の菱はうき葉もひまみえて小波よするあきのはつかぜ

菊交薄　笹栗をおとす嵐のふきわけし尾花がなかにきくもまじれり

尋花　あとゝへばいさや彼方いまざしとて麓へくゞる花の山ゲつ

零餘子　いとか山積る落葉に風ふけばそよいもゲ子のはひ隱れたる

朝霜　かきこもる那智のみ山の霜ながらけさは朝榮に菊やつまゝし

射目たてゝ朝狩せばやさを鹿のとみは岡べい霜さむくとも

野雉　露はぶく野邊はきゝすの聲すなり春の雨夜い明けにけらしも

烏瓜　此種むすび文に似たれば玉づさをいふとぞ

紅のこゞめの袖につゝみつるたが玉づさのかたみなるらむ

石といふ題にて歌よみける時十年ばかりをちつ方和泉の堺なる御陰山にたてむとせし碑文こゝにて彫りたるを船にて彼處にのぼせけるに尾里とかいふ浦にて船くつがへりて波に沈める事を思ひいでて

泉の海沖にさゞめる石文のいかなるかめの脊にか負ふらむ

田家初冬といふ題にて歌よみける時わが國にてなべてする事ゝやあらむ北山の紅葉狩せし時刈りたる稻を木にかけわたして井筒のやうにしてはしけるが遠江などにて見なれざりけれバふと目にとまりしことを

水かれし田づらを見れバ里の子が井筒にくみてをしねはすなり

高野の僧此こへる閑居雪の歌

むろの戸に籠りて人もまちつらむこの曉此ゆきのひかりを

秋田　おくと見し鹿火も消えけり山本の小田此高垣風やこゆらむ

初春　松風に竹のみどりもうちなびくはるこそ千代の始なりけれ

子日　行末をまつてふ名こそ嬉しけれいざ子日して宿にうゑてむ

寺　春日さす花の上野此むなし死むなしき世といたれかさだめし

廢寺　橘のときは此陰となびきねしその夜も夢かあと此わかくさ

蝶　夢たえしうきねの袖か波のはの朝日にぬれて胡蝶とぶなり

窓すぐる子らにまじりて蝶とらむふでの林ゝ花もにはは也

さたひゆくてふの袖にまつはるゝ親の心も且ゝをさおし

秋人事　丹生省門による

あてびとゝ夏瀬の丹生に杖さすと紅葉をわけて榊とるらし

梅の花さけり女ながめをり

梅さけどまゞ袖さむき春風やかたみの水もこほるばかりに

東　朝日かげのぼる梢をから人のあふぎそめても幾世へぬらむ

水邊柳　丹生省門による

杖さしゝ江川の丹生の柳かげ水葉もわかにはるかぜぞ吹く

爐邊閒談　初雪のあとゞたりこそはかなゝれ庵の落葉ををり松にして

又更にをりたく柴のさひゞたりさゝゞに夜さへあくべくゝなし

和光院にて同じ題を

こりづめる薪ゝつきじ移りゆく三代を思ひのもとな離れそ

爐火似春　をりてたく萩の古枝の下もえに野守がいはゝ春めきにけり

草庵雨　昔見し少女のすがたふりぬらむ草のたもとに雨なびくなり

行路時雨　我ゆきゝ遠き道にもあらなくに晴れみはれずみふる時雨哉

海邊雪　たく炙ぎらぎの國をひきよせてぬはしゝ濱び雪ふりにけり

歳暮　暦なき松のはしらの庵ならばよるとも炙らじ千代の年なみ

村雨いとはげしかりける夜

笹の葉のわたくし雨ときゝしまに風さへぬれて窓叩くなり

松尾綾平が兄の五十賀に寄梅祝

さかづきゝ浮べざりせば梅此花たのしき春の色をそへめや

熊野人の賀に

ゝ熊野のまゝと遙が島ならばなみに越えたる世をぞへなまし

原

淺茅生の虎毛の駒のいゝなゝきにちる露炙げしもろこしが原

春日

うら〳〵と霞める空を渡る日の影のまに〳〵野山ひけまし

山霞

山鳥のはつ尾の雪のうまにはひ隔てもわへぬ朝ゲすみかな

ときかそき春を霞のうす墨にたゝみひけたる雪のむらやま

鳴瀧へゆく道ゐて

野邊みれば若草むすぶあげ巻が袂はなれてこてふとぶなり

夕花　夕〻にうつしおきてもすさめとや水上白く花のみゆらむ

蝸牛　野邊とのみあれし離の蝸牛とゞむるあともあはれいつまで

五月雨　五月雨の雲のつぎはし誰かゆくまゝの浦わゝこぐ舟もなし

幽栖秋來　世にたゝぬ竹のあみども朝顔の花を炙るべに秋やとふらむ

爐邊閒談　心して埋めるはゝのうす煙たゝずをかたゝさ夜ゝふくとも

遊糸　春されば山なつかしも埴安のつゝみの上になびくかげろふ

木川春望　若鮎のぼれば水だにも急ぐとゝなき春の日に木の川づらを雁れたつらむ

夏菊　夏の夜の月の霜こそさえけらし菊の下葉のけさ炙をれたる

野常夏　虎ふさばはぐくまゝしを撫子の露にやつるゝもろこしが原

暮林鳥歸　紀伊國造家御會

れくれこしやもめ鳥の一聲ゝそらにくれゆく日のくまの森

夏魚　ちる花のうき瀬をはしるかつら鮎何か若葉のかげゝ戀しき

初冬月　炙ぐれこし雲より西に夕月のほのめく影もあきのそらかゞ

浦　よもの海の靜けき御代にきて見れば錦の浦ゝあだ浪もなし

不邪淫戒　つくま江のをしの衾いうもくとともかづらむ鍋の數な重ねそ

壽老人のかたに

人の世のゆめも現もうれしきい遊きさかえを願ふなりけり

よみがへる玉こそ宝らめふはは此の露此言葉も世々にとめてい

草

五月ばかり青蓼堂の文庫をあさりけるとき淀川懐古の詩どもをよみつゝ庭のさつき此枝

ふ結びつけゝる

一むらの五月のつゝじ色ふかく匂ふころしも雨のはれせぬ

あはれなるもの

追捨てし栗栖の小野のかさ鶉あしたの露も羽ぶきかねつゝ

山家夜話　數さすとま柴をりたき山里のなぞ〳〵がたりさ夜更にけり

春　木　村鳥のこゑおそ霞め熊野山あらしもなぎのふる葉ゞくれに

室谷賀親が桐園此歌こひければ

呉竹のかげより高く生ひのぼる園生の桐いうきふしもなし

義家朝臣江帥に物學び給ふかたふよみてそへける歌

文庫いわゞにいわらぎ大み代此鎮の庫といひたてゝ朝典よみとき世々の式傳へ給へる空か

ぞふ大江の君の筆のあやゝ韓人かまゞ廣幡の八幡の神此大み名を名に負ひもちて大君のた

けのまに〳〵まつろはぬ國をやはしゝ源のいくさ建男が弦の音いえみしもおぢぬうべしこ

そ今のをゝに眞木柱さてし功い玉襷うけぬときなく文机に弓庭にみちて天下語り傳ふれ

傳へたる事が中ふも列みざる雲井の雁に敵どものふせりと云れるふることいさゝ一言ぞ云

ま〳〵にとひ明らめて物部の道のおくかを學びけむ君しともしも敬へつる君しともしもあ

はれこの跡ふみもとめ筆とらべみ代ぞ榮えむ弓とらべ國ぞよりこむ筆の幸ま弓の幸を神な

らひ習ひえてしゞ大御代のため

詠眞嬬山歌

此山日高郡此高山にして丹生津比賣大神の天降ましゝ山といひ傳

ふ丹生告門に江川の丹生に忌杖刺給ふと見えたる時の事ども思ひ

よせて鄕長瀬見善水にあたへたる歌なり

かけまくも畏けれども丹生津姫神の命から國をことむけまして朝もよし木の此國に齋杖を

さゝせ給へる宮所さはにあれども日高のや江川の丹生いい溪川の清き瀬の音と御心をよせ給

へバか里々にこゝざまつれるけざしくも故かもあると郷長にわがとひ聞けバ郷長の我に語らく古の事ゝをらねど天とぶや鳶の翅に其神の乘らしたまひてかの見ゆる伊豆の高山はしづまの眞妻の山に奇しくも天降ましゝゆつゞの木の繼ぎてもろ〳〵齋くとし聞きつゝへぬとかつ〳〵も我に語りき眞妻はやはしき山かも青雲にそばゞつ峯ゝをとこさび嚴たゝゝおみよぢのゆる麓の小野ゝ少女さびおき萩をなひ朝よひに見かはし山ぞ古も云かにあれこそことむけし神の命の奇しくも天降ましけめはしき神山

淺井廣俊が熊野の館まもりにゆくにわが七草の假庵ゐて馬の餞ひつどひしける時うゝへる歌

かしこきや御言かゝふり長月の云ぐるゝ空に雁がねの來なく朝けに赤駒に倭文くらかきて眞熊野の御館守ると吾兄子がたつ日を近み延萬の別を惜しゝみやび男らゐむれ集ひて七草の假庵のつゆに和妙の衣手ひづちかすゆ酒うちもゝろひてかのも〳〵うらびれをれバめぐらはす盃とりて下坐ゆ我うたへらく鞭うちてゆけや我兄子をしねかり貫はこぶと里人のまちか戀ふらむかつをつり鯛つりはこり海人の子が今かまつらむとくゆきて御館まもらひつゝみなくもなくありへて朝さらぢ見さくる海ひ春霞たちなむ時に夕さらぢ見渡す山の櫻花ふさ手折りきてかはゝしくまちなむ友の土産に云めさね

藤垣内翁の一周忌に紅葉によそへて云ぬぶ心を人々短歌によみける時よみてそへける歌

かげともにかへるでを植ゑ外面にぬるてをうゑかへるでの歸りますやとぬるて比ぬる夜もふちず待てれども歸りもまさずぬれどもいをしねかねて去年を云ぬばく

又

てる月の雲がくるなすおく露のけぬるが如くはしきやし我師の大人の過ぎまし〻去年を思ひ出て秋の葉のもみぢふ園による畫のたどきも云らぢま悲しびうらびれをれバ秋山比云たふる妹が紅に衣よそひてたもとほり我に告ぐらく汝ゞ云ぬぶ垣内のうしゝ新玉の年比一とせ云〻くしろよみの國邊に菅の根の長居云ましてけふこそゝ歸りますなれいざゝ〳〵迎へまつれとまつぶさに告ゞつるはしに我ねたる枕の上ゆ朝風のいぶきすゝみてぬば玉の夢ゝさめぬれ夢かもや現かもや夢ならバさめざらましを現にし見らくを云らに正目にし見らくを云らになく涙ひさめにふれバ敷妙の袂のくだりさにづらふ秋の木葉のこゝぢちりたる

木川にみそぎすといふことを

たなすゑのみつぎの布をひまなくぞ妹ゝあらへる時なくぞ妹ゝさらせる其布の白きが如く其布のさやけきなして我心すが〳〵しもよみそぎ云つれバ

螢火透簾

我島ゝ梢をげらひ夏かげのよろしき島と終日におりゐ遊ばひ夜さへに見まくほしけど夕闇ゝせむすべをなみおほゝしく思へるはしに玉だれのをすの間通し薄もの〻かとりの袖にま輝く光うつして夏虫のとびかふ見れば水際の岩むらてらし草の葉の露も匂ひて終夜見のまぐはしも虫すらも島好めばやぬば玉の闇もたどらず飛びかふらしき

瀧おとし水はしらするをまやまをよるさへ見よと飛ぶ螢かも

橘薫風

木國の在田縣のやまがたにをゝに生ひたる常世もの花橘の時じくのかぐの木實ゝ天下四方の國内に人皆のめでにめづとふ木實はみをかめづべしやおれ花のさきのをゝりの香をおそゝめづべかりけれいはまくゝおやしかれどもさ苗とる頃にしなれば東雲のほがら〳〵と明けわたるあしたの風の海原を吹のすゝみに荒汐の八百會をすぎて眉引の阿波の島回にはろ〳〵に薫らひゆくと島人ぞ我おつげつる怪しくも薫る花かもくすしくも薫る花かも春風に梅ちる野邊も秋風に菊さく谷もかばかりの薫ならめやくしき花の香

愛菊

こきうもき色香の限七重にも八重おもをめて七重花八重花さけるあし垣の籬は菊ゝ朝風に

薫をみて〻夕露に色をふかめて朝さらず見ともわかず夕さらず見れどもわかず年はにかくこそゝ見め年のはおめづとゝすれど年のはにいや珍しと菅原の神の尊のうゑはし〻おとのまに〳〵めでのまに〳〵

松田直愛が翠園の歌をとをばゝ〳〵おひおこせければよみて遣しける

貴人の衣そむとふ紫の色ゝかしおし少女らが末つみはやす紅の色ゝまばゆし打なびく春の草のなつかしき綠の色ゝとことはお見かほし色と遠つ人松田の兄子が朝よひに書見うたよむ窓は名にかけてめづれゝみやびたる友もとひ來て花鳥ふ心をうつし月雪の折をすぐさずむつまじき窓おもおるかもおはれ其松の綠は常盤なすかくし遊ばむ心さらひに

小浦廣名が熊野へゆく馬のはなむけに

沖つ浪天雲はふる海若の神の御面にたゝむかふすさゝの館ゝ八重山のをちにゝあれど年まねくいゆきまもれゝ海山もむつ玉おひて霧はむさ群山なびき波のむた鯨ぞよらむ海原も山もたひらにまもりたれおそ

安御代ゝ浪をづかなり周參見は海稻積島につりしおそばへ

又

眞熊野の熊野の山ゝさかしみと人ゝわぶれど人皆のことゝ何せむ君がまに我ゝならむと山

霧を眞袖にわけていでたゝすわせがいそしさ益良夫のゆくべきさちのもゝむべき旅ゐいわれどもはし妻ゝ手をたづさはり母刀自を負ひもゆかねゞ時雨ふり霜ゝふる夜を天雲の五百重のをちにさぶしみか思ひてはらむ其心いたし

錦園歌

山吹のうつろふ川ゝ清き瀬に妻よびたつる蝦手の色なつかしみ園もせにこゝざほり植ゑて堀口のわせゞ見はやすはしきやし園ゝ木むらゝ露霜ゝ秋にしなれゞ朝露にほづ枝もみゞひ夕霜にゑづ枝にはひて下蔭の草ゝかき葉もいやてりに照りかゝやけりわなめでた是の錦ゝ久堅の天の河原に棚機の五百機たてゝ千五百むろふりゐもらむ照妙の衣にぞあるらし秋ごとに見れどもあかぬ唐錦はや

那賀郡鎌倉谷の雌雄の桂を見てよめる

兄の山ゝ妹をし思ふと妹山ゝ兄をし恋ぬぶと道のべに並ばひをれゞ妹も兄も類よろしみ皆ひとゝ賞つゝゆくを我しねかる鎌倉谷のこちおちゝ雌雄の桂ゝ松だにも生ひぬみ谷に杉だにも生ひぬみ山に年久に恋みさびたてど五百枝さし千枝さしおほひ珍しく並びをれども山高みはき路さかしみ人の見ぬ事ぞくやしきあはれ〳〵是のゆかつら妹山にうゑむよしもゞ目細き是の雄かつら兄の山に植ゑむよしもゞ麻萠えむゆゝ

待花

くらおかみ雪をふらしめ立田彦嵐をふかせ年月のくれゆくはしにあらびてし神御心も春されゞなおみまずらし此岡に若菜萠いで彼山に霞きらへりいさゝ緒に我もふ櫻花にさかぬゝ

九月十七夜咏鶴樓にさぶらひて

古の人のまきねしこも枕高殿ゝ上に月見つゝさもらふ時しおく虫の聲ゐもたぐひたつ波の音にもそひて此見ゆる野らよりをちの玉津島入江ゝくまの釣殿にたつおもゑきて雅樂人のふきあはすとふ笛のねきこゆ

北山にきその夜なきしさをしゝと笛とのおとし忘らえめやも

清舍君安藤君の山齋神秀峯に遊びさまへる時よみて奉りける歌幷に短歌

岩がねのはしきさちはやわけ上る山路のそひにいくみ艸よたけ植ゑはしわしたゝ雨夕べの露をむす苔の莚にたゝみ青垣を四方にめぐらし高山の峯も平にあらの葉の眞廣にゑめてまぐはしき館ゐもあるかもふりさけて國かた見れゞ横はれる外面の山ゝ秋山と紅葉かざせり棹鹿のねおろゝ寺ゝ薄霧に覺隱さひ八束穂の長穂の田居ゝ堤ふく風にあらはえ引ゝぼる木の川舟ゝ松原の緑に隔て初雁の渡らふ空ゝ雄山の雲に連ねて歌思ふ心ゑぬしゝ今日の此いく日のたり日打靡く竹村ゐして常しへに暮れぞてをあれ青垣の玉松なして千世もみるがね

五百代や千代の穂上霧こめてあきの日はやくかたぶきにけり

詠　史

西寺ゝ老鼠こそふむもつみ袈裟もつむとへみえし野に放てる虎ゝ何しかも鼠ゝもころふむもつみ袈裟もつむらむ其虎のいぶきゝさ霧天下をでにおほひて鯨とりあふみの海をひた土にふきまどはせゝ沖さけて舟ゝこげどもへつきて舟ゝたゞども沖にへにまかぢひきをりたどきゝらずも

又

鯨取淡海ゝ海ゝ名ゝりそやみるめや生ふるみえし野ゝ芳野ゝ山ゝ潜女やあまめやつどふいかゞりし時にあれゝか天の去さ國内おとゝ〳〵うづ汐ゝいわき騒ぎてえし野ゝふゝ潮ゝ汐みたしめ淡海ゝふゝ潮をひしめしうつそみゝこれの世中二ゆくなして

宮部美臣が遠祖善祥房といふ人の二百五十回の靈祭すとて歌こひければ

よみて手向けゝる歌

河上に生ひをゝれる高萱の根白の城にゝ旗雲か今なびくらし鉾杉か生ひ去げるらし亂り世の昔おもへゝ内日刺宮部建雄ゞあさまもり守らふはしに薩摩人ゝさばかりけらくぬば玉の此夜のほどろかの山の城門ふみ去だきたて籠るあたのおとゝ〳〵旗薄はふりさけてむかのも

〳〵我にいしけと村肝の心ふり起し諸聲にをらびさゞびて荒浪ゝいよせ攻むれゝいなして女ゝそのたふれか豫てよりかくとゝ去れり今こそゝ時しもよけれいざ子ども早もむろへと青淵に潜める龍ゝ天雲にかけらふなして夕立ゝ雨より繁く玉うてゝ五百人おやし箭はなてゝ千人去ぞきて虎のごと立向ひしも淺茅生ゝ露とけぬれゝゞゝこれる千々ゝいくさゝ犬じもの逃げてうせぬれ豊臣のいつの大臣そこをしもむかしび給ひあおいそしいそしき臣ゝ双おき建雄ゝ汝ゞ風ゝ音の遠音ふおぢてたゆたひし奴もあるを樫ゝ實のひとりぬけ出てゝて名ゝ千代に傳へむこれゞ此去るしの文とみ手ゞからたびて稱へし功さへ名さへ朽ちせず知る人の去かて語れゝ聞く人のきゝでつげどもかくろへる其おくつきゝ大日枝の雲にうもれてあら玉の年月へなり五百年ゝ半になれゝ生ゝ子のはつ子ゝ兄子が祖思ふ誠つくしてねもおろに跡をしとふとかにかくにいそしむ見れゝ其いさをまして去ぬばゆたま〳〵に人と生れて穢れたる名や流すべき益良夫ゝかく清らなる名をしたつべし

うち日さゝ宮部さゝをゝがたけびけむ其あと所おけむさめやも

十一月廿四日風あらく吹きていと寒かりける夕つかた筆さしふきてうちふし居てよめる

文机ゝ塵ふきまきて嵐さゝち寒き夕べに書かくと我をる時ふさなひちをつくや左ゝ皷うち笛

ふきたて〻謠ひかも舞ひかももらしくだつ世ぢ物の音高し新羅墨もるやみぎりゐみつの緒の琴とりさしてさかみつぎさふさきはもから振ぢ宴すらしもかしましき此夕暮か古に今もありせば千早振神の御前に物部ぢ八十氏人の榊葉を手草ゐとりてまさきづらかつらにかけて遊びけむ時おらまし玖御火白くたかましものを月草ぢうつり來し世ゐせむすべのたどきを去らに筆とらむ心も去らず風の音の遠き昔を去ぬびつるかも

中村良臣ぐ身まかりける年ぢ九月ぢ末つかた秋哀傷といへる心をよみて

と其子良弼がこひかこせければ

露霜ぢ秋さり衣吹きかへす風を時じみ芦垣のまがきに立ちてもみち葉のもぎにし人をうつら〳〵戀ひつ〻をれば蓼の穂に夕日くだちて雁なきわたる

豐ゐ良臣の家の名によしあり

九月廿九日鈴屋翁ぢ肖像をふしをがみて

みよし野の水分山をわしたゐ仰ぐもろ〳〵水分の神ぢ御前をわしたゐいつけもろ〳〵水分ゐくしき神かも古事を大人に傳へて鈴が音を四方にひゞかせ花ぐはし櫻が枝に朝づく日たゞさす如く日本の國の八千卷まさやかゐ說かせる限ねもおろに見つ〻かしおみのおれるゐおきてどなげくかくこそゐ神代去ぬばめ仰げもろ〳〵

と吉野のさくらが枝に朝日さしにはへるいろゐ神のみけしゝ

夢心地ぉ思ひつゞけゝる歌　嘉永二三年ばかりゐや

みおとぢうしほのくだりいかさまにくぐりゆく世ぢなゐふりて屋庭をかへし山さけて水田を埋ぇ飯ゐ飢て人ゐこやせどよき人ぢかきてつさへし古の書とりはしく玉をしもことゝ敷へて去ぢゐまりうておにたて川竹のよ聲ぢ去らぐ鳥のごとたちか舞ふらむぢろのごと守らひをるか荒金の土にうつゐし人さはに歎かふものを人さはに悲しぶものを大直日直日の神の神みたまあらびにけらし少女らに男たちそひさなそこの音もやら〻にうちならす左右を田にはり種まく見れば

春　戀

家近き野ぢ邊に生ふる若草の綠が中のつく〳〵し我手にとりて思ふてと書きやらましを翅ゐもかけましものを昨日かも霞のをちに雁ゐ歸りぬ

三月四日松原のたきにて鮎のむらがれるを見て

安氏川のそひの巖ぢ苔莚八重去く上に翁らゐ少女ゐすがり中ち等ゐゐむなをさすけうさゞして並ゐるみれば川の谷りのぼる鮎子の百千屯こ〻につどへど落さぎつ瀧の岩瀨の岩高みのぼりもあへぢ瀨を早みはしりもあへぢみもまるの玉かとみれば空ゐとび淵に隱ろひまきゐぐる谷の嵐に秋ぢ葉のちりかふなしてさく花にむつる〻蝶の雨ぢむさ亂る〻なせりそを

とると巖の上にさでとりて立てる男子が手もとゆく網もやるべくあまたゝびくめる鮎子を盆にみてかたまにわかち遠近の岸に並居て見る人のさかおになしみ家の妹がつとにもすなる山賤がうゝぶおもしろから人の桃のあそびもうま人の櫻のめでも夢にだに云ちゞ思はず苔の上の夕日を云きて岩枕せり

わか鮎のむれくる見れゞおちたぎつ白木綿花ゝ今さかりなり

大社の上官島重老が六十賀に歌よみてとこひおおせけるときよみて遣しける歌五首

八平手をうてや我叟うちなすゝ神代のてぶり朝よひにとるやわが筆筆とるゝれとつ世ぶりゝ弟つ世の我とる筆を古の歌にうちなし神宮にまをせ我叟大八洲清き國内に國へなりをりゝをりとも年月にこゝひかはす古ゝ道ゝまぢかし眞熊野ゝ神ゝはじめし古道ゝやもく行きよし云かぱり行きよき道もかりばねに足ふみまゞひ神ならふ心を云らに人くさの云この世をやつくさむ玉ちはふ神ならはゞて足乳根の親を思はぬふくろふのむさゝり心わら垣ゝ神ゝかやぐきのちひさお心村肝のむきゝまお〳〵おのも〳〵心ゝあらめど妻も子も雛さちくゝ友なふ鶴のまお鶴の直く正しく豊なる心ともしも春されゞさひづる鳥の鶯ゝ花ゝ柳ゝにおれ

なるゝ心ともしも花ゝなれ柳ゝにむれて豊なる鶴ゝ齢を萬たび千さびりさねて龜の上の蓬ゞ島の島子とし榮えたれこそ大神につかへさゝこそ神ならふをぢ

空の海に小波よせて朝霞四方に棚びき春風ゝふきのよろしも若浦の鶴ゝやのれる意宇の海ゝ龜ゝやのれる木海ゝ出雲ゝ海ゝ神代よりあひてしあれやむつ玉ゝあひてしあれやつぱらかにことかよふらし島の叟我にかたらく我島ゝ神ゝます島島をよみ松かゞ清し萬世ゝことはぎ云つゝうさゞしてけふゝ遊ばな堅魚つり鯛つりもてこ我ゝもよ鰐とりえたり出雲のや八雲の雲の八重垣のうまし雲わたこしよろしいざ御酒菜に然ゝども我鯛このむ三吉野ゝ山の雫の木の海の花さくら鯛それよゞむいでわつものに鰹こそひえめつくらめ弱肩に裃とりかけいざ率の眞名井にすゝぎたわきてさかみつぎしてけふゝ遊ばむ

飫宇海の其川千鳥千代とはぎ八千世とゞぎて今日もかも圓居もらしも言はがひ酒はがひし

て今もかもうさゞもらしも玉松のはしき島山ゆきめぐる月日も云らにうさゞすらしも

八重垣ゝ神のゆひがきはふりらゝ歌垣ゆはな翁とてわびやゝをらむ島がくりもだゝわらじ

と梅かざし柳かつらぎ手弱女に手をたづさはり若子さび我もまひてむ舞ひ出でし尾張ゝを

ちゝうまでとや我を思はむかき數ふ年の六十ゝ萬代の一日にたらじ琴とりて遊べ少女ら笛ふきて遊べをとこをちかへり立ちまふ見れゞ神山に鶴も遊べり龜もあそべり

事なさば十年も千年なさゝらば千年何せむなすといふ事ゝ何ごと花にさく出雲の神此國土をつくらひ給ひみやびかに成しをへまし丶幽事ゞなせりちふこと叟ゞせむわざゝ何わざ幽事を仰ぎかしこみつゝへくるあとのまに〳〵萬代に宮路通ひて歌ふもひあとゑぬびせよ横道の小道ありとも小道何せむ

菅原大神をゑぬびまつる歌

天なるひめ菅原菅原の草ゐ苅りそとあらかじめ歌へるものを黒髪にわくたをつけて白浪に玉ゝなげゞむ其光其くしみ玉天にみち國わとほりて久方此天のます人百八十の國のますらをます〳〵にとりてきはへる筆の束机わさて丶誰ゝなゞかぬ

登巴嶽時作歌

大瀧を引本いでて百船の舟津をすゞ椿さく八峯をさゝり神無月夕日かげろふくら谷の雪かきならし黒木たて刈庵造り柞葉に槻をりまじへ越方の萱に葺なし我ねたる衣の上に村時雨ふるかとすれば朝月夜さやかにさせば劔太刀腰にとりはき堅ゆひにわゆひ堅めて玄もと原おしなみゆけば叟がとる手火の光ゝ吹きおろゑ嵐にきえてせむゑべのたどきも玄らゑ山陰わ歎かひをれば夜ゞ〳〵夜こそあけぬゑ怪しくもまどへる道か此かたゝ行く方ならゑかの方ゞ入るべき道と杖とりて敬ふるまにま向股に霜はら丶かしたゐ臂に小笹かきわけはろ〳〵に登り來にける高鞆の巴が嶽ゝ嶽といふ嶽のことゞ〳〵峯といふ峯のことゞ〳〵神代よりまゝろひをれど春秋の花もにほはず小鹿だになかず苔むしろ五百重おりゑきさぶしけき峯おゝわれども天地此始此時に皇神のうゴの御手よりはなりきて成れる山ゝも熊野川岩垣淵も吉野川瀧つ河内もわだらひの清き瀬の音も此山の霧の雫ゞ山霧に袖うちゑめり臣の木のからきがもと此笹の葉のさやぐが上をゆけど〳〵限もゑらゑ平けき山にしあれば おりたゝむ谷を遠みか結ぶべき清水をなみゝ先ゞてる長も翁もおのも〳〵杖つきつかれおほゝしきさ霧が中に夕けして棄てし梅の實夏山とおひいづるまで春山と花さく迄ゐ年久に入ゝをりともつばらかにゐけゝ盡さじ飛驒人のうつ墨繩のひと筋に大和へいそげゆく鳥の影こそ見えね怒り猪のふしゝ刈藻ゝ山淺くなれるゑるしぞくれぬとも急げや子らと道もなき鷲の高原菅笠此をゞさにわけて畝尾越いゆきいたりて雲がくり大蛇ゑむとふ岩倉此麓の峰の玉だれの小葉の高巖此八束たるすゝの篠屋にはたゝきてさ夜茲守らひかけ道のまなこのくだり下りつく巨瀬の里回に佛さびさてる古寺是や此松此ゑおねのひきはへし河内の宮のかり宮の櫻の花此雪此中にちりゐしあとと梓弓今の現にいひつゞるおくつき處旅なれば はしきる衣の短衣いやおけゑども膝をりて我ゞをろゞむ冬おれば霜おく花此菊の花色なけれども折りとりて我ゞ手向くる花だにも千年まもらへつら〳〵に昔思へば久方此天雲さけ

て南ふき北吹きかはり岩垣ゝ熊野の淵ゝ荒男らが立居さゐがしかち瀧つ吉野ゝ瀧ゝ玉よろひ巌にくだけ清き瀬の神宮川ゝひぢりてに神かきにごしあらびたる世さへありしをかの嶽のをてもこのもに生ひをゝる臣ゝ木ゝをるや笹ゝ葉ゝ玄るや

反歌

手束杖三きだにをりてなげうてし巴がざけにきりたちわたる

神風歌

あなたふと風の尊さ神風といひつぎ來さる中つ世のいづの風はやおとさへぐ唐のおにけしさうしらに皇國せめむと百千船あるみにいざし大旗に小旗立並筑紫潟博多ゝ海の沖さけて攻め來るはしに遊つきていむかふ時に神風のあからしま風いやふきにいふきすさびてわるつみの底ふきかへし荒汐を空にみたしめ列なれる船のことく〳〵ひゝ碎きくだきうつれば石弓ゝ浪にはじかえ廣桙ゝいくりに折れて千萬ゝたふれ奴らせむをべのたどきを玄らに沖わへにおれ漂ひ玉藻なを浮ける屍ゝ荒金の土にふみなし天雲のそきへのきはみはろ〳〵にゆくべくなしぬ其風の音をかしこみ其風ゝ響を高み心さへ身さへをゝゝき神風ゝくをしき國と世々久につかふるもへば神風ゝ風の尊さあはれたふとさ

をさなき時より歌よむことを好みはべれどはか〳〵しきふしも侍らざりければ父翁のをゝにとて鰒玉集にのせて萬世につたへ侍れどみづからのゝ詠草とて殊更に人に見せべき心ゝまへも侍らざりしを折々の會などによめる中より十二十とうつしとりてもゝる人もまれ〳〵ゝゝ侍るにさいつ年いなばの年平こゝにありける頃とともによめる歌さらでも見きくまに〳〵懷ゝみなどにや書きとゞめけむ光平ゝ許に河内に冬おもりして書きあつめける一卷に又人々數そへ侍るもこれゝれ見え玄らゝふどかそれより十年餘りを經て心地そおなひ侍りし時なからむ後の形見ゝもとて義信ゝ事とりて古蔭らと共にこゝかしこの人々の許に傳はれるはた書櫃の奥におしやられしはしりゝきのやおどもをもあつめて同じさまにいゝづきける事とさはやぎて後にこそ語り侍りしか拙なき歌をしもさばかりあつめつる志の淺からぬに一昨年の秋ばかり其人うせにけれゝさまかへたる形見として常に見つゝよみひゝめ寫し違へなどを改めて千歌ばかりをついでも定めを拔出し侍れど弘仁よりこなたのめゝしき方に流れて神世のあとにつゞへき姿詞もなくいとやさしきすさびに侍るを一門ゝひたせめ

にせめてかく板ふさへゑらせ侍るよ嘉永六年霜月廿三日加納兄瓶ゑるを

二百五十八頁六行四句それだよ家の　二百五十九頁四行二句竹のあみ戸の　二百六十頁十四行かのゆくへ
柵らくゝひらかくばかり心のさまる朧月夜よ　二百六十一頁十二行二三句ちづくと共よおちぬめり　二百
六十二頁六行三句以下あや垣のふはやま櫻猶かも見む　二百七十四頁十行そよ島の羽ぶきのつゆよさきよ
けり大川のべの月草の花　以上ハ柿園詠草拔萃箇註よよる　編者識

柿園詠草　終

故柿園翁中頃名を兄瓶と改められしを後またもとの諸平にかへされたり詠草二卷早く世にはどこれりそハ嘉永六年の冬板にゑりたるなりかくて安政四年ゞ六月に俄に身まかられしに嘉永五年の頃よりの詠草ハ翁ハ更なり敎子どもゝとりたてゝかきつゞれる卷などもあらざめれバさて朽ちなむこともやと年頃心にかゝりていかで心の及ぶ限ハさぐりもとめて一卷ともなさばやと思ひわたれるにおのれらさきつ年より事にふれて文かよはすはど遙に此事をあひはかりてより文のゆきかひも更に度かさなりつゝ同じ心にいたづきて善水ゞみづからもさる又友どちのもたる又年平ゞかつ〳〵拾ひ得さるも思ひ出たるもあり又小谷古蔭がおおせたる一とぢ又をとゝしの事あて善水が浪華にものしける時佐々木春夫が許をとひしに春夫はた早くさる心ゑらひありて翁にこひもとめてもたる詠草二卷ありとて見せたるこれハ嘉永六癸丑年七甲寅年の歌なり又短冊帖をうつしたる一卷をも得させたるをあまねく合せ見るにおなじ歌をおゝおもそこおも記したるが多くつらねざまもいとゑどけなきをそれおれと取りわかちてかくついでてかき改めたるになむ

すべてもとの詠草によりてもれせれゞ鰒玉集の七編に入りたると同じ歌もいさゝかゝあり

末にあげたる蒙求のうた二百五十八首ありてれゝいつばかりよりよみいでられけむ題の半に至らずして歿られたるおとゝ見えたりさて大かたゝかの癸丑甲寅の卷の中にかきそへたるがいかなる故わか始のかた五十二首かけたりしを善水からくしてもとめいでて補へり

集中題の下また歌の左に折々見えたる註ゝ其據を玄めさむ爲に翁のみづからものせられたるを文の長きゝ今ちゞめて玄るせり

明治十二年九月

因幡　飯田年平
紀伊　瀬見善水

柿園詠草拾遺

○嘉永五年壬子詠草

若草　かつらゆふめざしたぐへて若草の末ふむ道の遠くもある哉

二月十六日の晝つ方にやありけむ濱木綿屋のをぢ安田長穂が許よりけふゝ我方わゝさはる事侍れゞ御許に一日一夜ばかり上人に御宿かし給へかし立走りなど玄給はゞこそあらめ假の宿りをな惜み給ひそと厚おえたる紙にかきて圓位ひじりの像のかけ繪をおこせけれゞ詞ゝなくて　何ばかりをしむ宿わゝあらねども梅の衾のなきぞかなしき

梅のふすま上人の集に見えたるを折よくも思ひいでられけるもの哉とてかしてより

思へ君梅のふすまの香に玄まゞひとやとがめむ心づくしを

又かへし　梅が香ハいとふうき世の塵ならし心づくしも折にこそよれ

夕つかたよりをぢきゝれり像を上座にかけてうゝへの花ゞめに山ぶきのまだふゝめるをさして長秋詠藻にもとづく

駒とめて見しよの人も忍びつる君わさゝげむ山ぶきのはな

長穂

山吹の花の露そふやどなれゞこゝゐもぬてと思はすやきみ

山家集の山吹の歌をさゐがら本歌といせり當座など手むけてわかるつとめてかけ繪を返すとて

根にかへる花も二度さきぬべくさしそふ月の昨日をぞまつ

長穂

御供物のおろしいたゝきぬとて

さしそはむ月こそ物ゝ思はすれ又ゑのぼしき花のもとかな

この贈答ゝことし二月ふたつあれゞなり

長穂幸年と共に柳の歌よみけるに

ふる里の板井のうへのくち柳むすびし影ぞあらたまりぬる

故里の奈良こそ春ゝさびしけれ柳のかつら折るひとをなみ

閏二月十六日濱木綿屋ゐて圓位上人の影前會に兼題春山家

ひま ゑらむ山櫻戸にきこゆなり花とゝゝはふるうぐひすの聲

櫻戸のまへのゐなはし夕かけて蛙きくとやひとのとふらむ

かゝまるもうしや蕨の折々ゝまがきの山をひとにとはれて

朝な〳〵垣内のたゐゝ若鮎つる我ゝとり見じあめのさし網

ふもと田ゝ蛙ゝ聲をさそはずゞ雨ともゑらじ松のゑたゝは

かきつ田の柳の糸にきのふけふあめむすばれて蛙なくなり

山なれてうれしきものゝ鶯のふるすに歸るこゝろなりけり

春月

袖の上にまだきこぼるゝ夕月のかげもをりさす花ぐるゝ哉

あま衣うらはつかしき袖の上におぼろ月夜のかげや重ねむ

霞に月のくもれるを

ひきわそぶ聲のとだえに春の夜の半の月ゝかすみはてぬる

澤春駒　澤水ゝ野飼のこまにまかせてむ苗代小田にひくべくもなし

花盛　朝日さす露の句をまちもあへゑ昨日を花ゝさかりとぞ見し

夜思花　さよふけて月の句にうもれゆく尾上のはなのあすの山かぜ

蛙田　むゝしわが夏見にそびて見し花のかげも戀しくなく蛙かな

春暮　みなくちの柳の糸ゝむすぶとも畔をゐはなちそ童すさびに

更衣　雨はるゝ垣ねのうばら夏ちかみ露もだわゝに花もよひせり

忘られぬ花のかとりと誰かいふなげの情のひとへばかりを

花ぞめのやまわけ衣いたづらに置やふるさむ笠もたぐへて

郭公

時鳥たがまことよりうの花のゆきのみ山をいでてなくらむ

ゑをりなきやま子規をちかへり若葉の月のかゞたどるらむ

あしの葉のそよ郭公ひとづてもおなじ堀江の月になくなり

雨の音にまぎれもぞせる子規くべき宵寐いおゝろしてせむ

時鳥田中のさとになきすてし聲のすゑつむからわねのはな

夏月

あき風にふれしひるねの枕よりわとのうつゝの夏のよの月

くれふきと窓の螢いはねどもこたへてたらす木々の白露

まばゆくもてらす螢かゆふけとふ花立花のかげさらずして

立花のゑたふく風にみだれずゞよるゝ螢やたまにぬかまし

ませれうちに通ふ螢のかげゑげみ夏さく菊も星とやゝ見ぬ

夏川の菱のうきづるくれまちてすだく螢のかげを見るかな

玉まきて少女さびせぬ袖もなし奈良のをがはに螢とぶ夜ゝ

やまゆりの露ゝ中々てりそひてかたぶく月にほたるとぶ也

水蓼の一穂ふたはゝまだきより色にいでてもとぶほたる哉

みづよりも涼しかりけりうゝせ物のかたみをもるゝ夏虫の影

とり捨し田づらの苗の一つゝゝ籠ゐこそこめゝ螢ながらに

水といへゞ恐びぐるまの轍ゐもなほかげとめて螢とぶなり

淺川わはれ五月のみだれゆゑとぶゝほたるの影もたえせで

みしま江の玉えの小菅露もよしよるこそからめ螢みがてら

濱木綿

みな月の日のま盛にさきゐけり眞砂がうへの濱ゆふのはな

苦熱

瓜たちて忘れし夏をまたさらにかへゝゆふ日の籬をぞもる

田上露

一つかゝゝタべをかけてかる稻に山田の露のふかさをぞゑる

菊

露やゑるまゞ下もえの春よりもきくのかきねわかけし心を

紅葉

一枝ゝゆみはり月のかげながら紅葉がりせし山づとにせむ

古屋菅實と共に何がしの院なる高照師をとぶらひける道ゝほどゐて

もみぢ葉の千入が中のふか緑松さへあきゝ見るべかりけり

霜をへて色まさりゆく木末かないつを千秋の初ゑはにせむ

十二月ばかり朝まだきより雪ふりける日書よむ窓より東の空を見いだせゞ城ゝ邊の松垣

ほのかにして向へる家の高松ゝ上葉ゝゑげみやゝ埋もれり

目をわたる鳥のゆくへの一つ松ゑづ枝をぐらき今朝の雪哉

山がらす花にみだれし夕ぐれいかずふもあらぬけさの白雪

雪の歌よみける時ある人とひきてやむごとなき御方例ならずおはしますが昨日けふむげによわらせ給ひぬることゝ語りさして歸るすなはち晴れければ思ふことありて野澤益謙のもとへ申し遣しける

ふると見し空も消けり定むべき夢の跡ふむけさのゆきゝに

○嘉永六年癸丑詠草

濱木綿屋ふて例の圓位上人の影前會すとて歌すゝめけるまうけ題餘寒

ゆくと見し昨日は雁もたち歸りかつる田づらに沫雪ぞふる

二月ばかり酒井一門と共に河北ある樹下の齋殿にものして宿りける時よめる

あけゆけば枕わかるゝ波の音に海邊のやどぞ朝いせらるゝ

春の夜のわくらの蜑の袖よりも間遠になれる浪のおとかな

ねさめずば有明がたの薄雲をとやまの松にかけて見ましや

春の歌の中に

朝菜あらふ木の川よどの竹筏いかにたゝめる春はみどりぞ

春　雨

櫻戸やはなちる雨のかをらずば音づれたえし雪のたまみづ

はれやらぬ霞と見しを東屋のまやはゑづくの音たつるまで

名草山の花見にゆきて

夕かげのはなの雫ゝそはめども寺井のひさごとる人もなし

風さそふ尾上の雲も花ならしふもとの松にうもゆきぞふる

ひと枝ゝをりてかざさむ鶯のとがむる聲もはなにきくべく

坂こえていつかとづれし山風ぞ櫻がもとのゆきのうはぶき

花ざらをすゝぐかゝひの水上やわしの高ねにとくるゝら雪

うつりゆく花のゑゝまゝとゝまらで嵐にまけし鐘のかと哉

この歌ゝ無言行者の草庵をすぎてよめり

さく花の木のまを渡る大舟ゝかならず風をたよりともなし

なぐさ姫ふりけむ花の白妙をいつすみぞめの袖にやつしゝ

名草山ふもとの里もふはふまでさきけむ花のかげぞ戀しき

ふはひけむ影とも云らで里人のたきゝになしゝ花ぞ悲しき

此二歌ゝ五十年ばかりをちづ方までいと大なる木のありける物語をきゝてよめり

白雲の七重のなみ木七かへりかひかはるとも花いふりせじ

この歌の二句經文による

鐘うてばこぼるゝ花を山鳩のよそげにわさるふる寺のには

これ日越の國の旅人おほし

雪もまだふる里いでし旅人のそでなぬらしそ花のゆふつゆ

去をりせむ人やまつらむ市女笠つぼめる花のかげに隠れて

なごりなくさけば亂れてとぶ蝶の袖にかさなる八重櫻かな

八重櫻

山吹　神なびの八重山吹におく露をうきみひとつの響とちらしつ

早苗　さ苗とる田みのゝ雫ひまもなきかはづの聲に雨とよむなり

牡丹　たきものゝから木のませを八重ゆひて花も富たる殿作せり

五月雨晴　うけらたく烟のひまに武藏野のをぐきも見えて雨晴わけり

五月ばかり有田郡栖原村の菊池保定が家をとふまらうどねにかりそめなる門ありて松聲竹色除聲色時更有聲色鳥啼花咲忘文章處則是文章といふ句を二つに別ちて左右の柱にかけたり門よりこなたに池をたゝへて山水を下樋もて通はせ岩にふるゝ音いとさやかなり

里人のまちまろおべる雨のうちにひとり園生の緑をぞ見る

此歌ゝ雨乞すとのゝ去れる頃ふりきぬればよめり

朝な〳〵庭たちならし見る毎に去らぬ木草の數まさりゆく

蚊遣たく宿わゝ去らじ山かげの岩もる水の夜はのひゞきを

わしがにの夕わりきする苔の庭はらはぬ露に五月雨ぞふる

蟋の蹇なり此家のうしろの畠中にありそこの邪は主人の詩集にくはしく見えたり

縣みにむかしの人のこましかばとこよの使はせかへらまし

遙萊使者墓

八月十五夜濱木綿屋わて月を見て

ふけぬめり月も去たゝる桐の葉の露わとだえし窓の秋かぜ

曉時雨

村時雨はれむとすればかき曇り有明の月の去らむまぞなき

○嘉永七年甲寅十一月改元安政詠草

子日　清正集による

昔おもふなぐさの濱の宮柱たちいでてけふも子日去てまし

船中聞鶯

かの岸に鹿をへだてゝきかましやふなぢなりけり鶯のこゑ

苦そゝぐわしたの雨のそぼ舟ゝ山本さらじうぐひすぞなく

みなと風はるとふくらし大ふねのまほになりぬる鶯のおゑ

梅

春日さす南のにはの雪少よりかげろふばかり梅が香ぞする

朝戸出の袖こそ薫れいつのまにさきてい梅の我を待ちけむ
まち酒に浮べる香こそあはれなれ梅さく宿とあすい訪れむ
袖すぐるこちのかへしに梅が香もかのが垣ねのやつれをやとふ

餘寒

例の圓位上人の影前會に春風

若菜にる烟のをちをゆくたづのつばさに清し小野の春かぜ
浪のまにつみし若菜もたけぬらむあまの袂に風かもるなり
ひとむらの竹に隔たる花の香いよそげにもふく春はかぜ哉
くぬぎ原のこる古葉のそよさらに寒しも何か風のさゆらむ
夕されば雲雀の聲のさいなみを麥生によせて春かぜぞふく

三月一日小杉俊夫が家の糸櫻を見て人々と共に

をちかへり見ばや老木の糸櫻よゐまつはるゝ色香といなし

清廼舍君根來山のわたりに五日六日獵し給ひて昨日かへらせ給へるに猪鹿の數六十まり八え給ひぬとぞ聞ゆるいと夥しきことゝ人々いひさわぐもげにことわりなり其あとをとむるゐいあらねども花を見さして歸らせ給ひぬらむと口をしくて杉浦武知と共に九日の朝より夕かけて出たつかしこゐて歌をぞゐ其數ばかりえばやと思ひしかど眞盛の色香に

うかれてい何事かいはれむ僅に一つ二つうめきて數たらぬかぎりい小やかなる盃をあまたゝび傾けて補へるをぞ吾ともの櫻狩のさちとい申すべき

夜ごもりの霞のをちもわけぬらし花を隔てゝきゝもなく也
射目たてし昨日のあとか山のはの松にかくるゝ花の白ゆき
いかり猪のうゞきに花やちりぬらむ淘雪寒しうゞをまは松
櫻さくかた山すげのねごろでらいつの春まつ室のとざしぞ
つまわかれなくらむ鹿のねごろ山今年の秋を思ひこそやれ
春山の花のさちくとりかへむ昨日のまゆ弓けふのさかづき

此日女ども多し

あらを田の淺紫の花むしろふりたついもがそでもにほへり
坂こえて野風にむかふ妹がひもかへりみすれば花い霞めり

十二日若浦此十如院ゐて花を見て

見もはてぬ朧月夜はゆめなれや竹の葉でしに花にほふなり
我をおきて獨も蝶のねぶるかな夢ゐや花のさきまさるらむ

二十三日雨ふる和泉國金熊寺の里の矢野守光がもとゐて雨中の題をさぐりてうさよみけ

る中に

雨中田園　すもゝちるおやの荒垣雨ぞげみ桑のはだをに濡てとるらし

雨中園碁　打ぞきる程とや雨のふりさしゝはてしぞおこそ音い聞ゆれ

圓珠院の會に早苗

郭公きのふきなきて今日ふりぬわすのさ苗い雨にとりてむ

こがくれのともしの影い夜深きをゆひも數多に急ぐさ苗う

石上ふるの山田にとるなへのみづ葉さしたり國ぞさかえむ

此うさの四句い有田郡の田植歌わよる

菊池保定ぐもとへ五月ばかり旋頭歌

雨さむき今年の夏かこぞの夏こそ時鳥松のは山の風も待ちしか

市中いわなかしがまし去年の夏こそ池水にひれきる鯉のおともきゝしか

くりかへす書あつかはし去年の夏こそ夕波のわびきの網に心よせしか

窓前遣　窓すぎしよひの螢やいけ水のはちすにすがるけさの玄ら露

納涼　夏いたゞ北へひぢをるはそ殿の風のゆきゝに袖をまかせむ

山寺納涼　瀧どのをおよひもとふのくれ橋の色なき風に沓のおとする

朝顔　うらがれし竹のま垣のをちこちにやつれてさける朝顔の花

八月十四夜舞子濱の旅やどりわて

心あての雨ぐも玄ろくなりにけり月わ夜しはの光さすらむ

十五夜　島つ田のたりはも見ゆる月影に明石のおきい千船なみよる

ゆめのより野島へ渡るさを鹿のあとも見ゆべくてる月夜哉

千鳥（初句海部郡の村名）　えのくまにかざがくれせし芦のはゝ花を誘ひてたつ千鳥哉

雲蓋院ゐて水仙を

かつこはるわかねのもとの青葉より身に玄むばかり花の香ぞする

遂生のかれふゞ中の若葉だに人めくものをはなさきわけり

雪ふりけるわした圓珠院をとぶらひけるに程もなくはれ渡りければ

あともなく消えし雪かな若の浦の松の蔭より舟出せましを

夜雪　雪おもる竹のはゝしに三日月のひとりくれぬる宵の空かな

○霞以下多明年紀者故不政次第之

霞　かげもなき山もとさしてゆく鶯のつばさになびく夕霞かな

殘雪　梓弓はるの光にみがゝれてすゑ野のゆきや玄づこゝろなき